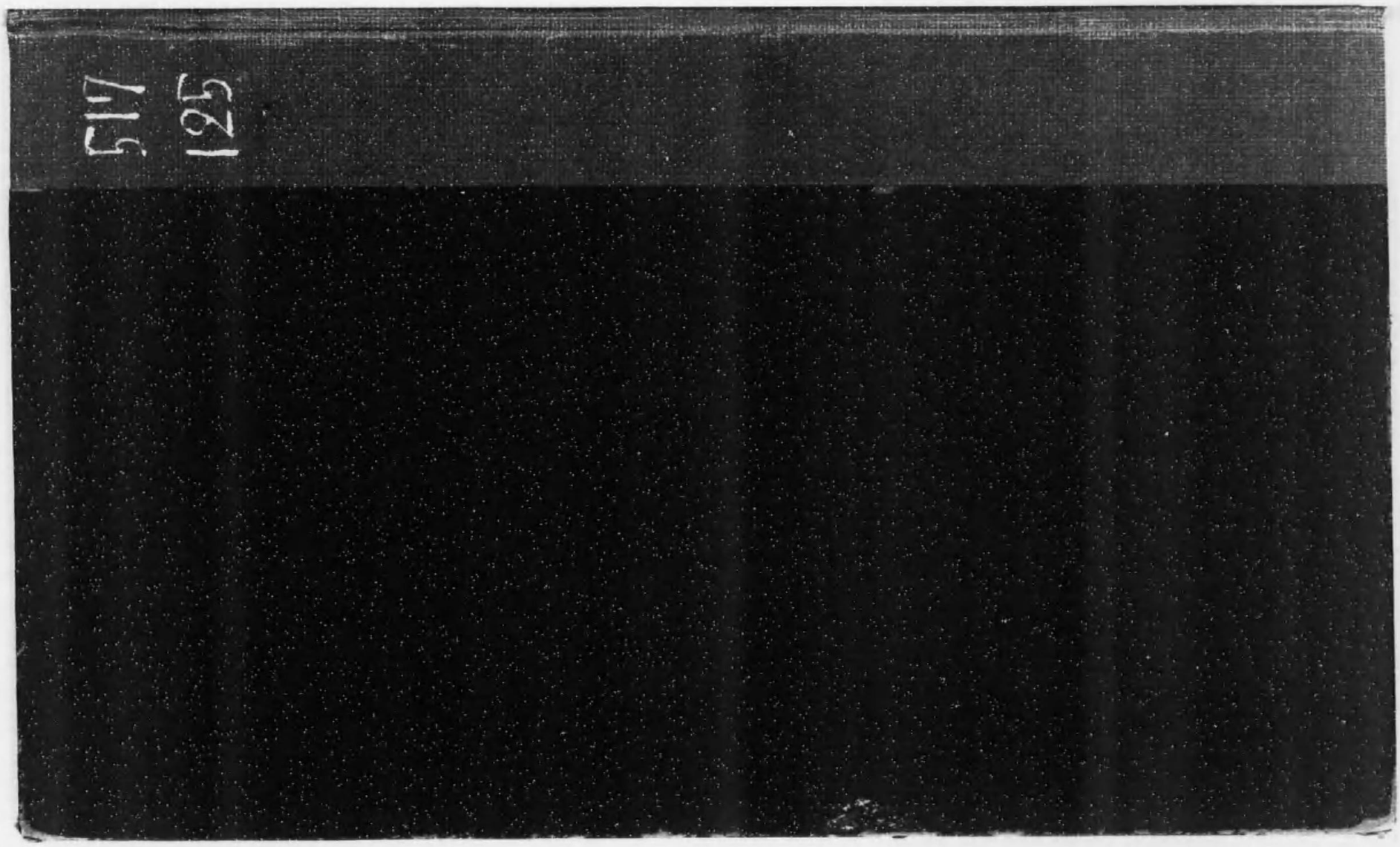
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9
18 m
90
1 2 3 4 5

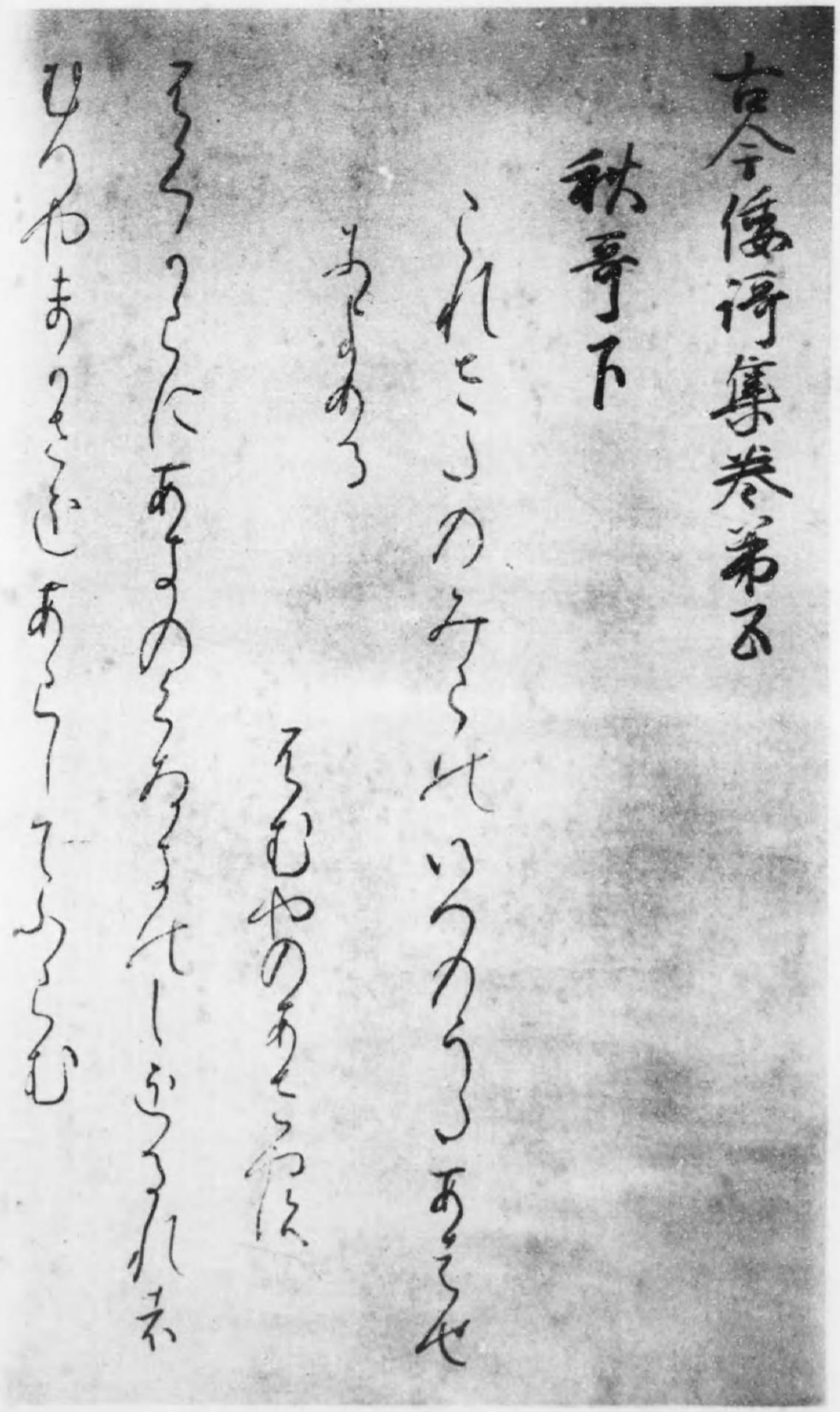

517
125

25.629

M7-125

校註古今和歌集

大正
12. 2. 5
内交



紀貫之筆（高野切）

緒言

一、世に古今集の善本がありませんゝ單行本も乏しいのです。されば本書は、全く時代の要求で生まれたものであります。又手輕ないう。

一、本文は、普通本を底本にして、傍ら諸本を參酌し、正確な校合を施しました。

一、頭註は、成るべく簡明を主としましたけれど、又出來るだけ十分に、語釋と意釋とを施すことを怠りません。

一、序文は、後人の附註、及びその攙入と思はれる處を取り出して、文理をとほしました。これでほゞ、原文の眞面目を窺へることになりませう。

一、卷首には集中の歌の索引を掲げ、卷尾には作者の列傳を掲げ得ま

したことを、喜んでをります。

一、口繪は、紀貫之筆の高野切から採つたものであります。

一、かやうに周密な注意を拂ひました本書は、渺たる一冊子ではありますが、本集の研究上にも殆ど遺憾がなからうかと思ひます。

大正十一年十二月

金子元臣しるす

校註 古今和歌集目次

類句索引……一—一四
序……一
春歌上……(巻一)……九
春歌下……(巻二)……二〇
夏歌……(巻三)……三一
秋歌上……(巻四)……三六
秋歌下……(巻五)……四七
冬歌……(巻六)……五八
賀歌……(巻七)……六三
離別歌……(巻八)……六七
羇旅歌……(巻九)……七五
物名……(巻十)……八〇

戀歌一……（卷十一）……八八
戀歌二……（卷十二）……九七
戀歌三……（卷十三）……一〇六
戀歌四……（卷十四）……一一五
戀歌五……（卷十五）……一二五
哀傷歌……（卷十六）……一三七
雜歌上……（卷十七）……一四五
雜歌下……（卷十八）……一五七
雜體……（卷十九）……一六九
大歌所御歌……（卷二十）……一八五
墨滅之歌……一九〇
序……一九三
作家列傳……一九七

（目次終）

類句索引

一、本索引は毎首の初句を五十音順に排列したり。

一、同一の初句ある場合には、更に第二句を掲げたり。

一、長歌五首はその反歌のみを掲げたり。

あ

あかざりし　一六六
あかずして
—つきのかくるる　一四八
—わかるるそでの　七三
—わかるるなみだ　七三
あかつきの
あかでこそ　一三〇
あかなくに　一四九
あきかぜに　五三
—あふたのみこそ　一三五
—あへずちりぬる　五三
—かきなすことの　一〇一
—こゑをほにあげて　四一
—はつかりがねぞ　四一
—ほころびぬらし　一七八
—やまのこのはも　一三〇
あきかぜの
—ふき上にたてる　五一
—ふきうらがへす　一三五
—ふきとふきぬる　一三五
—ふきにしひより　三六
—ふきにしひより　四八
—みにきむければ　九七
あきかぜは　一三〇
あききぬと　三六
あきぎりの
—ともに立出でて　七一
—はるるときなき　一〇〇
—はれてくもれば　一七八
あきぎりは
あきくれど
—いろもかはらぬ　五〇
—つきのかつらの　一七八
あきくれば
あきちかう
あきといへば
あきならで
—あふことかたき　四四
—おくしらつゆは　一三七
あきなれば
あきのきく
あきのたの
—いれてふことも　一三九
—ほにこそひとを　九六
—ほのへをてらす　九六
あきのつき
あきのつゆ
あきののに
—おくしらつゆは　四三
—ささわけし朝の　一〇七
—つまなきしかの　一八〇
—なまめきたてる　一七七
—ひとまつむしの　四〇
—みだれてさける　一〇二
—みちもまどひぬ　四〇
—やどりはすべし　四三
あきののの
—くさのたもとか　四六
—をばなにまじり　九一
あきのやま　五五
あきのよの
—あくるもしらず　四〇
—つきのひかりし　三九
—つゆをばつゆと　四八
あきのよは　四〇
あきのよも　一〇九
あきはぎに　四三
あきはきぬ
—いまやまがきの　八一
—もみぢはやどに　五三
あきはぎの
—したばいろづく　四三
—はなさきにけり　四三
—はなをばあめに　七三
—ふるえにさける　四三
あきはぎも　四〇
あきはぎを　四三
あきをおきて　五三
あけたてば　九六
あけぬとて
—いまはのこころ　一〇九
—かへるみちには　二一〇
あさぢふの　九三
あさつゆの　一三九
あさつゆを　八三
あさなあさな　九三
あさなけに　六九
あさぼらけ　六〇

あさみこそ 一〇六
あさみどり 一三
あしがもの 九五
あしたづの
—たてるかはべを 一五四
—ひとりおくれて 一六七
あしひきの
—やましたみづの 九一
—やまたちはなれ 八一
—やまだのそほつ 一七九
—やまのまにまに 一五九
—やまべにいまは 一四〇
—やまべにをれば 八六
—やまほととぎす 三三
—やまほととぎす 九三
あしべより 一三五
あすかがは
—ふちはせになる 一二六
—ふちにもあらぬ 一六六
あすしらぬ 一三九
あだなりと 一八
あたらしき 一八五
あちぎなし 八五
あづさゆみ
—いそべのこまつ 一五三
—おしてはるさめ 一三
—はるたちしより 二六
—はるのやまべを 三七
—ひきののつづら 一二八
—ひけばもとすゑ 一〇四
あづまぢの 一〇三
あなうめに 八〇
あなこひし 二一七
あはずして 一〇七
あはぬよの 一〇七
あはれてふ
—ことこそうたて 一五八
—ことだになくば 九三
—ことのはごとに 一五八
—ことをあまたに 三一
あはれとも 一三三
あひにあひて 一三六
あひみずば 一八五
あひみぬも 八五
あひみれば
—いそべのこまつ 一五三
あふみのや 一〇七
あふみより 一三五
あまぐもの 八三
あまつかぜ 一六一
あまのがは
—あさせしらなみ 三七
—くものみをにて 一四八
—もみぢをはしに 三七
あまのかる 一三三
あまのすむ 三一
あまのはら
—ふみとどろかし 一二八
—ふりさけみれば 七五
あまびこの 一六一
あめによる 一五三
あめふれど 四九
あめふれば 四九
あやなくて 一〇八
あらたまの 一六二
—かたみとてこそ 一三四
—かたみもわれは 一三四

—それともみえず　六〇
—たちよるばかり　一四
—にほふはるべは　一四
—みにこそきつれ　一七七
うらちかく　一七七
うらみても　五九
うれしきを　一三四
うゑしうゑば　一四五
うゑしとき　五〇
うゑていにし　五〇
うゑてゐにし　二八

え

えぞしらぬ　六九
えだよりも　三三

お

おいぬとて　一五一
おいぬれば　一五一
おいらくの　一五〇
おきつなみ　一五三
おきのぬて　一九〇
おきへにも　九五
おきもせず　一〇六
おくやまに　四二
おくやまの　五三
おしてるや　九六
おそくいづる　一五〇
おちたぎつ　一四八
おとにのみ　一五五
おとはやま　八八
—おとにききつつ　八八
—けさこえくれば　三三
—こだかくなきて　七〇
おなじえを　四八
おほあらきの　一五〇
おほかたの　三八
おほかたは　三八
—つきをもめでじ　一四八
—わがなもみなと　二三
おほぞらの　一九〇
おほそらは　九五
おほぞらを　一〇六
おほぬさと　四二
おほはらや　五三
おほひいづる　九六
—ときはのやまの　一五〇
—ときはのやまの　一四八
おもひいでて　一五五
おもひきや　八八
おもひけむ　八八
おもひせく　八八
おもひつつ　三三
おもひやる　七〇
—こしのしらやま　四八
—さかひはるかに　一五〇
おもふてふ　三八
—ことのはのみや　一二三
—ひとのこころの　一八〇
おもふどち　一四三
—はるのやまべに　二六
—ひとりひとりが　一二三
—まとゐせるよは　一四五
おもふとも　一二九
—かれなむことな　一三三
—こふともあはむ　九二
おもふには　九二
おもふより　三二
おもへども　九一
—おもはずとのみ　一八〇
—なほうとまれぬ　一七九
—ひとめづつみの　一三三
—みをしわければ　六六
おろかなる　九八

か

かがみやま　一五〇
かがりびに　九四
かがりびの　九四
かきくらし　一四一
—ことはふらなむ　七四
—ふるしらゆきの　九九
かきくらす　一一〇
かきりなき　一一〇
—おもひのままに　一一三
—きみがためにと　一四五
—くもゐのよそに　六七
かぎりなく　七四
かくこひむ　一二八
かくしつつ　六三
—とにもかくにも　六三
—よをやつくさむ　一五三
かくばかり　一五三
—あふひのまれに　八一
—をしと思ふよを　三九
かくれぬの　一八〇
かけりても　一九〇
かげらふの　一三三
かずかずに　一三三
—おもひおもはず　二九
—われをわすれぬ　一四三
かすがのに　六五
かすがのの　一二
—とぶひののもり　八九
—ゆきまをわけて　一三
—わかなつみにや　二
かすがのは　一〇
かすみたち　二五
かすみたつ　一五五
かぜのうへに　一五五
かぜふけど　一五五
かぜふけば　一六六
—おきつしらなみ　五六
—おつるもみぢば　一二四
—なみうつきしの　一〇三
—みれにわかるる　一五〇
かぞふれば　九〇
かたいとを　一四七
かたたちこそ　一二四
かたみこそ　八五
かぢにあたる　八二
かつこえて　一四八
かつみれど　一〇八
かれてより　八五
かのかたに　三六
かはかぜの　二八
かはづなく　九八
かはのせに　二五
かひがれを　一八九
—さやにもみしが　一八九
—れこしやまこし　一八九
かへるやま　六八
—ありとはきけど　七〇
—なにそはありて　一八六
かみがきの　一三九
かみなづき　一五〇
—しぐれにぬるる　九〇
—しぐれふりおける　一四七
—しぐれもいまだ　四七
かみなひの　一三四
—みむろのやまを　八五
—やまをすぎゆく　五五
かめのをの　一五三
からごろも　一〇四
—きつつなれにし　八五
—たつひはきかじ　一六四
—なればみにこそ　一五五
—ひもゆふぐれに　四七
かりくらし　三九
かりごもの　一四〇
かりそめの　四七
かりてほす　四七
かりのくる　八〇
かれはてむ　一八一
かれるたに　一三六
かめのをの　一三一
からごろも　一一四
—きつつなれにし　一一四
—たつひはきかじ　一一四
—なればみにこそ　一一四
—ひもゆふぐれに　一一四
かりくらし　一一四
かりごもの　一一四
かりそめの　一一四
かりてほす　一一四
かりのくる　一一四
かれはてむ　一一四
かれるたに　一一四

き

きえはつる　四七
きたへゆく　四七
きにもあらず　一六〇
きのふこそ　一五五
きのふといひ　六二
きみがうゑし　一四二
きみがおもひ　一〇八
きみがさす　一五六
きみがため　一五三
きみがなも　一二一
きみがゆく　七三
きみがよに　九〇
きみがよは　一七四
きみこずば　一八七
きみこふる　一一七
—なみだしなくば　九九
—なみだのとこに　九九
きみしのぶ　四〇
きみといへば　一二五
きみならで　一四
きみにより　一四
きみまさで　一四三
きみやこし　七七
きみやこむ　七七
きみをおきて　一六〇
きみをおもひ　一五三
きみをのみ　一四二
—おもひれにみし　一〇四
—おもひこしぢの　一六四
きよたきの　一五五
きりたちて　四七
きりぎりす　三九

く

くさふかき　一四〇
くさもきも　四七
くべきほど　八〇
くもはれぬ　一八一
くももなく　一三六
くもりびの　一三一
くもゐにも　六九
くるとあくと　一五
くるるかと　三四
くれなゐに　一八一
くれなゐの　一八一

—いろにはいでじ 一三三
—はつはなぞめの 一三三
—ふりでつつなく 一〇三

け

けさきなき 三三
けさはしも 二一〇
けぬがうへに 六〇
けふこずば 一八
けふのみと 三〇
けふひとを 一九一
けふよりは 三八
けぶりたち 八四
けふわかれ 六七

こ

こえぬまは 一〇一
こきちらす 一五四
こころあてに 三三
こころがへ 九五
こころから 八〇
こころこそ 一三三
こころざし 一〇
こころをぞ 一二六
こしときと 一九〇
こぞのなつ 三四
こづたへば 三六
こととしより 一六
こととならば 一八〇
—おもはずとやは 七三
—きみとまるべく 一四三
—ことのはさへも 三三
—さかずやはあらぬ 一〇四
—ことにいでて 一二九
こぬひとを 五九
このかはに 二〇
このさとに 七九
このたびは 三八
このまより 三七
こひこひて 五七
—あふよはこよひ 八〇
—まれにこよひぞ 一三三
こひしきが 一〇
こひしきに 一二六
—いのちをかふる 一九〇
—わびてたましひ 三四
こひしくば 三六
—したにをおもへ 一六
—みてもしのばむ 一八
こひしとは 一〇〇
こひしなば 四六
こひしれと 二八
こひすれば 五〇
こひせじと 五二
こひわびて 一二九
こふれども 三三
こまなべて 三四
こむよにも 二六
こめやとは 三九
こよひこむ 一八六
こよろぎの
こりすまに 一〇八
こゑたえず 三九
こゑはして 一四三
こゑをだに

さ

さかさまに 一五〇
さかしらに 一八一
さきそめし 一五六
—ときよりのちは 五三
—やどしかはれば 二五
さきだたぬ 一九
さくはなは 三三
さくらいろに 一四
さくらちる 二三
さくらばな 一六
—さきにけらしな 八
—ちらばちらなむ 二〇
—ちりかひくもれ 四四
—ちりぬるかぜの 三三
—とくちりぬとも 三三
—はろくはれる 一八
ささのくま 一八七
ささのはに 三三
—おくしもよりも 九
—おくはつしもの 一三
—ふりつむゆきの 一五〇
さつきこば 三一
さつきまつ 三三
—はなたちばなの 三一
さつきやま 一〇〇
さとはあれて 四六
さとびとの 二八
さほやまの 五〇
—ははそのいろは 五二
—ははそのもみぢ 三三
さみだれに 三三
さみだれの 三四
さむしろに 二六
さよなかと 三九
さよふけて

し

—あまのとわたる 一二
—なかばたけゆく 八四
しひてゆく 七四
しほのやま 六三
しもとゆふ 一八五
しものたて 五四
しもやたび 一八六
しらかはの 一二三
しらくもに 三九
しらくもの
—こなたかなたに 六九
—たえずたなびく 一五八
—やへにかさなる 七〇
しらたまと 一〇三
しらつゆの 四八
しらつゆも 四九
しらつゆを 八二
しらなみに 五五
しらなみの 八八
しらゆきの 一八三
—ところもわかず 五九
—ともにわがみは 一八三
—ふりしくときは 六六
しりにけむ 五四
しるしなき 一八六
しるしらぬ 一二三
しるといへば 三九

す

すがるなく 六〇
すまのあまの 一〇三
—しほやきごろも 四八
—しほやくけぶり 四九
すみぞめの 八二
すみのえの 五五
—きしによるなみ 八八
—まつほどひさに 一二九
—もみぢばながる 一五三
—もみぢみだれて 一五五
すみよしと 一五三
すみよしの 六六
するがなる 九一

せ

せみのこゑ 一三〇
せみのはの 二四
—ひとへにうすき 一八〇
—よるのころもは 一四七
せをせけば 一三八

そ

そこひなき 一三
そでひぢて 九
そへにとて 一五三
そまびとは 一九〇
それをだに 一三四

た

たえずゆく 一三〇
たがあきに 四四
たがさとに 一二九
たがために 一五五
たがための 四九
たがみそぎ 一六七
たぎつせに 一〇二
たぎつせの
—なかにもよどは 九二
—はやきこころを 一二三
たちかへり 八九
たちどまり 五六
たちぬはぬ 一五五
たちわかれ 六七
たつたがは 九
—にしきおりかく 五八
—もみぢばながる 五三
—もみぢみだれて 五五
たつたひめ 五七
たなばたに 三七
たにかぜに 一二

たれしあれば　二三
たのめこし　六六
たのめつつ　三七
たまかづら　一〇五
—いまはたゆとや　二七
—はふきあまたに　一九
たまくしげ　一〇
たまだれの　四九
たまぼこの　六四
たむけには　一四七
たもとより　五四
たらちれの　一九〇
たれこめて　一六
たれしかも　一八
たれみよと　一四三
たれをかも　一五二

ち

ちぎりけむ　三七
ちぢのいろに　二三
ちどりなく　六六
ちのたみだ　三七
ちはやぶる　一〇五
—うぢのはしもり　一五二
—かみなひやまの　四七
—かみのいがきに　四九
—かみのきりけむ　六四
—かみよもきかず　五四
—かものやしろの　九〇
—かものやしろの　一八九
ちられども　四九
ちりぬとも　一六
ちりぬれば　一六
—こふれどしるし　一八
—のちはあくたに　八二
ちりをだに　三五
ちるとみて　一六
ちるはなの　二五
ちるはなを　二六

つ

つきかげに　三二
つきぐさに　六六
つきみれば　三七
つきやあらぬ　四九
つきよには　六四
—こぬひとまたる　五四
—それともみえず　九〇
つきよよし　一七
つくばねの　四九
—このもかのもに　一六
—このもとごとに　一六
—みれのもみぢば　八二
つつめども　一八九
つのくにの　三五
—なにはおもはず　九七
—なにはのあしの　一〇三
つひにゆく　一四四
つまこふる　四四
つゆながら　五〇
つゆならぬ　一〇三
つゆをなど　一四四
つるかめも　六五
つれづれの　一〇六
つれなさを　一四九
つれもなき　一三四
—ひとをこふとて　九四
—ひとをやれたく　九〇
つれもなく　一三〇

て

てもふれで　一〇四

と

ときしらあれ　一二九
ときすぎて　一三一
ときはなる　一一二
としごとに　一四四
—あふとはすれど　五〇
—もみぢばながす　一三七
としのうちに　九
としふれば　一七
としをへて　一〇六
—きえぬおもひは　一〇三
—すみこしさとを　一四三
—はなのかがみと　一五
とどむべき　二九
とどめあへず　一五〇
とぶとりの　九五
とりとむる　一五〇

な

ながしとも　一〇九
ながれいづる　八六
ながれては　一五六
なきこふる　一二三

なきとむる　二九
なきひとの　一四二
なきわたる　四三
なくなみだ　一三七
なげきこる　一八二
なげきをば　一八三
なつぐさの　八六
なつとあきと　三五
なつなれば　九二
なつのよの　三四
なつのよは　三五
なつひきの　一二八
なつむしの　九六
なつむしを　一〇三
なつやまに　三四
—こひしきひとや　三三
—なくほととぎす　一二
なとりがは　一八二
なにかその　七七
なにしおはば　一五五
なにはがた　一四七

ぬ

ぬきみだる　一五四
ぬししらぬ　四五
ぬしなくて　一五五
ぬしやたれ　一四七
ぬばたまの　一六三
ぬるがうちに　一五三
ぬれつつぞ　一八二
ぬれてほす　四五

ね

ねぎごとを　四三
ねてもみゆ　九四
ねぬるよの　八〇
れになきて　八五

の

のこりなく　一一二
のちまきの　一三八
のとならば　一二九
のべちかく　一六三
—うつりにけりな　二六
—かすみにこめて　一三
—ただひとさかり　八四
—ゆきにまじりて　六二
はなのかを　二
はなのきに　八三
はなのきも　一三
はなのごと　一四
はなのちる　二五
はなのなか　八七
はなみつつ　五一
はなみれば　一二五
はなよりも　一四一
はやきせに　九四
はるがすみ　二五
—いろのちぐさに　二五
—かすみていにし　四一
—たつをみすてて　一三
—たてるやいづこ　九
—たなびくのべの　一七九
—たなびくやまの　二〇

一四四	一四三	一四二	一四一
一四〇	一三九	一三八	一三七
一三六	一三五	一三四	一三三
一三二	一三一	一三〇	一二九
一二八	一二七	一二六	一二五
一二四	一二三	一二二	一二一
一二〇	一一九	一一八	一一七
一一六	一一五	一一四	一一三
一一二	一一一	一一〇	一〇九
一〇八	一〇七	一〇六	一〇五
一〇四	一〇三	一〇二	一〇一
一〇〇	九九	九八	九七
九六	九五	九四	九三
九二	九一	九〇	八九
八八	八七	八六	八五
八四	八三	八二	八一
八〇	七九	七八	七七
七六	七五	七四	七三
七二	七一	七〇	六九
六八	六七	六六	六五
六四	六三	六二	六一
六〇	五九	五八	五七
五六	五五	五四	五三
五二	五一	五〇	四九
四八	四七	四六	四五
四四	四三	四二	四一
四〇	三九	三八	三七
三六	三五	三四	三三
三二	三一	三〇	二九
二八	二七	二六	二五
二四	二三	二二	二一
二〇	一九	一八	一七
一六	一五	一四	一三
一二	一一	一〇	九
八	七	六	五
四	三	二	一

一四四	一四三	一四二	一四一
一四〇	一三九	一三八	一三七
一三六	一三五	一三四	一三三
一三二	一三一	一三〇	一二九
一二八	一二七	一二六	一二五
一二四	一二三	一二二	一二一
一二〇	一一九	一一八	一一七
一一六	一一五	一一四	一一三
一一二	一一一	一一〇	一〇九
一〇八	一〇七	一〇六	一〇五
一〇四	一〇三	一〇二	一〇一
一〇〇	九九	九八	九七
九六	九五	九四	九三
九二	九一	九〇	八九
八八	八七	八六	八五
八四	八三	八二	八一
八〇	七九	七八	七七
七六	七五	七四	七三
七二	七一	七〇	六九
六八	六七	六六	六五
六四	六三	六二	六一
六〇	五九	五八	五七
五六	五五	五四	五三
五二	五一	五〇	四九
四八	四七	四六	四五
四四	四三	四二	四一
四〇	三九	三八	三七
三六	三五	三四	三三
三二	三一	三〇	二九
二八	二七	二六	二五
二四	二三	二二	二一
二〇	一九	一八	一七
一六	一五	一四	一三
一二	一一	一〇	九
八	七	六	五
四	三	二	一

ものごとに 三八
もみぢせぬ 四七
もみぢばの 四〇
—ちりてつもれる 五五
—ながれざりせば 五四
—ながれてとまる 五四
もみぢばは 五七
もみぢばを 一四三
ももくさの 四六
ももちどり 一三
もろこしの 一八一
もろこしも 一二八
もろともに 七〇

や

やどちかく 一四
やどりして 二七
やどりせし 一三
—はなたちばなも 三三
—ひとのかたみか 四五
やまかくす 七七
やまかぜに 七三
やまがつの 一三四
やまがはに 五六
やまがはの 一六八
やまざくら 九〇
—かすみのまより 一六
—わがみにくれば 一六
やまざとは 四三
—あきこそことに 五八
—ふゆぞさびしさ 一五八
—もののさびしき 一五八
やましなの 一九二
—おとはのたきの 一二三
—おとはのやまの 一二七
やましろの 一六六
やまたかみ 六六
—くもゐにみゆる 九一
—したゆくみづの 八三
—つれにあらしの 一六
—ひともすさめぬ 一六
やまかつの 一二四
やまのゐの 五六
やまぶきの 一六八
やまぶきは 一六八
やよやまて 九五

ゆ

ゆきかへり 五八
ゆきとのみ 七〇
ゆきのうちに 一五八
ゆきふりて 一三〇
—としのくれぬる 九九
—ひともかよはぬ 一五九
ゆきふれば 一六〇
—きごとにはなぞ 一六〇
—ふゆごもりせる 一五一
ゆくとしの 一七
ゆくみづに 一五八
ゆふぐれの 八八
—みつつわがこし 二六
ゆふぐれは 九〇
ゆふされば 九六
—いとどひがたき 五八
—ころもでさむし 二三
—ひとなきとこを 二三四
—ほたるよりけに 九五
ゆふづくよ 九五
—おぼつかなきを 七八
—さすやをかべの 九一
—をぐらのやまに 七七
ゆめぢには 一三
ゆめぢにも 九九
ゆめとこそ 一三八
ゆめにだに 一三七
ゆめにだも 一二五
ゆめのうちに 一四四

よ

よしのがは 九四
—いはきりとほし 九二
—いはなみたかく 八八
—きしのやまぶき 二六
—みつつのこころは 一二一
—よしやひとこそ 一三一
よそながら 一八三
よそにして 九五
よそにのみ 一四
—あはれとぞみし 一三六
—きかましものを 一三六
—こひやわたらむ 七〇
よそにみて 七七
よどがはの 一三〇
よととともに 九九
よにふれば 一五九
—うきこそまされ 一五九
—ことのはしげき 一六〇
よのうきめ 一六〇
よのなかに 一五八
—いづらわがみの 一五八
—さらぬわかれの 一五一
—たえてさくらの 一七

—ふりぬるものは 一四九
よのなかの 一八三
—うきたびごとに 一八三
—うきもつらきも 一五八
—うけくにあきぬ 一五九
—ひとのこころは 一三三
よのなかは 一八三
—いかにくるしと 一六五
—いづれかさして 八九
—かくこそ有けれ 一五七
—なにかつれなる 一五七
—むかしよりやは 一五八
—ゆめかうつつか 一五九
よのなかを 一八三
よのまにも 九八
よひのまも 一八六
よひよひに 一〇三
—ぬぎてわがぬる 九三
—まくらさだめむ 三三
よやくらき 一〇六
よろぐよを 一八四
よろづよを 六五
よをいとひ 一九
よをさむみ 九八
—おくはつしもを 四一
—ころもかりがね 一六〇
—よをすてて 六五
—われをおもはむ 一三六
わがいほは 一〇三
わがこひに 九八
わがこひは 一九
—しらぬやまぢに 八三
—ひとしるらめや 九三
—みやまがくれの 九八
—むなしきそらに 一〇四
—ゆくへもしらず 一〇四
わがこひを 一三三
わがせこが 六八
—くべきよひなり 一九二
—ころものすそを 三六
—ころもはるさめ 三一
わがせこを 一四五
わがそでに 四一
わがそのの 一八六
わがために 五四
わがきみは 三三
わがこころ 一四八
わがごとく 一〇〇
わがきつる 一八六
わがくかど 九八
わがかどの 一八六
わがかどに 一五九
わがうへに 一八三
わがいほは 六五
—みやこのたつみ 一六五
—みわのやまもと 一六四
わがうへに 一四五
わがかどに 四一
わがかどの 一八六
わがきつる 五四
わがきみは 三三
わがこころ 一四八
わがごとく 一〇〇
わがこしの 一三六
—きくのかきねに 九八
—はなふみしだく 八三
—はなみがてらに 一九
わがやどは 一九
—みちもなきまで 三八
—ゆきふりしきて 五九
わがよはひ 五三
わかるれど 七三
わかれては 六八
わかれてふ 七〇
わかれをば 三三
わぎもこに 一九一
わくらばに 一六二
わすらるる 一八四
わすられむ 九三
—ときしなければ 一三五
—みをうぢばしの 一六七
わすれぐさ 一三三
—かれもやすると 一三七
—たれとらましを 一三五
わすれては 一六二
わすれなむ 一三四
—と思ふこころの 一三〇
—われをうらむな 一三三
わたつみと 一三五
わたつみの 一五三
—おきつしほ合に 一五三
—かざしにさせる 一五三
—はまのまさごを 六三
—わがみこすなみ 一三四
わたのはら 七五
—やそしまかけて 一五三
—よせくるなみの 一八四
わびぬれば 九九
—しひて忘れむと 一五八
—みをうきぐさの 一三四
わびびとの 一三五
—すむべきやどと 一六五

—わきてたちよる　五四
わりなくも　九九
われのみぞ　一〇四
われのみや　一〇四
—あはれと思はむ　四六
—よをうぐひすと　一三三
われはけさ　八三
われみても　一三二
われをおもふ　一八〇
われをきみ　一六三
われをのみ　一八〇

を

をぐらやま　八三
をぐろさき　一八八
をしとおもふ　二六
をしむから　六六
をしむらむ　七三
をしめども　二九
をちこちの　三

—をふのうらに　一八九
をみなへし　九九
—あきののかぜに　四四
—うしとみつつぞ　四三
—うしろめたくも　四五
—おほかるのべに　四四
—ふきすぎてくる　四四
をりつれば　一三
をりてみば　四三
をりとらば　一八

（倭歌—こゝはからうた即ち漢詩に對したる語。
○人の心—一本ひとつ心とあり。
○なれりける—なつてゐる。
○ことわざ—事業。
○つけて—託して。
○かはづ—蛙。但古くいふかはづは今の河鹿のこと。
○いきとしいけるもの—生ける限の者。
○天地の開け始まりける云々—これは概論にて、別に證據あることにあらず。
○久方の—天象の物の枕詞。
○下照姫—天照大神の御時の天稚彦の妻。大國主の神の女。
○下照姫にはじまり—御兄味組高彦根命のかたちの、岡谷にうつりて耀くを見て詠める小長歌なり。
○あら金の—土の枕詞。
○素盞嗚尊—天照大神の

古今和歌集序

倭歌（やまとうた）は、人の心を種（たね）として、よろづの言（こと）の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふ事を、見る物聞く物につけていひ出だせるなり。花に鳴く鶯、水に住むかはづの聲を聞けば、いきとしいけるもの、いづれか歌を詠まざりける。力をも入れずして天地（あめつち）を動かし、目に見えぬ鬼神（おにがみ）をもあはれと思はせ、男女（をとこをんな）の中をもやはらげ、猛（たけ）きもののふの心をも慰（なぐさ）むるは歌なり。この歌、天地の開け始まりける時よりいできにけり。しかあれども、世に傳（つた）はることは、久方（ひさかた）の天（あめ）にしては、下照姫（したてるひめ）にはじまり、あら金（がね）の土にしては、素盞嗚尊（すさのをのみこと）よりぞおこりける。ちはやぶる神代（かみよ）には、歌のもじも定まらず、すなほにして、こと

御弟。
○素盞嗚尊よりぞ―出雲にて詠み給へる八雲たつの神詠をいへり。この詠は下照姫のよりは古けれど、天地の順序のまゝに、前後せしめたり。
○憐び―愛するをいふ。
○年月をわたり―時日を多くかけ。
○塵ひぢ―ひぢは泥土。
○難波津の歌―「難波津にさくやこの花冬籠り今を春べとさくやこの花といふ歌。仁徳帝の時の百濟の博士王仁の作とぞ。
○みかどの云々―この句不完全にて意不明。
○淺香山の言の葉―「淺香山影さへみゆる山の井の淺くは人をわが思はなくにといふ歌。萬葉集巻十六に葛城王、陸奥の國守の待遇の疎なるを怒れる時に、前の采女なりける女、觴を捧げて、わざと戯れてこの歌を詠めり。
○手習ふ人の云々―後世小兒の手習始にいろはを書く如く、平安時代には、この二歌を書きたりき。
○歌のさま六つ―わが國にて歌に六種の體をわかつ事なかりき。これは作者が、わざと詩の風賦比興雅頌の六義を、もとより歌にある事のやうに取なして、詩をおとせる也。
○そへ歌―添歌。
○なずらへ歌―擬歌。
○たとへ歌―喩歌。
○たゞごと歌―直言歌。
○いはひ歌―祝歌。
○なり―假に補ふ。以下△點あるは、皆補足なり。
○色につき―好色に傾き
○花になり―浮華になり
○あだなる―浮薄なる。
○はかなき言―取とめなき言葉即ち歌。
○埋木の―人しれぬの序
埋木は水底などに沈める古代の木。
○まめ―まじめ。忠實。
○花薄―穗の開きたる薄穗に出づの序。
○穗に出だす―うはべに

の心わき難かりけらし。人の世となりて、素盞嗚命よりぞ、みそもじ餘り一文字はよみけるかくてぞ、花をめで、鳥を羨み、霞を憐び、露を悲ぶ心ことば多く、さまざまになりにける。遠き處も、出立つ足もとより はじまりて、年月をわたり、高き山も、麓の塵ひぢよりなりて、天雲たなびくまで生ひのぼれるが如くに、この歌も、かくの如くなるべし。難波津の歌は、みかどのおほんはじめなり。淺香山の言の葉は、采女の戯より詠みて、このふた歌は、歌の父母の やうにてぞ、手習ふ人のはじめにもしけるそもそも、歌のさまむつなり。唐の歌にもかくぞあるべき。そのむくさの一つにはそへ歌、二つにはかぞへ歌、三つにはなずらへ歌、四つにはたとへ歌、五つにはただごと歌、六つにはいはひ歌なり。

今の世の中色につき、人の心花になりにけるより、あだなる歌、はかなき言のみ出でくれば、色ごのみの家に埋木の、人しれぬ事となりて、まめなる所には、花薄、ほに出だすべき事にもあらずなりにけり。そのはじめを思へば、かかるべくなむあらぬ。古への代々のみかど、春の花のあした、秋の月の夜毎に、さぶらふ人々を召して、事につけつつ、歌を獻らしめ給ふ。あるは、花を翫ぶとて、たよりなき所にまどひ、あるは、月をおもふとて、しるべなき闇にたどれる心々を見給ひて、さかし愚なりとしろしめしけむ。しかあるのみならず、さざれ石に喩へ、筑波山にかけて君をねがひ、よろこび身にすぎ、たのしみ心に餘り、富士の烟によそへて人を戀ひ、松蟲の音に友をしのび、高砂、住の江の松も、あひおひのやうに覺え、男山の昔を思ひいで、女郎花の一時をくねるにも、歌をいひてぞ慰めける。また、春のあしたに花の散るを見、秋の

現す。
○そのはじめ―歌の起原
○さぶらふ人々―侍臣等
○翫ぶ―普通本そふとあり。一本による。
◎さゞれ石に―わが君は千代にましませの歌。
○筑波山に―筑波山このもかのもにの歌。
◎富士のけぶりに―人しれぬ思を常にの歌など。
◎松蟲の音に―君しのぶ草にやつるゝの歌。
◎高砂住の江の―誰をかもしる人にせむの歌及びわれ見ても久しくなりぬの歌など。
○あひおひ―相生。相老の説は假名ちがへば從ひがたし。
◎男山の―今こそあれ我も昔はの歌。
◎女郎花の一時を―秋の野になまめきたてるの歌
○くれなゐ―くれなゐと靡く。
○鏡の影に云々―うば玉のわが黒髪やの歌など。
○草の露水の泡を云々―

夕暮に木の葉の落つるを聞き、あるは、年毎に鏡の影に見ゆる雪と波とを歎き、草の上の露、水の泡を見て、わが身を驚き、あるは、きのふは榮えおごりて、けふは、時をうしなひ世にわび、親しかりしも疎くなり、あるは、松山の波をかけ、野中の水を汲み、秋萩の下葉をながめ、曉の鴫の羽掻を數へ、あるは、吳竹の憂きふしを人にいひ、吉野川をひきて世の中を恨み來つるに、今は、富士の山の烟も立たずなり、長柄の橋もつくるなりと聞く人は、歌にのみぞ心を慰めける。

古へより、かく傳はるうちにも、ならの御時よりぞ弘まりにける。かの御時に、柿本人麻呂なむ、歌のひじりなりける。又山部赤人といふ人あり、歌にあやしく妙なりけり。人麻呂は、赤人が上に立たむ事かたく、赤人は、人麻呂が下に立たむ事難くなむありける。この人々をおきて、又、優れたる人も、吳竹の代々に

露をなどあだなる物と、及びうきながらけぬる泡ともの歌。
○けふは―難波本による
◎松山の波を―君をおきてあだし心をの歌。
○野中の水を―いにしへの野中の清水の歌。
◎秋萩の下葉を―秋萩の下葉いろづくの歌。
◎曉の鴫のはねがき―曉の鴫のはねがきの歌。
◎吳竹の憂きふしを―世にふれば言の葉しげきの歌。
◎吉野川を―流れては妹背の山の歌。
○つくるを―造る。盡くるの意にあらず。
○ならの御時―奈良時代人麿は少し早く、飛鳥藤原宮の頃の人なり。
○吳竹の、片絲の―枕詞。
○より〳〵―なり〳〵。
○萬葉集―廿卷、奈良時代の末年の撰。
○かの御時より云々、世は十づゝになむなれりけるを―この一句原文は互に

聞え、片絲のよりよりに絶えずぞありける、これよりさきの歌を集めてなむ、萬葉集となづけられたりける。

かの御時より、年は百とせに餘り、世は十つぎになむなりにける。ここに、いにしへの事をも、歌の心をも知れる人、よむ人多からず、わづかに、一人二人なりき。しかあれど、これかれ、得たる所、得ぬ所、互になむある。いまこの事をいふに、つかさ位たかき人をば、たやすきやうなれば入れず。そのほかに、近き世にその名聞えたる人は、即ち、僧正遍昭は、歌のさまは得たれども、まことすくなし。たとへば、繪に書ける女を見て、いたづらに、心を動かすが如し。在原業平は、その心あまりて、言葉たらず。いはばしぼめる花の色なくて、匂殘れるが如し。文屋康秀は、詞はたくみにて、そのさま身におはず。いはば、あき人の、よき衣著たらむが如し。宇治山の僧喜撰は、詞幽にして、はじめをはりたしかな

露光量違いの為重複撮影

らず。いはば、秋の月を見るに、暁の雲にあへるが如し。よめる歌多く聞えねば、これ彼れを通はしてよくしらず。小野小町は、あはれなるやうにて、強からず。いはば、よき女の、惱めるとこ ろあるに似たり。つよからぬは、をうなの歌なればなるべし。大友黒主は、心はをかしくて、そのさまいやし。いはば、たき木負へる山人の、花の蔭にやすめるが如し。このほかの人々、その名きこゆる、野邊に生ふるかづらの這ひひろごり、林にしげき木の葉のごとく多かれど、歌とのみ思ひて、そのさま知らぬなるべし。

かかるに、今、すべらぎの天の下しろしめすこと、四つの時、九のかへりになむなりぬる。洽きおほんうつくしみの波、八洲の外まで流れ、廣きおほんめぐみの蔭、筑波山の麓よりもしげくおはしまして、よろづの政を聞し召すいとま、もろもろの事をすて給はぬあまりに、古への事をも忘れじ、舊りにし事をもおこし給ふとて、今もみそなはし、後の世にも傳はれとて、延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐のさう官凡河内躬恒、右衞門府生壬生忠岑らに仰せられて、萬葉集に入らぬふるき歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ。それが中に、梅をかざすよりはじめて、時鳥を聞き、紅葉を折り、雪を見るにいたるまで、又、鶴亀にかりて手向を祈り、あるは、春夏秋冬にも入らぬくさぐさの歌をなむ選ばせ給ひける。すべてちうたはた卷。

○なむあるの次に入りたり—今こゝに引上げて文意を疏通せしむ。
○かの御時—平城天皇の世をさす。
○世は十つぎ—天子の御代は十代。
○たやすきやうなれば—輕々しきやうなれば。
○女を見て—他の例によれば、女のとあるべし。
○身におはず—身に相應せず。歌ざま俗にして詞の工なるに劣るをいふ。
○おき人—商人。
○かづら—蔓葛の類をいふ。かづらのは葛の如くなり。
○すべらきの—醍醐天皇をさす。
○四つの時云々—春夏秋冬が、九度くり返す。即ち九年になる也。
○筑波山の麓よりも—集中「筑波山このもかのもの歌による。

○みづからのをも—自身の歌をも。
○梅をかざすより云々—四季の歌をいへり。
○鶴亀につけて云々—賀の歌をいへり。
○秋萩夏草云々—戀歌をいへり。
○逢坂山に云々—羈旅送別の歌をかれていへり。
○春夏秋冬にも入らぬ云云—雜歌その他をすべていへり。
○山した水、濱の眞砂—序詞なり。
○飛鳥川の云々—集中「世の中は何か常なるの歌による。
○さゞれ石の云々—集中「わが君はちよにましませの歌による。
○まくら—われらの誤なるべし。
○春の花の、秋の夜の—

ぬあまりに、古への事をも忘れじ、舊りにし事をもおこし給ふとて、今もみそなはし、後の世にも傳はれとて、延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐のさう官凡河内躬恒、右衞門府生壬生忠岑らに仰せられて、萬葉集に入らぬふるき歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ。それが中に、梅をかざすよりはじめて、時鳥を聞き、紅葉を折り、雪を見るにいたるまで、又、鶴亀にかりて手向を祈り、あるは、春夏秋冬にも入らぬくさぐさの歌をなむ選ばせ給ひける。すべてちうたはた卷。

「なむあるの次に入りたり—今こゝに引上げて文意を疏通せしむ。
○かの御時—平城天皇の世をさす。
○世は十つぎ—天子の御代は十代。
○たやすきやうなれば—輕々しきやうなれば。
○女を見て—他の例によれば、女のとあるべし。
○身におはず—身に相應せず。歌ざま俗にして詞の工なるに劣るをいふ。
○おき人—商人。
○かづら—蔓葛の類をいふ。かづらのは葛の如くなり。
○すべらきの—醍醐天皇をさす。
○四つの時云々—春夏秋冬が、九度くり返す。即ち九年になる也。
○筑波山の麓よりも—集中「筑波山このもかのもの歌による。
○みづからのをも—自身の歌をも。
○梅をかざすより云々—四季の歌をいへり。
○鶴亀につけて云々—賀の歌をいへり。
○秋萩夏草云々—戀歌をいへり。
○逢坂山に云々—羈旅送別の歌をかれていへり。
○春夏秋冬にも入らぬ云云—雜歌その他をすべていへり。
○山した水、濱の眞砂—序詞なり。
○飛鳥川の云々—集中「世の中は何か常なるの歌による。
○さゞれ石の云々—集中「わが君はちよにましませの歌による。
○まくら—われらの誤なるべし。
○春の花の、秋の夜の—

「古今和歌集序」それまくら、詞は、春の多くつもりぬれば、今は、飛鳥川の、瀬になる恨も聞えず、さざれ石の巖となるよろこびのみぞあるべき。かく、この度あつめ選ばれて、山した水のたえず、濱の眞砂かずなく、古今和歌集といふ。

露光量違いの為重複撮影

なす。いはば、秋の月を見るに、暁の空にあへ、雪積れる朝に、歌多く聞えねば、これ彼れを通はしてよくしらず。小野小町は、あはれなるやうにて、強からず。いはば、よき女の、悩めるところあるに似たり。つよからぬは、をうなの歌なればなるべし。大友黒主は、心はをかしくて、そのさまいやし。いはば、たき木負へる山人の、花の蔭にやすめるが如し。このほかの人々、その名きこゆる、野邊に生ふるかづらの這ひひろごり、林にしげき木の葉のごとく多かれど、歌とのみ思ひて、そのさま知らぬなるべし。

かかるに、今、すべらぎの天の下しろしめすこと、四つの時、九つの歌、かへりになむなりぬる。洽きおほんうつくしみの波、八洲の外まで流れ、廣きおほんめぐみの蔭、筑波山の麓よりもしげくおはしまして、よろづの政を聞し召すいとま、もろもろの事をすて給はぬあまりに、古への事をも忘れじ、古りにし事をもおこし給ふとて、今もみそなはし、後の世にも傳はれとて、延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書所 預紀貫之、前甲斐少掾凡河内躬恒、右衛門府生壬生忠岑らに仰せられて、萬葉集に入らぬふるき歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ。それが中に、梅をかざすよりはじめて、時鳥を聞き、紅葉を折り、雪を見るにいたるまで、又、鶴亀につけて君を思ひ、人をも祝ひ、秋萩夏草を見て、夏を戀ひ、逢坂山にいたりて手向を祈り、あるは、春夏秋冬にも入らぬくさぐさの歌をなむ選ばせ給ひける。すべてもろもろの歌、二十巻、名づけて、古今和歌集といふ。

かく、この度あつめ選ばれて、由した水のたえず、流の真砂かずかく、このもりぬれば、今は、飛鳥川の、瀬にかはる恨も聞えず、さざれ多くつもりぬれば、今は、飛鳥川の、瀬にかはる恨も聞えず、さざれ石の巌となるよろこびのみぞあるべき。それまくら、同は、石の

○みづからのなり　自身の歌なり。
○梅をかざすより云々　四季の歌をいへり。
○鶴亀につけて云々　賀の歌をいへり。
○秋萩夏草を見て　雑歌をいへり。
○逢坂山にいたりて手向を祈り　羇旅送別の歌をかねていへり。
○春夏秋冬にも入らぬ云々　雑歌をいへり。

○山下水、流の雲母　序詞なり。
○飛鳥川の云々　集中「世の中は何か常なる」の歌に、
○さざれ石に云々　集中「わが君はちよにやちよにさざれ石の」の歌に、
○まくらことばなり　われらの誤なるべし。
○春の花の、秋の夜の一

序詞。
○長きをかこてれば—虚名のみ道に長じたるやうにいひはやされたれば。
○人の耳におそり—人の聞えを憚り。
○たなびく雲の、なく鹿の—序詞。
○とぢまれるかな—歌の道は滅びすして殘りてあることよ。
○青やぎの絲、松の葉の—序詞。
○まさ木のかづら、鳥の跡—序詞。まさ木のかづらは眞拆葛にて蔓草。
○古を仰ぎて今を—古今集の名これに本づく。
○戀ひざらめかも—戀ひすしてあらうかい。

花匂すくなくして、空しき名のみ、秋の夜の長きをかこてれば、かつは、人の耳におそり、かつは、歌の心にはぢ思へど、たなびく雲の立ちゐ、啼く鹿のおきふしは、貫之らが、この世に生まれて、この事の時にあへるをなむ喜びぬる。人麻呂なくなりにたれど、歌のこととどまれるかな。たとひ、時移り事去り、たのしび悲びゆきかふとも、この字のるをや。青やぎの絲絶えず、松の葉の散り失せかづら長く傳はり、鳥の跡久しくとどまれらむ歌のさまをも知り、事の心をも得たらむ人は、大空の月を見るが如くに、古へを仰ぎて、今を戀ひざらめかも。

○ふる年云々—ふる年は舊年。この時代には太陰暦なれば、大概正月の始に立春の節ある筈なれど、推歩に多少の出入を生じて、かく前年の十二月中に立春あることもあり。
○ひぢて—ひどく濡れて。
○むすびし—掬ひし。
○いづこ—何處ならんの略。
○二條后—清和帝の皇后高子。藤原長良の女なり。寛平八年九月后位を停められる。その翌年春に詠まれし歌。
○春かけて—冬より春にかけて。

古今和歌集巻第一

春歌上

ふる年に春立ちける日よめる　在原元方

年のうちに春は來にけり一年をこぞとやいはむ今年とやいはむ

春立ちけり　紀貫之

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

題しらず　よみ人しらず

はる霞たてるやいづこみよし野のよし野のやまに雪は降りつつ

二條の后の春のはじめの御歌

雪のうちに春は來にけりうぐひすのこほれる涙いまやとくらむ

題しらず　よみ人しらず

うめが枝に來ゐる鶯はるかけて鳴けどもいまだゆきはふりつつ

露光量違いの為重複撮影

雪の木に降りかかれるを　素性法師

春たてば花とや見らむしらゆきのかかれる枝にうぐひすのなく

題しらず

心ざし深くそめてしをりければ消えあへぬ雪のはなと見ゆらむ

或人のいはく、さきのおほきおほいまうち君の歌なり。

二條の后の、しう宮のみやすん所と聞えける時、正月三日、御前に召して、日は照りながら雪の頭に降りかかりけるを詠ませ給ひける

文屋康秀

はるの日の光にあたるわれなれどかしらの雪となるぞわびしき

雪の降りけるをよめる

紀貫之

かすみ立ち木の芽もはるのゆき降れば花なき里も花ぞ散りける

春のはじめによめる

藤原言直

はるやとき花やおそきと聞きわかむ鶯だにも鳴かずもあるかな

春のはじめの歌

壬生忠岑

○見らむ—見ろらん。

○深くそめてし—花の事を志深く思ひ込みて居たれば。○消えあへぬ—消えんとして消えぬ。○さきのおほきおほいまうち君—前の太政大臣。藤原良房。同基經相つぎて太政大臣になりければ、前後の稱を附して、良房を前の太政大臣といへり。

○とう宮のみやすん所—皇太子を生み奉れる女御。とう宮はのちの陽成帝。○春の日の光云々—春宮殿下の御惠を蒙れるを喩ふ。○かしらの雪—白髮を喩ふ。

○はるの—芽の萌ろに、春をかく。

○聞きわかむ—聞きて判斷せん。

○あらじ—春ではあるまい。

○寛平の御時—宇多帝の御宇。○きさいの宮—皇后宮。七條后温子。○歌合—歌人を左右に分ち判者その歌の優劣を判ずる遊。

○たぐへ—連れ伴はす。

○しろべ—手引、案内者。

○ものうかゝ—物憂くある。大儀な。

○家居しをれば—家作して居れば。○あさなあさな—毎朝。

○春日野—大和國添下郡。

○若草の—妻の序。○つま—古は夫妻相互につまと呼びあへり。こゝは妻をいふ。

○とぶ火の野守—飛火野の野守の略。飛火野は春日野の南にあり。とぶ火は烽火の事、春日野に烽

春來ぬと人はいへどもうぐひすの鳴かぬ限はあらじとぞおもふ

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　源當純

谷風にとくるこほりのひま毎にうちいづる波やはるのはつはな

紀友則

はなの香をかぜのたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

大江千里

鶯のたにより出づるこゑなくばはる來ることをたれか知らまし

在原棟梁

はる立てど花もにほはぬ山里はものうかる音にうぐひすぞ鳴く

よみ人しらず

野べちかく家居しをれば鶯の鳴くなるこゑはあさなあさな聞く

春日野はけふはな燒きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり

春日野のとぶ火の野守いでて見よいま幾日ありて若菜摘みてむ

露光量違いの為重複撮影

雪ふりて年の内には春立てれば花とやいはむ雪とやいはむ

春たてば花とやはらむ雪ゆきのかかれる枝にうぐひすのなく

題しらず

心ざし深くそめてし折りければ消えあへぬ雪のはなと見ゆらむ

文屋康秀

○雪ふりて―雪の降りかかれるやうなる。○年の内には春―年の内に春の来たるをば。○花とやいはむ―花と思ひ違へむ。○雪とやいはむ―雪と思ひ違へむ。○春たてば―春の来たるをば。○消えあへぬ―消えもしないで。○折りければ―折りつけたので。○消えあへぬ雪のはなと見ゆらむ―消えもしないで雪の花と見えるのであらう。○雪のはなと見ゆらむ―雪の花と見えるのであらう。○文屋康秀―六歌仙の一人。○心ざし深くそめてし―心を深く染めて折りつけたので。○消えあへぬ雪のはなと見ゆらむ―消えもしないで雪の花と見えるのであらう。

火鑚の置かれし事は、續日本紀元明天皇和銅五年の條に見えたり。○み山―みは美稱、只の山のこと。○おしてはる雨―押して張るに、強ひて春雨とかく。○仁和のみかど―光孝帝。○衣手―袖に同じ。○しろたへ―白き絹布にて、袖の枕詞。○ふりはへて―わざ〳〵。ふりに袖振る意をかく。○ぬきをうすみ―横絲が薄くて。○みだるべらなれ―亂れさうな樣子だ。べらは平安朝初期承和頃に發生し、延喜時代には盛に用ゐられしが、その後長德の頃には殆ど廢語となれり。○ひとしほ―一染の意。○しほは染むこと。○せこ―背子、夫。○衣はるさめ―衣を洗ひ張るといふに春雨をかく。○絲よりかくる―絲を縫ふにて、綻を縫ふ意。○春

み山には松の雪だに消えなくにみやこは野邊のわか菜摘みけり

梓弓おしてはるさめけふ降りぬあすさへ降らばわか菜摘みてむ

仁和のみかど、みこにおはしましける時に、人に若菜賜ひける

御歌

君がためはるの野に出でてわか菜摘むわが衣手に雪は降りつつ

歌奉れと仰せられし時よみて奉れる　貫之

かすが野の若菜つみにやしろたへの袖ふりはへて人の行くらむ

春のきるかすみの衣ぬきをうすみ山かぜにこそみだるべらなれ

寛平の御時后の宮の歌合によめる　在原行平朝臣

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほのいろまさりけり

歌奉れと仰せられし時よみて奉れる　源宗于朝臣

わがせ子が衣はるさめふるごとに野べのみどりぞ色まさりける

つらゆき

しもぞ―春は反つて。○西大寺―昔京都の朱雀通り羅城門外に東寺、西寺を建てられしが、今は東寺のみ殘りて、西寺は存せず。その西寺を西大寺といへり。○玉にもぬけろ―玉として通してをる。○もゝ千鳥―色々の小鳥○ふりゆく―

○ちこち―あちこち。○たづき―取りつき所。○よぶこ鳥―鳥の名。眞淵はカンコ鳥といひ、中山美石、仲田顯忠はトシヨリコイとなく鳩なりといへり。○越―三越路とて、今の越前、越中、越後のあたりをいふ。○ゆきぶり―行くゝ物にふるること。○ことやつてまし―傳言をしようか。○ありとや云々―こゝにありとやの倒語。

あをやぎの絲よりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける

西大寺のほとりの柳をよめる　僧正遍昭

あさみどり絲よりかけてしらつゆを玉にもぬける春のやなぎか

題しらず　よみ人しらず

ももち鳥さへづる春は物ごとにあらたまれどもわれぞふりゆく

をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくもよぶこ鳥かな

雁のこゑを聞きて越へまかりける人を思ひてよめる　凡河内躬恒

はるくれば雁かへるなりしら雲の道ゆきぶりにことやつてまし

伊勢

春がすみたつを見すてゆく雁は花なきさとに住みやならへる

歸雁をよめる　よみ人しらず

をりつれば袖こそにほへ梅の花ありとやこゝにうぐひすのなく

色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれしやどの梅ぞも

やど近く梅の花うゑじあぢきなくまつ人の香にあやまたれけり

梅の花たちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみける

梅の花を折りてよめる　東三條の左のおほいまうち君

うぐひすの笠にぬふてふ梅のはな折りてかざさむ老かくるやと

題しらず　素性法師

よそにのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり

梅の花を折りて人におくりける　ともの り

君ならでたれにか見せむうめの花いろをも香をも知る人ぞ知る

くらぶ山にてよめる　つらゆき

梅の花にほふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞありける

月夜に梅の花を折りてと、人のいひければ、折るとてよめる　みつね

○袖ふれし―昔は衣服に薫物する事、盛に行はれたりき。その薫を梅の香に見立てたり。○あぢきなく―つまらなく。○たちよるばかりありしより―ほんの立寄るといふほどの事のあつた、その時から。○笠にぬふ―古へ笠を作るに縫ふといへり。○老かくるやと―老いたる顔付が隠るゝかと。○あかぬ色香は―飽かれぬよき色や香は。○くらぶ山―近江の甲賀郡のなるべし。○春べ―春の頃。○しるく―判然。

○あやなし―理のたゝぬ　○初瀬―大和泊瀬山。今はせといふ。（音の轉。）○人はいさ―人はこの家の主人をさす。いさは否やの意。○ふるさと―今はわが本貫の地をのみいふ語なれど、古くは故都の地をいひ、一轉しては住捨てゝ年故りし里をいへり。こゝも以前度々宿りし家なれば、古里といへり。

○折られぬ水―梅の花のうつれる水なれば、折られぬなり。○花の鏡となる水―花の爲の鏡となる水。○ちりかゝる―散りかゝるに、塵かゝるをかく。○くるとあくと―日が暮るとも夜が明くとも。○目がれぬ―目を離さず。○人まー人の居ぬ間。

月夜にはそれとも見えず梅の花香をたづねてぞしるべかりける

春の夜梅の花をよめる

春の夜の闇はあやなしうめのはな色こそ見えね香やはかくるる

初瀬にまうづる毎に宿りける人の家に、久しく宿らで、程へて後にいたれりければ、かの家のあるじ、「かく定かになむやどりはある」といひいだして侍りければ、そこに立てりける梅の花を折りてよめる　つらゆき

人はいさこころもしらずふるさとは花ぞむかしの香に匂ひける

水のほとりに梅の花の咲けりけるをよめる　伊勢

春ごとにながるる川をはなと見て折られぬ水にそでやぬれなむ

としをへて花の鏡となる水はちりかかるをやくもるといふらむ

家にありける梅の花の散りけるをよめる　つらゆき

くるとあくと目かれぬ物を梅の花いつの人まにうつろひぬらむ

寛平の御時、きさいの宮の歌合の歌　よみ人しらず

梅が香を袖にうつしてとどめてば春は過ぐともかたみならまし
素性法師

散ると見てあるべきものを梅の花うたてにほひの袖にとまれる
題しらず
よみ人しらず

ちりぬとも香をだにのこせ梅の花こひしき時のおもひ出にせむ

人の家に植ゑたりける櫻の花の、咲きはじめたりけるを見てよめる
つらゆき

ことしより春しりそむる櫻花散るといふことはならはざらなむ
題しらず
よみ人しらず

山たかみ人もすさめぬさくら花いたくなわびそわれ見はやさむ

又は、里遠み人もすさみぬ山櫻

山ざくらわが見にくれば春がすみ峰にも尾にもたちかくしつつ

染殿(そめどの)の后のお前に、花瓶に櫻の花をささせ給へるを見てよめる
前の大(さき)おほいまうち君

○とどめてば—留めて置きたらば。

○散ると見て云々—梅の花が、あゝ散るとばかり一とほりに見て居る筈なるに。○うたて—あいにく、

○春しりそむる—花の咲きはじむるをいふ。

○すさめぬ—賞翫せぬ。

○なわびそ—辛氣に思ふな。

○やまざくら—山の櫻。櫻の一種の名稱に非ず。

○尾—山の麓まで引きはへたる處。

○染殿の后—文徳帝の皇后。明子と申し、太政大臣藤原良房公の女なり。染殿は良房の邸なるが、後この皇后の住み給へるによりてしかいへり。

年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思もなし
渚院(なぎさのゐん)にて櫻を見てよめる
在原業平朝臣

世のなかにたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし
題しらず
よみ人しらず

石はしるたきなくもがな櫻ばな手折りてもこむ見ぬひとのため
山の櫻をみてよめる
素性法師

見てのみや人にかたらむ櫻ばな手ごとに折りていへづとにせむ

花ざかりに、京を見やりてよめる

見わたせば柳さくらをこきまぜてみやこぞ春のにしきなりける
櫻の花のもとにて、年の老いぬることを歎きてよめる
紀友則

色も香もおなじむかしにさくらめど年ふる人ぞあらたまりける

折れる櫻をよめる
つらゆき

たれしかもとめて折りつるはる霞たちかくすらむ山のさくらを

○なぎさの院—河内國交野郡。文徳帝の皇子惟喬親王の常に出でまして、遊び給ひし處。○春の心—春の人心。

○はしる—石の上をはしる。瀧にいひ續くる語。

○たき—瀧は今は垂水の事にのみいへど、古くは瀧ちて流るゝ水をいへり。

○こきまぜて—うちまぜて。

○あらたまる—こゝにては昔に變りたる意。

○折れる—折りてある。

○とめて—求めて。突きとめて。

歌奉れと仰せられし時よみて奉れる

さくら花咲きにけらしもあしひきの山のかひより見ゆるしら雲

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた　友則

△み吉野の山べに咲けるさくらばな雪かとのみぞあやまたれける

彌生に閏月のありける年よみける　伊勢

さくらばな春くははれる年だにも人のこころにあかれやはせぬ

櫻の花の盛に、久しく訪はざりける人の來りける時によみける

よみ人しらず

あだなりと名にこそ立てれ櫻ばなとしにまれなる人も待ちけり

返し　業平朝臣

けふ來ずはあすは雪とぞ降なまし消えずはありとも花と見ましや

よみ人しらず

題しらず

散りぬれば戀ふれどしるしなき物を今日こそ櫻折ちば折りてめ

折りとらばをしげにもあるか櫻花いざ宿かりて散るまでは見む

○けらしも―一本けらしなとあり。○あしひきの―山の枕詞。○かひ―峡。山と山との間。

○彌生に云々―三月が二つ續きたる年なり。彌生は三月の異名。太陰暦にては月日の閏餘を一月に立てて年中に配す。これを閏月といふ。○春くははれる年―常よりは一月多くして、春の日數の增加したる年。

○あだなりと―變り易くて、賴み難きもの。○名にこそ立てれ―評判にはたつてをるが。○年にまれなる―一年内にも稀な○見ましや―見ようかい。

○花見がてら―花を見かたがた。

○亭子院―宇多上皇を申す。亭子院は上皇御所の名。

櫻色にころもは深く染めてきむはなの散りなむのちのかたみに

櫻の花の咲けりけるを、見にまうで來りける人に、よみて贈りける　紀有友

わがやどの花見がてらにくる人は散りなむのちぞ戀しかるべき

亭子院の歌合の時よめる　みつね

見る人もなきやまざとのさくら花ほかの散りなむ後ぞ咲かまし　伊勢

古今和歌集巻第二

春歌下

題しらず　　よみ人しらず

はるがすみたなびく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく

待てといふに散らでしとまるものならば何を櫻に思ひまさまし

殘りなく散るぞめでたき櫻ばなありて世のなかはてのうければ

この里に旅寢しぬべしさくら花ちりのまがひにいへぢわすれて

うつせみの世にも似たるか花櫻さくと見しまにかつ散りにけり

僧正遍昭に詠みて贈りける　　惟喬（これたか）のみこ

櫻ばなちらばちらなむちらずとてふるさと人の來ても見なくに

雲林院（うりんゐん）にて櫻の花の散りけるを見てよめる　　承均（そうぐ）法師

○うつろはむとや―散らうとしてか。
○何を櫻に思ひまさまし―何物を櫻よりも增して愛し思はう。
○ありて―存在して。○はてのうければ―終がわるく、心憂きものなれば。○ちりのまがひ―散るまぎれ。○いへぢ―家にゆく路。
○うつせみの―世の枕詞○かつ―そばから、片一方から。○花櫻―色づきて花やかに咲く一種の櫻ならん。

櫻ちるはなのところは春ながらゆきぞふりつつ消えがてにする

櫻の花のちり侍りけるを見てよみける　　素性法師

花散らす風のやどりはたれか知るわれに教へよ行きてうらみむ

雲林院にて、櫻の花をよめる　　承均法師

いざ櫻われも散りなむひとさかりありなば人にうきめ見えなむ

あひしれりける人の、まうできて歸りにける後に、よみて花に

さして遣しける　　つらゆき

ひとめ見し君もやくると櫻ばなけふは待ちみて散らば散らなむ

山のさくらを見てよめる

はる霞なにかくすらむさくら花散るまをだにも見るべきものを

心地そこなひて煩ひける時に、風に當らじとて、おろしこめて

のみ侍りけるあひだに、折れる櫻の散り方になれりけるを見て

よめる　　藤原因香朝臣

垂れこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻もうつろひにけり

○雲林院―山城紫野にあり。淳和帝の離宮を常康親王に賜はり、親王のち出家して寺となし、元慶寺の別院とす。○花のところ―花の場所○がてに―にくさうに。
○風のやどり―風の宿所○見え―見られ。

○けふは、待ちみて―今日一日だけは待つて見て。

○なにかくすらむ―何故に隱すのだらう。○散るまをだにも―散る間だけでも。
○おろしこめて―簾、几帳などを下し、とぢ籠めて。

○春のゆくへ―春の暮れゆく方。

○東宮の雅院―内裏中にあり。東宮の常に音樂學問等を習ひ給ふ所。○みかは水―禁中の砌を流るる水にして、此處にては雅院の下水。

○ことならば―かく早く散るほどならば。

○人の心ぞ云々―人の心は風の吹く間もなく、早く移り變る。

○ひさかたの光―ひさかたのは天象の物の枕詞。光は日の光の略。○春の日に―春の日なるに。

○春宮のたちはきの陣―たちはきは春宮御警衛の武官。その詰所を帶刀の陣といふ。

○よきて―よけて。○心づから―心から。

東宮の雅院にて、櫻の花のみかは水に散りて流れけるを、見て よめる

菅野高世

枝よりもあだに散りにし花なれば落ちても水のあわとこそなれ

櫻の花の散りけるをよめる

つらゆき

ことならば咲かずやはあらぬ櫻ばな見るわれさへにしづ心なし

櫻の如く散るものはなしと、人のいひければよめる

紀友則

櫻ばなとく散りぬともおもほえず人のこころぞ風も吹きあへぬ

櫻の花の散るをよめる

ひさかたのひかりのどけき春の日にしづ心なくはなのちるらむ

春宮のたちはきの陣にて、櫻の花の散るをよめる

藤原良風

はるかぜは花のあたりをよきて吹け心づからやうつろふと見む

櫻の散るをよめる

凡河内躬恒

雪とのみふるだにあるをさくら花いかに散れとか風の吹くらむ

○比叡―延暦寺のある山○心にまかすべらなり―心のまゝにして、散らす樣子だ。

○なごり―餘波。

○ならのみかど―平城帝か。○ふる里―古き都。

○香をだにぬすめ―香だけでも霞の中よりぬすみ出せ。

○ほり植ゑじ―野山より掘り來て植ゑまい。

○あらじ―の下、何故にの語が含めり。

比叡にのぼりて、歸りまうで來てよめる

つらゆき

山たかみ見つつわがこしさくら花風はこころにまかすべらなり

よみ人しらず 一本大友黒主

題しらず

はるさめのふるはなみだかさくら花散るを惜まぬ人しなければ

つらゆき

亭子院の歌合の歌

さくら花ちりぬる風のなごりには水なきそらになみぞ立ちける

ならのみかどの御歌

ふる里となりにし奈良のみやこにも色はかはらず花は咲きけり

春の歌とてよめる

良岑宗貞

花の色はかすみにこめて見せずとも香をだにぬすめ春のやま風

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

素性法師

花の木も今はほり植ゑじはる立てばうつろふ色に人ならひけり

題しらず

よみ人しらず

春の色のいたり到らぬ里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆらむ

春の歌とてよめる

三輪山をしかもかくすか春がすみ人に知られぬはなや咲くらむ

雲林院のみこの許に花見に、北山のほとりにまかれりける時よめる

いざけふは春の山べにまじりなむ暮れなばなげの花のかげかは

春の歌とてよめる

いつまでか野べに心のあくがれむ花し散らずば千代もへぬべし

よみ人しらず

はるごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり

花のごと世のつねならばすぐしてし昔はまたもかへりきなまし

吹くかぜに誂へつくるものならばこの一本はよきよといはまし

まつ人もこぬもの故にうぐひすの鳴きつる花を折りてけるかな

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

藤原興風

○三輪山―大和國磯城郡。○しかも―さも。○人に知られぬ―人に知らされぬの意。○雲林院のみこ―常康親王。○まじりなむ―入りて遊ばん。○なげ―等閑。なげやり。

○ありなめど―あるであらう。○命なりけり―壽命次第の事であつた。○世の常ならば―世の中が變らぬものならば。

○誂へつくる―註文出來る。

さく花は千ぐさながらにあだなれど誰かは春をうらみはてたる

春がすみ色の千ぐさに見えつるはたなびく山のはなのかげかも

かすみたつ春の山べはとほけれど吹きくる風ははなの香ぞする

うつろへる花を見てよめる

はな見ればこころさへにぞ移りける色にはいでじ人もこそしれ

よみ人しらず

うぐひすの鳴く野べごとに來て見れば移ろふ花に風ぞ吹きける

題しらず

吹くかぜを鳴きてうらみよ鶯はわれやははなに手だに觸れたる

典侍洽子朝臣

散るはなの鳴くにしとまるものならばわれ鶯におとらましやは

仁和の中將のみやすん所の家に、歌合せむとてしける時によめる

藤原後蔭

花のちることやわびしき春がすみたつ田の山のうぐひすのこゑ

○千ぐさながらに―いろいろの花悉く。

○うつろふ―色の變ることにも、散ることにもいふ。

○我やは花に云々―我は花に手さへ觸れた事かい。

○鳴くにし―鳴くその爲に。○仁和の―光孝帝の御世の。○中將のみやすん所―中將なる人の子妹にて、御息所となりし人が。○立田の山―大和國平群郡。

鶯の鳴くをよめる　　そせい

木傳へばおのが羽風に散る花をたれにおほせてここら鳴くらむ

鶯の花の木にて鳴くをよめる　　みつね

しるしなき音をも鳴く哉うぐひすの今年のみ散る花ならなくに

題しらず　　よみ人しらず

こまなべていざ見に行かむふる里は雪とのみこそ花は散るらめ

散る花をなにか恨みむ世の中にわが身もともにあらむものかは

小野小町

はなの色はうつりにけりな徒にわが身世にふるながめせし間に

仁和の中將のみやすん所の家に、歌合せむとてしける時によめる　　そせい

をしとおもふ心は絲によられなむ散る花ごとにぬきてとどめむ

志賀の山ごえに、女の多くあへりけるに、詠みてつかはしける　　つらゆき

○誰におほせ—誰に告を負せて。○ここら—大さう。澤山。

○しるしなき—何の驗もなき。

○こまなべて—駒を乘り並べて。

○世にふる—世に經るにて、年の寄ること。降るをかく、○ながめ—物思して見る。長雨をかく。

○志賀の山ごえ—山城より近江の志賀へ出づる山路。

あづさ弓はるの山べを越えくれば路もさりあへず花ぞ散りける

寬平の御時きさいの宮の歌合のうた

はるの野に若菜つまむとこしものを散りかふ花に路はまどひぬ

山寺にまうでたりけるによめる

やどりして春のやまべに寢たる夜は夢のうちにも花ぞ散りける

寬平の御時きさいの宮の歌合の歌

ふくかぜと谷のみづとしなかりせばみ山がくれの花を見ましや

志賀より歸りける道に、花山に入りて、藤の花のもとに立寄りて歸りけるに、よみて贈りける　　僧正遍昭

よそに見てかへらむ人に藤のはなはひまつはれよ枝は折るとも

家に藤の花咲けりけるを、人の立どまりて見けるをよめる　　躬恒

わが宿に咲けるふぢなみたち返り過ぎがてにのみ人の見るらむ

題しらず　　よみ人しらず

○さりあへず—よけ切れず。

○若菜—春のうちの雜菜

○散りかふ—散りて入亂れる。

○志賀より—志賀にある崇福寺卽ち志賀寺よりなり。○花山—花山寺。遍昭住持の寺。山城國山科にありき。

○よそに見て—よそよそしく見て。○はひまつはれよ—這ひ纏ひ附きて引き留めよ。

○過ぎがてにのみ—通りすぐる事がし難きやうにばかり。

○今もかも―かもは疑の辭。○たちばなの小嶋―大和國高市郡飛鳥の橘の嶋といひ、或は山城國宇治川に山吹瀬といふがあるあたりともいへり。○あかなくに―飽かぬに　○あやなな咲きそ―分別なく咲くなよ。○よし野川―大和國吉野

今もかも咲きにほふらむたちばなの小島のさきのやまぶきの花

はる雨ににほへるいろもあかなくに香さへなつかし山吹のはな

山吹はあやなな咲きそはな見むと植ゑけむ君がこよひこなくに

よし野川のほとりに、山吹の咲けりけるをよめる

つらゆき

よし野がは岸のやまぶきふく風に底のかげさへうつろひにけり

題しらず　よみ人しらず

かはづ鳴く井手の山吹散りにけり花のさかりにあはましものを

この歌は、ある人のいはく、橘の清友が歌なり。

春の歌とてよめる

そせい

おもふどち春の山べにうちむれてそこともいはぬ旅寢してしが

春のとく過ぐるをよめる　みつね

あづさ弓はる立ちしより年月のいるがごとくもおもほゆるかな

○かはづ―この集以前には河鹿をいふ。但この蛙鳴くば修飾の句。○井手―山城國相樂郡。

○思ふどち―氣の合うた同志。○してしが―してみたい。

○いろが如くに―弓を射る如く速に。

○なきとむる―鳴いて散るのを留める。○ものうく―嬾く。大儀に。

○つごもり方―晦日頃。○水のまにまに―流れ居る川の筋に隨ひて。

○たちぬ―霞のたつに、春の立つを寄す。

○花摘―野山に出でて花をつみて、佛に奉るをいふ。○物とはなしに―物ではないのに。○たぐふ―附添ひゆく。

彌生に鶯の久しう聞えざりけるをよめる　つらゆき

なきとむるはなしなければ鶯もはてはものうくなりぬべらなり

彌生のつごもり方に山を越えけるに、山川より花の流れけるを

ふかやぶ

花ちれる水のまにまにとめくれば山にははるもなくなりにけり

春を惜みてよめる　もとかた

をしめどもとどまらなくに春霞かへる路にしたちぬとおもへば

寬平の御時きさいの宮の歌合の歌　おきかぜ

こゑたえず鳴けや鶯ひととせにふたたびとだにくべきはるかは

彌生のつごもりの日、花摘より歸りける女どもを見てよめる

とどむべきものとはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か

彌生のつごもりの日、雨のふりけるに、藤の花を折りて人に遣しける　業平朝臣

ぬれつつぞしひて折りつる年の内に春は幾日もあらじと思へば

亭子院の歌合に春のはての歌　　みつね

けふのみと春をおもはぬ時だにもたつことやすき花のかげかは

○たつ—たち去る。

○うづき—陰暦四月の異名。○あまたに—數多の木に。

○さつき—陰暦五月の異名。○はぶき—羽振の義。羽叩きして。

○鳴きもふりなむ—鳴く聲がふるくさくならう。○まだしき—まだ早い。

古今和歌集巻第三

夏歌

題しらず　　よみ人しらず

わがやどの池の藤なみ咲きにけり山ほととぎすいつか來鳴かむ

この歌、ある人のいはく、柿本の人丸がなりと。

うづきに咲ける櫻を見てよめる　　紀としさだ

あはれてふ言をあまたにやらじとやはるにおくれて獨さくらむ

題しらず　　よみ人しらず

さ月まつ山ほととぎすうちはぶきいまも鳴かなむこぞのふる聲

伊勢

さ月こば鳴きもふりなむほととぎすまだしき程の聲を聞かばや

よみ人しらず

さつき待つ花たちばなの香をかげばむかしの人の袖の香ぞする

いつのまにさづき來ぬらむあしひきのやま時鳥いまぞ鳴くなる

けさき鳴きいまだ旅なるほととぎすはなたち花に宿はからなむ

音羽山をこえける時に、時鳥の鳴くを聞きてよめる

おとは山けさこえくれば時鳥の始めて鳴きけるを聞きてよめる　紀　友則

ほととぎす初聲聞けばあぢきなくぬしさだまらぬ戀せらるはた

奈良のいそのかみ寺にて、時鳥のなくをよめる　そせい

いそのかみふるきみやこのほととぎす聲ばかりこそ昔なりけれ

題しらず　よみ人しらず

夏やまになく時鳥こころあらば物おもふわれにこゑな聞かせそ

ほととぎすなく聲聞けばわかれにし故郷さへぞこひしかりける

○いまだ旅なる—山から里へ來たばかりで、まだ旅宿も定めずに居る。
○音羽山—山城國山科。

○あぢきなく—つまらなく。○はた—當の義、さし當りて。
○いそのかみ寺—大和國山邊郡石上の良因院にして、作者素性の住持の寺。ならのいそのかみ寺といふには諸説あり、○いそのかみふるき—石上布留に舊きをかく。布留は石上のうちの地名なり。
○心あらば—思ひやりあらば。

時鳥ながなく里のあまたあればなほうとまれぬおもふものから

(おもひいづる)ときはの山の時鳥からくれなゐのふり出てぞなく

聲はして涙は見えぬほととぎすわがころも手のひづをからなむ

あしひきのやま時鳥をりはへてたれかまさるとねをのみぞ鳴く

いまさらに山へかへるなほととぎす聲のかぎりはわが宿になけ

やよや待てやま時鳥ことづてむわれ世のなかに住みわびぬとよ　みくにのまち

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　紀　友則

さみだれに物おもひをれば時鳥夜ぶかく鳴きていづち行くらむ

夜やくらき路や惑へるほととぎすわが宿をしも過ぎがてに鳴く

やどりせし花たち花もかれなくになどほととぎす聲絶えぬらむ　大江千里

紀　貫之

○やよや待て—ヤイ一寸待て。○住みわびぬとよ—住みあぐんだといふ事ぞよ。
○さみだれに—梅雨頃。さ亂れを寄す。○いづち—何方へ。
○過ぎがてに—すぎ難くして。

○かれなくに—枯れはせぬのに。

○なが—汝が。○なほうとまれぬ云々—慕はしく思ひながらも、やはり疎疎しく思はるゝよ。
○からくれなゐの—唐紅の如くに。ふり出ての序詞。○ふり出て—聲を振り立てゝ。
○ひづ—浸りて濡るゝ。
○をりはへて—時長く續けて。

○しのゝめ—明方。
○あかすとや—飽き足らずと思うてか。明かすをかけたるにあらず。
○それかあらぬか—去年鳴きたりし時鳥か、又は別の時鳥か。
○とどろに—鳴り響くほどに。○夜たゞ—夜通し。
○さぶらひ—禁中藏人所にあり。五位、六位の人達の溜り居る所。なのこどもは殿上人等をいふ。
○たうべ—俗の食べと同じ。○こたへやはせぬ—なぜ答へぬかい。
○まつ山—待つに松山をかく
○うちつけに—突然に。

なつの夜のふすかとすれば時鳥なくひところゑに明くるしののめ
　　壬生忠岑
暮るるかと見ればあけぬるなつの夜をあかずとやなくやま時鳥
　　紀秋岑
夏山にこひしき人や入りにけむこゑふりたてて鳴くほととぎす
　題しらず　　よみ人しらず
こぞのなつなきふるしてし時鳥それかあらぬかこゑのかはらぬ
　時鳥の鳴くを聞きてよめる　　つらゆき
さみだれのそらもとどろに時鳥なにを憂しとか夜ただ鳴くらむ
　さぶらひにて、をのこどもの酒たうべけるに、召して、時鳥待つ歌よめとありければよめる　　みつね
ほととぎす聲もきこえず山彦はほかに鳴く音をこたへやはせぬ
　山に時鳥の鳴けるを聞きてよめる　　つらゆき
時鳥ひとまつやまになくなればわれうちつけに戀ひまさりけり

○はやく住みける所—故郷をさす。
○むかしへ—昔の方。
○われとはなしに—我と同じ身にもあらぬに。○卯の花の序詞。
○常夏の花—撫子の一名
○すゑじ—置くまい。○妹とわが—ぬる云々—妻とわが寢る床に、常夏をかく。
○みな月—陰暦六月の異名。○ゆきかふ—往き交ふにて、夏と秋とが行きちがふこと。○かたへ—片方。

はやく住みける所にて、時鳥の鳴けるを聞きてよめる　　ただみね
むかしへや今もこひしきほととぎす故郷にしも鳴きて來つらむ
　時鳥われとはなしに卯のはなのうき世のなかになきわたるらむ
　はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露をたまとあざむく
　月の面白かりける夜、曉方によめる　　ふかやぶ
なつの夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ
　歌をよみて遣しける　　みつね
塵をだにすゑじとぞ思ふさきしより妹とわがぬるとこ夏のはな
　みな月の晦の日よめる　　つごもり
夏と秋とゆきかふ空のかよひ路はかたへすずしき風や吹くらむ

古今和歌集巻第四

秋歌上

秋たつ日よめる　藤原敏行朝臣

秋きぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞおどかれぬる

秋たつ日、うへのをのこども、かもの川原に、川せうえうしける、ともにまかりてよめる　つらゆき

河風のすずしくもあるかうちよする波とともにや秋は立つらむ

題しらず　よみ人しらず

わがせ子がころもの裾をふきかへしうらめづらしき秋のはつ風

きのふこそ早苗とりしかいつの間に稲葉そよぎてあき風のふく

あき風のふきにし日よりひさかたの天の川原にたたぬ日はなし

○秋たつ日―立秋の日。○さやかに―はつきりと。○うへのをのこ―殿上人。○かもの川―京都加茂川。○川せうえう―川遊び。○あるか―かは歎辭。

○わがせ子―わが夫。○うらゝ―心のこと。衣の裏を寄す。○早苗とりしか―苗の植付をした、しかるに。

ひさかたのあまの川原のわたしもり君わたりなばかぢ隠してよ

あまの川もみぢを橋にわたせばやたなばたつめの秋をしも待つ

こひこひて逢ふ夜はこよひ天の川霧たち渡り明けずもあらなむ

寛平の御時、なぬかの夜、うへにさぶらふをのこども歌奉れと仰せられける時、人に代りてよめる　友則

天の川あさ瀬しらなみたどりつつ渡りはてねば明けぞしにける

同じ御時きさいの宮の歌合の歌　藤原興風

ちぎりけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたび逢ふは逢ふかは

七日の夜よめる　凡河内躬恒

年ごとにあふとはすれど棚機のぬる夜のかずぞすくなかりける

たなばたにかしつる絲のうちはへて年の緒ながくこひや渡らむ

題しらず　そせい

こよひこむ人にはあはじ棚機のひさしきほどに待ちもこそすれ

○かぢ―舟をやる具は楫も棹も廣く楫といへり。○橋に―橋にして。○たなばたつめ―棚機つ女。織女星。

○はてねば―はてねば明くる筈なきに。

○逢ふは逢ふかは―一年にたゞ一度逢ふのが、それでも逢ふといふものか。

○かしつる絲の―手向けたる絲の如くに。○はへ―長く引延ぶる意。○年の緒―年は長く續くものなれば緒に喩ふ。

○棚機の―棚機の如く。

なぬかのよの暁によめる　源宗于朝臣

いまはとてわかるる時はあまの川わたらぬさきに袖ぞひぢぬる

やうかの日よめる　壬生忠岑

けふよりは今こむ年の昨日をぞいつしかとのみまちわたるべき

題しらず　よみ人しらず

木の間よりもりくる月のかげ見れば心づくしのあきは來にけり

大かたの秋くるからにわが身こそ悲しきものとおもひ知りぬれ

わがためにくる秋にしもあらなくに蟲のね聞けばまづぞ悲しき

物ごとにあきぞ悲しきもみぢつつうつろひゆくを限とおもへば

ひとりぬる床はくさ葉にあらねども秋くるよひは露けかりけり

是貞のみこの家の歌合の歌

いつはとは時はわかねど秋のよぞ物思ふことのかぎりなりける

かん鳴の壺にて、人々あつまりて、秋の夜をしむ歌よみける

○よひ—夜。

○大かたの—世間一般の

○心づくし—辛氣な。

○今來む年の昨日な—今より來年の昨日、卽ち七月七日な。

○是貞のみこ—光孝帝の皇子。

○いつはとは—何時は物思の時とは。○かぎり—頂上。

○かん鳴の壺—宮中五舍中の一舍芳舍（ホウシヤ）をいふ。神鳴の時、近衞の武官伺候する所。

○かず—一本かげとあり。

○さよ中—夜中。さは美稱。○雁がね—雁のなく聲。○月わたる—月がめぐり行く。

○ちぢに—數多く。

○月の桂—月中に桂樹ありといふ支那の故事。

○ながき思—盡きぬ物思。

いでによめる　みつね

かくばかりをしとおもふ夜を徒に寢てあかすらむ人さへぞうき

題しらず　よみ人しらず

しら雲にはねうちかはしとぶ雁のかずさへ見ゆる秋のよのつき

さよ中と夜はふけぬらしかりがねのきこゆる空に月わたる見ゆ

是貞のみこの家の歌合によめる　大江千里

月見ればちぢに物こそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど

ひさかたの月の桂（かつら）もあきはなほもみぢすればや照りまさるらむ

月をよめる　在原元方

あきの夜の月の光しあかければくらぶのやまも越えぬべらなり

人のもとにまかれりける夜、きりぎりすの鳴きけるを聞きてよめる　藤原忠房

きりぎりすいたくな鳴きそ秋の夜のながき思はわれぞまされる

是貞のみこの家の歌合の歌

秋の夜のあくるもしらずなく蟲はわがごとものや悲しかるらむ

題しらず　よみ人しらず

あき萩も色づきぬればきりぎりすわが寐ぬごとやよるは悲しき

あきの夜は露こそことにさむからし草むらごとに蟲のわぶれば

君しのぶ草にやつるるふるさとはまつ蟲の音ぞかなしかりける

あきの野に路もまどひぬまつむしの聲するかたに宿やからまし

あきの野に人まつ蟲の聲すなりわれかと行きていざとぶらはむ

もみぢばの散りて積れるわが宿にたれをまつ蟲ここら鳴くらむ

蜩（ひぐらし）の鳴きつるなべに日は暮れぬとおもふはやまの陰にざりける

日ぐらしの鳴くやま里のゆふぐれは風よりほかに訪（と）ふ人もなし

初雁をよめる　在原元方

○わがごと―我が如く。

○色づき―葉の枯れて色の變るをいふ。

○蟲のわぶれば―蟲のつらがつて鳴くを思へば。

○しのぶ草―偲ぶに忍草をかく。○やつるゝ―見ざまのわるくなるをいふ。

○まつ蟲―松蟲に人を待つ意を寄す。

○われかと―自分ではなきかと。

○こゝら―許多。

○鳴きつるなべに―鳴いたのにつれて。○にざり―にぞありの約。

○ものから―物ながら。

○たまづさ―玉梓。書簡をいふ。この歌漢の蘇武の故事による。

○いなおほせ鳥―田の畔などに居て秋鳴く鳥とぞ。

○いとはやも―至つて早くも。○雁が―かは歎辭。

○いにし―往にしにて、立去ること。○かりがね―雁。

○夜をさむみ―夜が寒くて。○衣かりがね―着物を借るに、雁がねをかく。

○ほにあげて―高く上げて。○あまのと―大空。

○思ひつられて―いろいろ思ひ續けて。○よなよな―毎夜。

まつ人にあらぬものからはつ雁のけさなく聲のめづらしきかな

是貞のみこの家の歌合の歌　とものり

秋風にはつ雁がねぞきこゆなるたがたまづさをかけてきつらむ

題しらず　よみ人しらず

わが門にいなおほせ鳥の鳴くなべにけさ吹く風に雁はきにけり

いとはやも鳴きぬる雁か白露の色どる木々ももみぢあへなくに

はる霞かすみていにしかりがねはいまぞなくなる秋霧のうへに

夜をさむみ衣かりがね鳴くなべに萩のした葉もうつろひにけり

この歌は、ある人のいはく、柿本人丸がなりと。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　藤原菅根朝臣

秋風に聲をほにあげてくる船はあまのとわたる雁にぞありける

雁の鳴きけるを聞きてよめる　みつね

うきことを思ひつらねて雁がねのなきこそわたれ秋のよなよな

是貞のみこの家の歌合の歌　　ただみね

やま里は秋こそことにわびしけれ鹿のなくねに目をさましつつ

よみ人しらず

おく山にもみぢ踏みわけなく鹿のこゑきくときぞ秋はかなしき

題しらず

あき萩にうらびれをればあしひきの山したとよみ鹿のなくらむ

あき萩をしがらみふせてなく鹿の目には見えずて音のさやけさ

是貞のみこの家の歌合によめる　　藤原敏行朝臣

あきはぎのはな咲きにけり高砂のをのへの鹿はいまやなくらむ

昔あひしりて侍りける人の、秋の野にて逢ひて、物語しけるついでによめる　　みつね

秋はぎのふる枝に咲けるはな見ればもとの心はわすれざりけり

題しらず　　よみ人しらず

あき萩のした葉色づく今よりやひとりある人のいねがてにする

○うらびれ—愁ふる。○とよみ—響く。○しがらみふせて—しをり搦み伏せて。○さやけさ—あざやかさ。

○高砂の—山の。

○もとの心—以前の心。

○ひとりある人—獨身の人。○いねがて—寝れ難く。

○けぬ—消えた。

○おちぞしめべき—落ちて仕舞ひさうな。○たわわに—撓むほどに。○ぬれてを行かむ—濡れて行かむにて、かは歎辭。

○おちにき—墮落した。操を立てあへぬにいふ。

○男山—山城國石清水八幡の山。

○名をむつましみ—女郎花のなみなといふ名がむつましくて。

なきわたるかりの涙やおちつらむ物おもふやどの萩のうへの露

はぎの露たまにぬかむと取ればけぬよし見む人は枝ながらみよ

ある人のいはく、この歌は、奈良のみかどの御歌なりと。

をりて見ばおちぞしぬべきあき萩の枝もたわわにおける白つゆ

萩がはな散るらむ小野の露霜にぬれてを行かむさ夜はふくとも

是貞のみこの家の歌合によめる　　文屋あさやす

あきの野におくしら露は玉なれやつらぬきかくるくもの絲すぢ

題しらず　　僧正遍昭

名にめでてをれるばかりぞ女郎花(をみなへし)われおちにきと人にかたるな

僧正遍昭がもとに、奈良へまかりける時に、男山にて、女郎花を見てよめる　　ふるのいまみち

をみなへし憂しと見つつぞ行きすぐる男山にし立てりと思へば

是貞のみこの家の歌合の歌　　敏行朝臣

あきの野にやどりはすべし女郎花名をむつましみ旅ならなくに

○あやなく—わけもなく
○朱雀院—亭子院ともいふ。この時は宇多上皇おはしましければ、これは宇多上皇をさす。
○心ひとつ—一心。
○生ひぬものから—生ひもせぬ物ながら。
○たがあきに—誰が飽くに、秋をかく。○まだき—移らふ—早くも色が變る

題しらず

女郎花多かる野べにやどりせばあやなくあだの名をや立ちなむ

朱雀院の女郎花合によみて奉りける　左のおほいまうち君、

をみなへしあきの野風にうちなびき心ひとつをたれに寄すらむ

藤原定方朝臣

あきならで逢ふことかたき女郎花あまの川原に生ひぬものゆゑ

つらゆき

たがあきにあらぬもの故女郎花なぞ色に出でてまだきうつらふ

みつね

妻こふる鹿ぞ鳴くなるをみなへしおのが住む野の花と知らずや

女郎花ふき過ぎてくるあき風は目には見えねど香こそしるけれ

ただみね

人の見ることやくるしきをみなへし秋霧にのみたちかくるらむ

ひとりのみながむるよりは女郎花わがすむ宿に植ゑて見ましを

ののよしき

○物へまかりけるに—或所へ行つたに。
○うしろめたくも—不安心にも。
○藏人所—宮中の機密文書諸訴を掌る所。○嵯峨野—京都の西北嵯峨にあり。
○なに—なに故に。
○藤袴—秋草の一種。葉は香氣高し。
○ぬし—持主。

物へまかりけるに、人の家に、女郎花うゑたりけるを見てよめる

女郎花うしろめたくも見ゆるかな荒れたる宿にひとり立てれば

寛平の御時、藏人所のをのこども、嵯峨野に花見むとてまかりたりける時、歸るとて、みな歌よみけるついでによめる

兼覽王

花にあかでなに歸るらむ女郎花おほかる野べに寢なましものを

是貞のみこの家の歌合の歌

敏行朝臣

なに人かきてぬぎかけし藤ばかまくる秋ごとに野べをにほはす

藤袴をよみて人につかはしける

つらゆき

やどりせし人のかたみかふぢ袴わすられがたき香ににほひつつ

藤袴をよめる

そせい

ぬししらぬ香こそにほへれ秋の野にたがぬぎかけしふぢ袴ぞも

題しらず

平貞文

○花薄—薄の穂を出せるをいふ。
○穂にいでて云々—恰も人が出て、戀しき人を招く袖のやうに見ゆる。
○夕陰—夕日の陰。
○はなの紐とく—花の開くを下紐を解くに喩ふ。
○たはれむ—戯れん。
○つき草—今の螢草。その花物に着き易く、古は衣を染むるに用ゐたり。
○すらむ—摺り着けん。
○布留の瀧—大和國山邊郡石上の布留。

今よりはうゑてだに見じはな薄穂にいづる秋はわびしかりけり
寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　在原棟梁

あきの野の草のたもとかはな薄穂にいでてまねぐ袖と見ゆらむ
素性法師

われのみやあはれと思はむきりぎりす鳴く夕かげのやまと撫子
題しらず　よみ人しらず

緑なるひとつ草とぞはるはみし秋はいろいろの花にぞありける

ももぐさのはなの紐とくあきの野に思ひたはれむ人なとがめそ

つき草にころもはすらむ朝露にぬれてののちはうつろひぬとも
仁和のみかど、みこにおはしましける時、布留の瀧御覽ぜむとてお
はしましける道に、遍昭が母の家にやどり給へりける時に、庭を秋の野に作りて、おほん物語のついでによみて奉りける
僧正遍昭

里はあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋の野らなる

○吹くからに—吹くによりて。○うべ—尤も。成程。
○ときはの山—山城にありとか。
○片岡のあしたの原—大和國葛下郡。
○かみな月—陰暦十月の異名。○かれて—前方より。
○神なひの森—大和國平群郡。三室山又神南備山といふ。

古今和歌集巻第五

秋歌下

是貞のみこの家の歌合の歌　文屋康秀

吹くからにあきの草木のしをるればうべ山かぜを嵐といふらむ

くさも木もいろ變れどもわたつみの波のはなにぞ秋なかりける
秋の歌合しける時によめる　きのよしもち

もみぢせぬときはの山はふく風のおとにや秋を聞きわたるらむ
題しらず　よみ人しらず

霧たちてかりぞなくなる片岡のあしたのはらはもみぢしぬらむ

かみな月時雨もいまだ降らなくにかねてうつろふ神なひのもり

ちはやぶる神なひ山のもみぢ葉におもひはかけじ移ろふものを

○貞觀—清和帝の御代の年號。○綾綺殿—禁中御殿の名。

貞觀(ぢやうぐわん)の御時、綾綺殿(れうきでん)の前に、梅の木ありける、西の方にさせりける枝のもみぢそめたりけるを、うへにさぶらふをのこどもよみけるついでに詠める

藤原かちおむ

同じ枝をわきて木の葉のうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ

石山へまうでける時、音羽山の紅葉を見てよめる

つらゆき

○わきて—取りわけて。

あき風のふきにし日よりおとはやま峰の木ずゑも色づきにけり

是貞のみこの家の歌合によめる

としゆきの朝臣

○石山—近江國石山觀音のを。

しら露の色はひとつをいかにして秋の木(こ)の葉を千ぢ(ち)に染むらむ

壬生忠岑

○ひとつを—一つなるものを。

あきのよの露をば露とおきながら雁のなみだや野べを染むらむ

題しらず

よみ人しらず

秋の露いろいろことにおけばこそ山のこの葉の千ぐさなるらめ

もる山のほとりにてよめる

つらゆき

○もろ山—近江國志賀郡守山。

しら露もしぐれもいたくもる山は下葉のこらずいろ付きにけり

秋の歌とてよめる

在原元方

○笠とりの山—山城國宇治郡。○つゆも—すこしも、露を寄す。

雨ふれどつゆも洩らじを笠とりの山はいかでかもみぢそめけむ

神の社のあたりをまかりける時に、齋垣のうちの紅葉を見てよめる

つらゆき

○齋垣—穢を忌み隔つる垣の義にて、神社の周圍の玉垣。○あへず—堪へず。

ちはやぶる神のいがきにはふ葛も秋にはあへずうつろひにけり

是貞のみこの家の歌合によめる

ただみね

○佐保山—大和國添上郡

雨ふればかさとり山のもみぢ葉はゆきかふ人のそでさへぞ照る

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

よみ人しらず

ちらねどもかぬてぞをしきもみぢ葉はいまは限の色と見つれば

大和の國にまかりける時、佐保山に霧の立てりけるを見てよめる

きのとものり

たがための錦なればか秋ぎりの佐保のやまべを立ちかくすらむ

是貞のみこの家の歌合の歌

よみ人しらず

○あき霧はけさはな立ちそ佐保山のははその紅葉よそにても見む
秋の歌とてよめる　坂上是則

○さほ山のははその色はうすけれど秋はふかくもなりにけるかな
人の前栽に、菊に結びつけてうゑける歌　在原業平朝臣

○植しうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや
寛平の御時、菊の花をよませ給ひける　敏行朝臣

○ひさかたの雲のうへにて見る菊はあまつ星とぞあやまたれける
この歌は、まだ、殿上許されざりける時に召しあげられて仕うまつるとなむ

○つゆながらをりてかざさむ菊の花おいせぬ秋のひさしかるべく
寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　紀友則

○うゑしとき花まちどほにありし菊うつろふ秋にあはむとや見し
同じ御時せられける菊合に、洲濱を作りて、菊の花植ゑたりける歌　大江千里

○あき風のふきあげに立てるしら菊は花かあらぬか涙のよするか
仙宮に、菊をわけて、人の到れるかたをよめる　素性法師

○ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千とせをわれはへにけむ
菊の花のもとにて、人の人まてるかたをよめる　とものり

花見つつ人まつときはしろたへの袖かとのみぞあやまたれける
大澤の池のかたに、菊植ゑたるをよめる

ひともとと思ひしはなをおほさはの池の底にもたれか植ゑけむ
世の中のはかなき事を思ひける折に、菊の花を見てよめる　つらゆき

秋の菊にほふかぎりはかざしてむ花よりさきと知らぬわが身を

○ふきあげに―吹上の濱に。
○仙宮―仙人の家。○かた―繪。
○洲濱―今の島臺といふに似たり。○ふきあげの濱―紀伊國和歌の浦の附近。
○見し―思ひしに同じ。
○しろ妙の袖―陶淵明が故事に九月九日、白衣の人酒を贈り來ることあり
○大澤の池―山城郡葛野郡上嵯峨にありて、嵯峨帝の離宮の境内に屬せしとぞ。
○わが身を―わが身なるものを。

○心あて—あて推量。○折らばや折らむ—折るならば折らうか。○おきまどはせる—霜の置きてまぎらはしく見する。

○仁和寺—山城國葛野郡字多上皇こゝにおはします。

○おきて—さしおいて。

○散りぬべみ—散りさうに見ゆるによりて。

○いはがき—岩垣。

○たつた川—大和國平群郡。○ならの御門—平城帝か。

○みむろの山—秋歌下「神無月時雨もいまだ云云」の歌を見よ。○あすか川—大和國高市郡。

○しのばむ—賞で愛しまん。

○もみぢ葉の—もみぢ葉の如くに。

白菊の花をよめる　凡河内躬恒

心あてに折らばや折らむはつ霜のおきまどはせるしら菊のはな

是貞のみこの家の歌合の歌　よみ人しらず

いろかはる秋のきくをば一(ひと)とせにふたたびにほふ花とこそ見れ

仁和寺に菊の花めしける時に、歌そへて奉れと仰せられければ　平貞文

よみて奉りける

秋をおきて時こそありけれ菊の花うつろふからに色のまされば

人の家なりける菊を、移し植ゑたりけるをよめる　つらゆき

さきそめし宿しかはれば菊のはな色さへにこそうつろひにけれ

題しらず　よみ人しらず

佐保山のははその紅葉散りぬべみよるさへ見よとてらす月かげ

宮づかへ久しう仕うまつらで、山里にこもり侍りけるによめる　藤原關雄

おくやまのいはがき紅葉散りぬべしてる日の光見るときなくて

題しらず　よみ人しらず

たつた川紅葉みだれてながるめり渡らばにしきなかや絶えなむ

この歌は、ある人、ならの御門の御歌なりとなむ申す。

たつ田川もみぢ葉ながる神なひのみむろの山にしぐれふるらし

又はあすか川もみぢ葉ながる

戀しくば見てもしのばむもみぢ葉を吹きな散しそ山おろしの風

あき風にあへず散りぬるもみぢ葉のゆくへ定めぬわれぞ悲しき

秋は來ぬもみぢはやどにふりしきぬ路ふみわけてとふ人はなし

踏み分けて更にや訪はむもみぢ葉のふり隱してし路と見ながら

あきの月山べさやかにてらせるはおつる紅葉のかずを見よとか

ふく風の色の千ぐさに見えつるは秋の木の葉の散ればなりけり

せきを

霜のたて露のぬきこそよわからし山のにしきのおればかつ散る
　雲林院の木の陰にたたずみて　僧正遍昭

わび人のわきてたち寄る木のもとは頼むかげなく紅葉散りけり
　二條の后の春宮（とうぐう）のみやす所と聞えける時、御屏風に、立田川に
　紅葉流れたるかたを書けりけるを、題にてよめる　そせい

もみぢ葉の流れてとまる湊にはくれなゐふかきなみや立つらむ
　業平朝臣

ちはやぶる神代も聞かずたつ田川からくれなゐに水くくるとは
　敏行朝臣

是貞のみこの家の歌合の歌

わが來つる方も知られず暗部山（くらぶやま）木々の木の葉の散りとまがふに
　ただみね

かみなひのみむろの山をあき行けば錦たちきるここちこそすれ
　北山に、紅葉をしむとてまかれりける時によめる

○霜のたて露のぬき―紅葉を山の錦として、霜露を經緯にして織れる物と見たり。
○わび人―心に物のかなはぬ人。
○くゝる―絞るにて、絞り染めにすること。
○散りとまがふに―散り紛ふによりて。
○たちきる―裁ち着る。
○北山―山城國葛野郡。

見る人もなくて散りぬるおくやまのもみぢはよるの錦なりけり
　秋のうた　かねみ王

立田姫たむくる神のあればこそあきの木の葉のぬさと散るらめ
　小野といふところに住み侍りける時、紅葉を見てよめる　つらゆき

あきの山紅葉をぬさとたむくれば住むわれさへぞ旅ごこちする
　神なひ山を過ぎて、立田川を渡りける時に、紅葉の流れけるを
　よめる　貫之

かみなひの山を過ぎゆく秋なればたつ田川にぞぬさはたむくる
　寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　藤原興風

白なみに秋の木の葉のうかべるをあまのながせる舟かとぞ見る
　立田川のほとりにてよめる　坂上是則

もみぢ葉の流れざりせばたつ田川みづの秋をばたれか知らまし

○よるの錦―前漢の朱買臣の故事、富貴不レ歸二故郷一、如二衣レ繡夜行一による。
○立田姫―大和國平群郡立田山の立田社の祭神にして、秋を司れる神なり。
○ぬさ―幣帛。
○小野―京都葛野郡。
○あま―海人。

志賀の山越にてよめる　　春道列樹

山川にかぜのかけたるしがらみは流れもあへぬもみぢなりけり

池のほとりにて、紅葉の散るをよめる　　みつね

○風ふけばおつるもみぢ葉水きよみ散らぬかげさへ底に見えつつ

亭子院の御屏風の繪に、川渡らむとする人の、紅葉の散る木のもとに、馬をひかへて立てるをよませ給ひければ、仕うまつりける

たちどまり見てを渡らむもみぢ葉は雨と降るとも水はまさらじ

是貞のみこの家の歌合の歌　　ただみね

やま田もる秋のかりほにおくつゆはいなおほせ鳥の涙なりけり

題しらず　　よみ人しらず

穗にも出ぬやま田をもるとふぢ衣いな葉の露に濡れぬ日はなし

かれる田に生るひづちの穗に出ぬは世を今更にあき果てぬとか

北山に、僧正遍昭と、茸狩にまかれりけるによめる

○しがらみ—柵。水流をせく爲、杭を立て連ねて、横に竹柴などをからみつけたるもの。

○見てを—をは歎。

○かりほ—假庵。

○ふぢごろも—賤者の服。

○ひづち—刈あとの株より再び自生する稻。○あき—飽きに秋を寄す。

○こきいれて—すごき入れて。

○とまり—泊、舟の繫る所。

○長月—陰曆九月の異名　○大堰—山城國嵐山の麓を流るゝ大堰川に沿へる里。小倉山はその北にあり。○夕づく夜—小倉山の序詞。

もみぢ葉は袖にこきいれてもて出なむ秋はかぎりと見む人の爲

寬平の御時、ふるき歌奉れと仰せられければ、立田川もみぢ葉流るといふ歌を書きて、そのおなじ心をよめりける　　そせい法師

み山より落ちくる水のいろ見てぞ秋はかぎりとおもひ知りぬる

秋のはつる心を立田川に思ひやりてよめる　　つらゆき

年ごとにもみぢ葉ながすたつ田川みなとや秋のとまりなるらむ

長月のつごもりの日、大堰にてよめる　　みつね

夕づく夜をぐらのやまに鳴く鹿のこゑのうちにや秋は暮るらむ

同じ晦の日よめる　　みつね

路しらば尋ねも行かむもみぢ葉をぬさと手向けて秋はいにけり

古今和歌集 巻第六

冬 歌

題しらず　よみ人しらず

たつ田がは錦おりかくかみなづきしぐれの雨をたてぬきにして

冬の歌とてよめる　源宗于朝臣

やま里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬとおもへば

題しらず　よみ人しらず

おほ空の月のひかりしきよければかげ見し水ぞまづこほりける

夕されば衣手さむしみよし野のよし野の山にみ雪ふるらし

今よりはつぎて降らなむわが宿のすすきおしなみふれるしら雪

ふる雪はかつぞけぬらしあし引の山のたぎつ瀬おとまさるなり

○かれぬ—草も枯れ、人目も離れぬ。

○きよければ—古本、六帖、朗詠等に、さむければとあり。

○夕されば—夕べになれば。

○つぎて—引續きて。○おしなみ—推靡かして。

○かつぞけぬらし—そばから消えるらしい。

この川にもみぢ葉ながるおくやまの雪けの水ぞいままさるらし

ふるさとは吉野の山しちかければひと日もみ雪降らぬ日はなし

わがやどは雪ふりしきて路もなしふみわけてとふ人しなければ

　紀貫之

ゆきふれば冬ごもりせる草も木もはるに知られぬ花ぞ咲きける

　志賀の山越にてよめる　紀秋岑

白雪のところもわかず降りしけばいはほにも咲く花とこそ見れ

　奈良の京にまかれりける時に、宿りける所にてよめる

　坂上是則

みよし野のやまのしら雪つもるらし古里さむくなりまさるなり

　寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　藤原興風

浦ちかくふりくる雪はしらなみのするがの松やま越すかとぞ見る

　壬生忠岑

○雪け—けは消えの約。

○山し—しは強辭。○み雪—みは美稱。

○古里—奈良の故京。

○するがの松山—場所不明

○歌は集中第廿卷の「君をおきてあだし心を云云」の歌によりてよめり。

○おもひ消ゆらむ—心細く消え入るやうに思ふだらう。
○あとはか—跡といふに同じ。
○冬ごもり—諸木の冬枯れて、芽も出さず籠り居るをいふ。
○けぬがうへに—まだ消えぬその上に。
○あまきる—天きらふと同じ。こゝは天の曇るをいふ。奈良時代の語。

みよし野の山のしら雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ

しら雪のふりてつもれるやま里はすむ人さへやおもひ消ゆらむ
　雪のふるを見てよめる　凡河内躬恒

雪ふりて人もかよはぬみちなれやあとはかもなく思ひきゆらむ
　雪のふりけるをよみける　清原深養父

冬ながら空よりはなのちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ
　雪の木にふりかかれりけるをよめる　つらゆき

冬ごもりおもひがけぬを木のまより花と見るまで雪ぞふりける
　大和の國にまかれりける時に、雪のふりけるを見てよめる　坂上是則

朝ぼらけありあけの月と見るまでによし野の里にふれるしら雪
　題しらず　よみ人しらず

けぬがうへにまたも降りしけ春霞立ちなばみ雪まれにこそ見め

梅のはなそれとも見えずひさ方のあまぎる雪のなべて降れれば

○かれにし人—離れにし人、即ち寄りつかぬ人。冬草の枯るるにかく。
○ふり増り—身の舊り増るをかく。
○ちみぢぬ—色の變らぬ
○まがひせば—混ふならば。○ことごと—別々。

この歌は、ある人のいはく、柿の本の人まろが歌なり。

梅の花に雪のふれるをよめる　小野篁朝臣

花の色は雪にまじりて見えずとも香をだににほへ人のしるべく

雪のうちの梅の花をよめる　紀貫之

梅の香のふりおける雪に紛ひせば誰かことごとわきて折らまし

雪のふりけるを見てよめる　紀友則

雪ふれば木ごとに花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし

物へまかりける人を待ちて、師走のつごもりによめる　みつね

わがまたぬ年は來ぬれど冬ぐさのかれにし人はおとづれもせず

年のはてによめる　在原元方

あらたまの年のをはりになるごとに雪もわが身もふり増りつつ

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　よみ人しらず

雪ふりて年の暮れぬるときにこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

年のはてによめる

春道列樹

昨日といひけふとくらして明日香川ながれて早き月日なりけり

歌奉れと仰せられし時によみて奉りける　紀貫之

行く年のをしくもあるかなます鏡見る影さへに暮れぬと思へば

○ます鏡―眞澄鏡の義。
○暮れぬ―老ゆるを喩ふ

古今和歌集巻第七

賀歌

題しらず

よみ人しらず

わが君は千代に八千代にさざれ石の巌（いはほ）となりてこけの蒸（む）すまで

わたつみの濱のまさごを數へつつ君が千とせのありかずにせむ

しほの山さしでの磯にすむちどり君がみ代をばやちよとぞ鳴く

わが齢君が八千世にとりそへてとどめおきてばおもひ出にせよ

仁和の御時、僧正遍昭に、七十の賀給ひける時の御歌

かくしつつとにもかくにも長らへて君が八千代にあふ由（よし）もがな

仁和の御門の、みこにおはしましける時に、御をばの八十の賀に、白かねを杖に作れりけるを見て、かの御をばに代りてよめる

僧正遍昭

○わが君は―和漢朗詠集には、君が代はとあり。
○さゞれ石―小石。
○ありかず―在數。
○しほの山―能登國羽咋郡にあり。○さしでの磯―しほの山附近ならん。
○おきてば―置いたならば。

○御をば―光孝帝の御母藤原澤子の姉か。

ちはやぶる神のきりけむつくからに千年の坂も越えぬべらなり

堀川のおほいまち君の四十の賀、九條の家にてしける時によめる

在原業平朝臣

櫻ばなちりかひくもれおいらくの來むといふなる路まがふかに

貞辰（さたとき）のみこのをばのよそぢの賀を、大井にてしける日よめる

紀惟岳（これをか）

亀のをの山のいはねをとめておつる瀧のしら玉千代のかずかも

貞保（さたやす）のみこの、きさいの宮の五十の賀奉りける御屏風に、櫻の花のちるしたに、人の花見るかたかけるをよめる

藤原興風

いたづらに過ぐる月日はおもほえで花見てくらす春ぞすくなき

本康のみこの七十の賀のうしろの屏風に、よみてかきける

紀貫之

春くればやどにまづさく梅のはな君が千とせのかざしとぞ見る

○きりけむ—竹木を切りて杖に作ること。○つくからに—杖をつくによりて。

○堀川のおほいまうち君—堀川太政大臣。藤原基經のこと。

○おいらく—老。○まがふかに—紛ふかのやうに

○貞辰のみこのをば—貞辰親王は清和帝の皇子。をばは御母佳珠子の姉頼子。

○亀のをの山—山城國葛野郡亀山。

○貞保のみこ—清和帝の皇子。○きさいのみや—貞保親王の母后の事にして、二條后藤原高子なり。

○本康親王—仁明帝の第五皇子。○うしろの屏風—賀筵に御座の後に立つる屏風。

いにしへにありきあらずは知らねども千年のためし君に始めむ

素性法師

ふして思ひおきて數ふるよろづ代は神ぞしるらむわが君のため

藤原三善が六十の賀によみける

つる亀もちとせののちはしらなくにあかぬ心にまかせはてむ

在原滋春

この歌は、或人、在原の時春がともいふ。

良岑のつねなりがよそぢの賀に、むすめに代りてよみ侍りける

そせい法師

よろづ代をまつにぞ君を祝ひつる千年の蔭にすまむとおもへば

内侍のかみの、右大將藤原朝臣の四十の賀しける時に、四季の繪かけるうしろの屏風に書きたりける歌

春

かすが野にわか菜摘みつつ萬代をいはふこころは神ぞしるらむ

躬恒

○ありきあらずは—あらたなりかつたは。○千年のためし—千年生きるためし。

○あかぬ心に云々—何時まで居ても飽き足らず思ふ心のまゝに、君の齢を任せ置かん。

○つねなり—經也か。

○まつ—待つに、松をかく。○つる—鶴を寄せたるか。

○内侍のかみ—尚侍にして、贈太政大臣藤原高藤の女満子。○右大將—高藤の三男定國のこと。満子の兄。

やまたかみ雲ゐに見ゆるさくらばな心のゆきてをらぬ日ぞなき

夏

めづらしきこゑならなくに時鳥ここらの年をあかずもあるかな

友則

秋

すみの江の松をあき風ふくからにこゑうちそふるおきつしら波

躬恒

忠岑

千鳥なく佐保の河ぎり立ちぬらし山の木の葉もいろまさり行く

あきくれど色もかはらぬときは山よそのもみぢを風ぞかしける

冬

貫之

しら雪のふりしくときはみよし野の山した風にはなぞ散りける

春宮のうまれ給へりける時に參りてよめる

典侍藤原因香朝臣

みねたかき春日の山にいづる日はくもるときなく照すべらなり

○心のゆきて—満足すること。それに心の往くを寄す。

○こゝらの年—多くの年

○すみの江—攝津國住吉郡住吉。

○よそのもみぢを云々—餘所の山の紅葉を、風が吹きこして貸した。

○春宮—醍醐帝の第二の皇子保明親王。御母は基經の女、中宮穩子。○春日の山—大和の奈良にあり。藤原氏の祖神を祀る。○いづる日は云々—日を春宮にたとへ、曇る時なく、明らかに天下を治められるやうであると也。

○立別れいなば—別れて去なばに、稻羽をかく。いなばは因幡國の稻羽山。

○すがる—蜾蠃と書く。蜂の一種。

○おくらさむやは—後れさせて置かうや、いや心には何處までも連れて行かう。

○たらちね—親の枕詞。

○親のまもりと—この親が守として。

○馬のはなむけ—餞別。

○あすはあふみ—明日は逢ふ身に、近江をかく。

古今和歌集巻第八

離別歌

題しらず

在原行平朝臣

たち別れいなばの山の峰におふるまつとし聞かば今かへりこむ

よみ人しらず

すがるなく秋のはぎはら朝たちてたびゆく人をいつとか待たむ

かぎりなき雲居のよそにわかるともひとを心におくらさむやは

小野の千古（ちふる）が、みちのくの介にまかりける時に、母のよめる

たらちねの親のまもりとあひ添ふる心ばかりはせきなとどめそ

貞辰（さだとき）のみこの家にて、藤原の清生（きよふ）が、近江の介にまかりける時に、馬のはなむけしける夜よめる

紀利貞

けふ別れあすはあふみと思へども夜やふけぬらむ袖のつゆけき

越へまかりける人によみて遣しける

かへる山ありとは聞けど春かすみたちわかれなば戀しかるべし

人の馬のはなむけにてよめる　紀貫之

をしむから戀しきものを白雲のたちなむのちはなにごこちせむ

友だちの、人の國へまかりけるによめる　在原滋春

別れてはほどをへだつと思へばやかつ見ながらにかねて戀しき

あづまの方へまかりける人に、よみて遣しける

おもへども身をし分けねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる

いかごのあつゆき

逢坂にて人を別れける時によめる　難波萬男

あふ坂の關しまさしきものならばあかずわかるる君をとどめよ

題しらず　よみ人しらず

唐ごろもたつ日は聞かじ朝露のおきてし行けばけぬべきものを

この歌は、ある人つかさを給はりて、新しきめにつき、年へて住みけん人をす

○かへる山―越前の國敦賀郡の鹿蒜山。

○をしむから―別を惜むうちから。○白雲の―たちの序詞。

○程をへだつ―道を遠く隔つ。○かつ見ながらに―一方には見ゝ居ながらに。

○身をし分ければ―身を二つに分けられぬによりて。○たぐへて―添はせて。

○あふ坂―山城近江の國境の山にて、そこに關を置けり。○まさしきものならば―正しく人をせき止むるものならば。

○たつ―裁つに立つをかく。

○露の―おきの序詞。

てゝ、たゞ明日なむ立つとばかりいへりける時に、ともかうもいはで、詠みてつかはしける

常陸へまかりける時、藤原の公利に詠みてつかはしける

朝なけに見べききみとしたのまねば思ひたちぬる草まくらなり

紀宗貞が、あづまへまかりける時に、人の家にやどりて、曉出立つとて、まかり申しければ、女の詠みて出せりける

よみ人しらず

えぞしらぬいまこころみよ命あらばわれや忘るる人やとはぬと

あひしりて侍りける人の、あづまの方へまかりけるを送るとて

ふかやぶ

雲居にも通ふこころのおくれねばわかると人に見ゆばかりなり

友のあづまへまかりける時によめる　良岑秀崇

白雲のこなたかなたにたちわかれこころをぬさとくだく旅かな

みちの國へまかりける人によみて遣しける　つらゆき

○朝なけ―毎日。○見べき云々―見るべき君とたのまれぬ故。公利を寄す。○草まくら―旅たち。わが名のくらを寄す。

○まかりまうし―暇乞。

○えぞしらぬ―知り得ぬ。○今こゝろみよ―やがて試して見よ。

○雲居にも云々―遠き所に行かれても、わが心は何時も貴方の居ろ方へ通ひて、跡に後くれて居れば。

○白雲の―白雲の如く。

○ぬさと―幣の如く。

○をち—俗のあちら。遠方。
○色にもあらなくに—物に染まる色でもないのに下に何故にを含めり。
○何そはありて—なにそれは在つても。あり甲斐のなきをいふ。
○白山—加賀國能美郡。
○ゆき見ろ—雪に往き見るをかく。
○から物の使—唐國勃海等の商船の筑紫に着きたる時に、その積荷を檢めて、珍奇の物は都に奉りなどする爲に遣はさるゝ使。後の唐物奉行なり。
○たうび—賜ひ。

しら雲の八重にかさなるをちにても思はむ人にこころへだつな
　人を別れける時によめる
わかれてふことは色にもあらなくに心にしみてわびしかるらむ
　あひしれりける人の、越の國にまかりて、年へて、京にまうできて、又歸りける時によめる　凡河内躬恒
歸る山何そはありてあるかひは來てもとまらぬ名こそありけれ
　越の國へまかりける人に、よみて遣しける
よそにのみ戀ひや渡らむ白山のゆき見るべくもあらぬわが身は
　音羽山のほとりにて、人を別るとてよめる　つらゆき
おと羽やま木高くなきてほととぎす君がわかれを惜むべらなり
　藤原の後蔭が、から物の使に、長月のつごもり方にまかりけるに、うへのをのこ共、酒たうびけるついでによめる　藤原かねもち
もろ共になきてとどめよきりぎりす秋の別は惜しくやはあらぬ

○秋霧のともに—秋霧の立つと共に。
○ゆあみむ—湯治せん。
○山崎—山城、河内攝津三國の堺。
○いのちだに云々—命だけでも心任せになりて死なずに居るものならば。
○神なひの森—山崎の南にあり。
○人やりの道—人のやる道にして、わが心から行くにあらぬ道。
○歸るさ—歸りしな。
○人だのめ—徒にあてにさせる。

秋霧のともに立ち出でて別れなばはれぬおもひに戀ひや渡らむ
　源實が、筑紫へ湯あみむとてまかりける時に、山崎にて別をしみける所にてよめる　平もとのり
いのちだに心にかなふものならば何かわかれのかなしからまし
　山崎より神なひの森まで、送に人々まかりて、歸りがてにして別惜みけるによめる　源實
人やりの道ならなくにおほ方はいきうしといひていざ歸りなむ
　今はこれより歸りねと、實がいひける折によめる　藤原かねもち
慕はれてきにし心の身にしあればかへるさまには路もしられず
　藤原惟岳が、武藏の介にまかりける時に、おくりて、逢坂を越ゆとてよみける　つらゆき
かつ越えて別れも行くか逢坂は人だのめなる名にこそありけれ

大江千古が、越へまかりける、馬のはなむけによめる

藤原兼輔朝臣

君が行くこしのしら山しらねどもゆきのまにまに跡はたづねむ

人の花山にまうできて、夕さりつ方歸りなむとしける時によめる

僧正遍昭

夕暮のまがきは山と見えなくにむよるは越えじとやどりとるべく

山にのぼりて、歸りまうで來て、人々わかれけるついでによめる

幽仙法師

わかれをばやまの櫻にまかせてむとめむとめじは花のまにまに

雲林院のみこの、舍利會に、山にのぼりて歸りけるに、櫻の花のもとにてよめる

僧正遍昭

山風にさくらふきまきみだれなむ花のまぎれに立ちとまるべく

幽仙法師

ことならば君留るべく匂はなむかへすは花のうきにやはあらぬ

○まがき—籬。○見えななむ—見えて晃れよ。
○山—比叡山。延暦寺あり。
○舍利會—佛骨供養の法會。
○花のまぎれに—花の散る紛れに。
○ことならば—とてもかく見事に咲く程ならば。
○うきにやはあらぬ—不面目にはあらぬかい。

○しも—川下。

仁和のみかど、みこにおはしましける時に、布留の瀧御覽じにおはしまして、歸り給ひけるによめる

兼藝法師

あかずしてわかるる涙瀧にそふみづまさるとやしもは見ゆらむ

かむ鳴の壺にめしたりける日、大御酒などたうべて、雨のいたう降りければ、夕さりまで侍りて、まかりいでて侍りける折に、杯をとりて

つらゆき

秋萩のはなをば雨にぬらせども君をばましてをしとこそおもへ

とよめりける

兼覽王

をしむらむ人の心を知らぬまにあきのしぐれと身ぞふりにける

兼覽王に、始めて物語して、別れける時によめる

みつね

わかるれど嬉しくもあるか今宵よりあひ見ぬ先に何を戀ひまし

題しらず

よみ人しらず

あかずしてわかるる袖のしらたまは君が形見とつつみてぞ行く

○とよめりける—前の歌を受けて、しかじかと賞之の讀みけるその返歌也。
○時雨と—時雨の如く。
○ふり—降りに簑りをかく。
○しらたま—涙の形容。

かぎりなくおもふ涙にそぼちぬる袖はかわかじ逢はむ日までに

かきくらしことはふらなむ春さめにぬれ衣きせて君をとどめむ

しひて行くひとをとどめむ櫻ばないづれを路とまどふまで散れる

志賀の山越にて、いし井のもとにて、物いひける人の別れける

つらゆき

むすぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人にわかれぬるかな

路にありける人の車に、物をいひつきて、別れける所にてよめる

とものり

したの帶の路はかかたに別るとも行き巡りても逢はむとぞ思ふ

○そぼちぬる—濡れ透る　○ことは—とても降るほどならば。○ぬれ衣—寃名。

○いし井—岩ある所に清水の湛へてある處。

○山の井の—山の井の井の如く。山の井は山清水を堰き溜めたる處。

○いひつき—言ひ寄り着く。

○したの帶の—したの帶の如く。したの帶は服の下に着たる物の紐。

古今和歌集卷第九

羇旅歌

もろこしにて月を見てよみける　安倍仲麻呂

あまの原ふりさけ見ればかすがなる三笠のやまにいでし月かも

この歌は、昔仲麿を、もろこしに物ならはしに遣したりけるに、あまたの年をへて、え歸りまうでこざりけるを、この國より使まかり到りけるに、たぐひてまうできなむとて出でたりけるに、めいしうといふところの海べにて、かの國の人、うまのはなむけしけりけるに、月のいと面白くさし出でたりけるを見てよめる、となむ語り傳ふる。

おきの國に流されける時に、船にのりて出立つとて、京なる人の許に遣しける　小野篁朝臣

わたの原やそしまかけてこぎ出でぬと人には告げよあまの釣舟

題しらず　よみ人しらず

○天の原—大空。○ふりさけ見る—遠く眼を放つて見るをいふ。

○わたの原—海のこと。

○人—わが家の人。

露光量違いの為重複撮影

みやこいでてけふみかの原いづみ川川かぜさむしころもかせ山

ほのぼのとあかしの浦のあさ霧に島がくれゆく舟をしぞおもふ

この歌は、ある人のいはく、柿本の人まろがなり。

あづまの方へ、友とする人、一人二人いざなひていきけり。三河國八橋といふところに到れりけるに、その川のほとりに、かきつばたいと面白く咲けりけるを見て、木の蔭におり居て、かきつばたといふいつもじを、句のかしらにすゑて、旅の心をよめるをとなむいふ。

在原業平朝臣

唐衣きつつ馴れにしつましあれば遥々きぬる旅をしぞ思ふ

武藏の國としもつふさの國との中にある、隅田川のほとりに到りて、都のいと戀しう覺えければ、しばし川のほとりにおり居て思ひやれば、限なく遠くもきにけるかなと思ひわびて、ながめをるに、渡しもり、「はや舟に乘れ、日もくれぬ」といひければ、舟に乘りて渡らむとするに、みな人物わびしくて、京に思ふ人なくしもあらず。さる折に白き鳥の、はしと足とあかき、川のほとりに遊びけり。京には見えぬ鳥なりければ、みな人見知らず。渡し守に、「これは何鳥ぞ」と問ひければ、「これなむ都鳥」といひけるを聞きてよめる

名にしおはばいざこととはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

よみ人しらず

北へゆく雁ぞ鳴くなる連れてこし數は足らでぞかへるべらなる

この歌は、ある人、男女もろともに、人の國へまかりけり。をとこ、まかり至りてすなはち、身まかりにければ、女ひとり、京へ歸りける道に、歸る雁の鳴きけるをきゝてよめるとなむいふ。

あづまの方より、京へまうでくとてよめる　　お　と

山かくすはるのかすみぞうらめしきいづれ都のさかひなるらむ

越の國へまかりける時しら山を見てよめる　　み　つ　ね

きえはつる時しなければ越路なるしら山の名は雪にぞありける

あづまへまかりける時道にてよめる　　つ　ら　ゆ　き

○けふみかのはら—今日三日といふに、甕の原をかく。甕の原は山城國相樂郡。○いづみ川—木津川の上流。○こころもかせ山—衣借せといふに、鹿脊山をかく。鹿脊山は木津川を隔てゝ甕原と對す。○あかしの浦—播磨國明石郡。

○唐衣きつゝ—馴れの序詞。衣は着馴らすもの故、人に馴染む意をかく。○つま—妻。衣の褄を寄す。

○すみだ川—武藏國の隅田川。○はし—嘴。

○名にしおはゞ—その名にもつて居る如くならば。○こととはむ—物いはう。○ありやなしや—無事にてゐるかゐぬか。

○白山の名は云々—白山といふ名のおこりは、雪からであるよ。

露光量違いの為重複撮影

絲によるものならなくにわかれ路の心ぼそくもおもほゆるかな

かひの國へまかりける時道にてよめる　みつね

夜をさむみおくはつ霜をはらひつつくさの枕にあまたたびねぬ

但馬の湯へまかりける時に、ふたみの浦といふ所にとまりて、夕さりのかれいひたうべけるに、共にありける人々、歌よみけるついでによめる　藤原兼輔

夕づく夜おぼつかなきをたま櫛笥ふたみの浦はあけてこそ見め

惟喬のみこのともに、狩にまかりける時に、天の川といふ所の川のほとりにおりゐて、酒などのみけるついでに、みこのいひけらく、狩して天の川原にいたるといふ心をよみて、杯はさせといひければよめる　在原業平朝臣

かりくらし棚機つめにやどからむあまの川原にわれは來にけり

みこ、この歌を、かへすがへすよみつつ、返しえせずなりにければ、ともに侍りてよめる　紀有常

絲によるものならなくにわかれ路の心ぼそくもおもほゆるかな

かひの國へまかりける時道にてよめる　みつね

夜をさむみおくはつ霜をはらひつつくさの枕にあまたたびねぬ

但馬の湯へまかりける時に、ふたみの浦といふ所にとまりて、夕さりのかれいひたうべけるに、共にありける人々、歌よみけるついでによめる　藤原兼輔

夕づく夜おぼつかなきをたま櫛笥ふたみの浦はあけてこそ見め

惟喬のみこのともに、狩にまかりける時に、天の川といふ所の川のほとりにおりゐて、酒などのみけるついでに、みこのいひけらく、狩して天の川原にいたるといふ心をよみて、杯はさせといひければよめる　在原業平朝臣

かりくらし棚機つめにやどからむあまの川原にわれは來にけり

みこ、この歌を、かへすがへすよみつつ、返しえせずなりにければ、ともに侍りてよめる　紀有常

○絲による云々—絲に縒るものは皆細いが、我が心はそれでもないのに。

○あまたたびねぬ—幾度も寢た。

○湯—但馬國の城崎温泉なるべし。○かれいひ—乾飯。

○玉櫛笥—化粧道具をいろ〳〵筥。○ふたみの浦—但馬か。ふたみに蓋と身とを寄す。○あけて—蓋を開けてに夜が明けてをかく。

○かりくらし—狩に日を暮して。

ひとともせにひとたび來ます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ

朱雀院の奈良におはしましける時に、手向山にてよめる　すがはらの朝臣

このたびはぬさもとりあへず手向山もみぢの錦かみのまにまに

素性法師

手向にはつづりの袖もきるべきにもみぢにあける神やかへさむ

○朱雀院—宇多上皇。○手向山—大和國奈良。

○まにまに—御心任せに

○つゞりの袖—僧服にて袈衣をいふ。

古今和歌集巻第十

物名

藤原敏行朝臣

うぐひす

心からはなのしづくにそぼちつつうくひずとのみ鳥の鳴くらむ
　ほととぎす

くべきほどときすぎぬれや待佗びてなくなる聲の人をとよむる
　うつせみ

涙のうつせみれば玉ぞみだれけるひろはば袖にはかなからむや
　かへし　　在原滋春

袂よりはなれて玉をつつまめやこれなむそれとうつせみむかし
　うめ　　壬生忠岑

あなうめに常なるべくも見えぬかな戀しかるべき香は匂ひつつ
　よみ人しらず

○物名―名詞の文字を他の意味に取なしてよみ込むをいふ。
○うくひす―憂く干す。
○ぬれや―ぬればにや。
○涙のうつせみれば―涙の打つ瀬見れば。
○はなれて―外に。○うつせみむ―移せ見む。
○あなうめに―あなは感歎の語、うめは憂目。

かにはざくら
かづけども涙のなかにはさぐられて風ふくごとに浮きしづむ玉
　つらゆき
すももものはな
今いくか春しなければうぐひすもものはながめて思ふべらなり
　ふかやぶ
からももの
あふからものはなほこそ悲しけれ別れむことをかねて思へば
　をののしげかげ
たちばな
足引の山たちはなれゆく雲のやどりさだめぬ世にこそありけれ
　をかたまの木　　とものり
み吉野の吉野の瀧にうかび出づる沫をかたまのきゆと見つらむ
　やまがきの木　　よみ人しらず
秋は來ぬ今やまがきのきりぎりすよなよな鳴かむ風のさむさに
　あふひ　かつら
かくばかりあふひの稀になる人をいかがつらしと思はざるべき

○かにはざくら―棒櫻。
○かづけ―水をもぐること。
○からもゝ―杏。
○をかたまの木―檀の類の木。或はいふ榊か。
○かつら―桂。
○あふひ―逢ふ日。

人日ゆゑ後にあふひのはるけくはわがつらきにや思ひなされむ
　くたに　　僧正遍昭
散りぬればのちはあくたになる花を思ひ知らずもまどふ蝶かな
　さうび　　つらゆき
我はけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり
　をみなへし　　とものり
しらつゆを玉にぬくとやささがにの花にも葉にも絲をみなへし
あさ露をわけそぼちつつ花見むといまぞ野山をみなへしりぬる
　朱雀院の女郎花合の時に、をみなへしといふいつもじを、句の
　かしらにおきてよめる　　つらゆき
をぐら山みねたちならしなく鹿のへにけむあきをしる人ぞなき
　きちかうのはな　　とものり
あきちかうのはなりにけりしら露のおける草葉も色かはり行く
　しをに　　よみ人しらず

○くたに―苦丹。
○あくたに―芥に。
○さうび―薔薇。
○うひに―始めて。
○さゝがに―蜘。○絲をみなへし―絲を皆綜しにて、綜は延ふる意。○みなへしりぬる―悉く經て知つた。
○みれたちならし―峰を立ち平し。
○きちかう―桔梗。
○しをに―紫苑。
○りうたむ―龍膽。
○とりうたむ―鳥打む。
○空蟬の―世の枕詞。現し身の義。
○けにごし―牽牛子。朝顔の實。
○うちつけにこし―打付けに濃し。
○めど―著。或はいふ馬道。○けづり花―造り花にて劍掛の類。
○このみ―此身に木の實をかく。
○やまし―知母。羊蹄菜か。

ふりはへていざ故里の花見むとこしをにほひぞうつろひにける
　りうたむのはな　　とものり
わが宿の花踏しだくとりうたむのはなければや此處にしもくる
　をばな　　よみ人しらず
ありと見てたのむぞかたき空蟬の世をばなしとや思ひなしてむ
　けにごし　　やたべの名實
うちつけにこしとや花の色を見むおくしら露の染むるばかりを
二條の后の、春宮のみやすむ所と申しける時に、めどにけづり花させりけるを、よませたまひける　　文屋康秀
花の木にあらざらめども咲にけりふりにしこのみなる時もがな
　しのぶぐさ　　きの利貞
やま高みつねにあらしのふくさとは匂ひもあへず花ぞちりける
　やまし　　平あつゆき
時鳥みねのくもにやまじりにしありとは聞けど見るよしもなき

○からはぎ—幹萩。
○うつ蟬—蟬のぬけ殻。
○かはなぐさ—河苔。
○さがりごけ—女蘿。
○にがたけ—苦茸。
○わびしらに—難儀さうに。
○かはたけ—皮茸、今のこう茸。
○たけゆく—闌けてゆく
○ばせをば—芭蕉葉。
○いさゝめに—かりそめに。○心ばせ—心いき。

からはぎ

うつ蟬のからはきごとにとどむれど魂の行くへを見ぬぞ悲しき

よみ人しらず

かはなぐさ

うばたまの夢になにかはなぐさまむうつつにだにも飽かぬ心を

ふかやぶ

さがりごけ

花の色はただ一さかりこけれどもかへすがへすぞ露は染めける

にがたけ

命とて露をたのむにかたければものわびしらに鳴く野べのむし

しげはる

かはたけ

さよふけてなかばたけ行くひさ方の月ふきかへせあきのやま風

景式王

わらび

煙立ちもゆとも見えぬ草の葉をたれかわらびと名づけそめけむ

眞せい法師

ささまつ

いさゝめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをばひとに見えつつ

ばせをば

きのめのと

○歎きなつめそ—嘆き詰むる勿れ。○あひくるみ—遭ひ來る身。
○からこと—備前國韓琴の浦。
○けさからことに—今朝より殊に。
○いかがさき—近江の打出濱より、勢田、田上附近。
○からさき—近江國滋賀辛崎。
○みづの春云々—水の爲には、風が春になりて、かく花を咲かすであらう。
○かみやがは—山城國の北野。
○よどがは—山城の淀川

なしなつめくるみ

兵衛

あちぎなし歎きなつめそうき事にあひくるみをば捨てぬ物から

からことといふ所にて、春の立ちける日よめる

安倍清行朝臣

涙のおとけさからことにきこゆるはるのしらべや改まるらむ

いかがさき

兼覽王

かぢにあたる涙の雫を春なればいかがさき散るはなと見ざらむ

からさき

あほのつねみ

かのかたにいつからさきに渡りけむ涙路はあとも殘らざりけり

伊勢

波のはなおきからさきて散りくめりみづの春とは風やなるらむ

かみやがは

つらゆき

うば玉のわが黒かみやかはるらむかがみのかげにふれるしら雪

よどがは

あしひきの山べにをれば雲のいかにせよとかはるる時なき　かたの

なつ草のうへはしげれる沼水の行くかたのなきわがこころかな　かつらのみや　ただみね

あきくれど月のかつらのみやはなる光をはなと散らすばかりを　百和香　源ほどこす

花毎にあかず散らしし風なればいくそばくわがうしとかは思ふ　すみながし　よみ人しらず

春がすみなかしかよひ路なかりせば秋くる雁はかへらざらまし　おき火　しげはる

ながれいづるかただに見えぬ涙川おきひむときや底はしられむ　ちまき　都良香

のちまきの後れて生る苗なれどあだにはならぬたのみとぞ聞く　大江千里

はを始、るを果にて、ながめをかけて、時の歌よめと、人のい

○かたの―河内國交野郡の交野。

○かつらのみや―京都五條西洞院にありき。○みやはなる―實やは結ぶ。

○百和香―香の名。

○いくそばくわがうし―幾何我が憂し。○すみながし―墨流し、墨汁を水の上に流して亂れたる狀を紙に寫し取りたるもの。○ながし―中し。しは强辭。

○おき火―おこり火。○おきひむ―沖干む。

○のちまき―後蒔。○たのみ―田の實に賴みをかく。田の實は實れる稻。

ひければよめる　僧正聖寶

はなのなかめにあくやとて分け行けば心ぞ共に散りぬべらなる。

○はなのなか―花の咲ける中。

古今和歌集巻第十一

戀歌一

題しらず

よみ人しらず

○ほととぎすなくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ戀もするかな

素性法師

○音にのみきくの白露よるはおきて晝はおもひにあへずけぬべし

紀貫之

○よし野がはいは波たかく行く水のはやくぞ人をおもひそめてし

藤原勝臣

○しら浪のあとなきかたに行く舟も風ぞたよりのしるべなりける

在原元方

○おとは山おとに聞きつつあふさかの關のこなたに年をふるかな

○あやめ草―以上は序。○あやめもしらぬ―筋目もたいぬ。

○音にのみきく―噂にのみ聞くに菊をかく。○おきて―置きてに起きてをかく○あへず―堪へず。

○行く水い―行く水の如く。以上は序。

○風ぞたよりの云々―風が便りの手引であつた。

○おとは山云々―噂にのみ聞きて、逢はぬことを喩へたり。

○人に心を―思ふ人に心をかけ置くに沖をかく。

○吹く風の―吹く風の如く。

○右近のうまばのひ―右近の馬場に騎射のある日。○なりの日むかひ―鑑の日向ひ。○下すだれ―牛車の簾の内より下まで垂るゝ布帛。

○春日のまつり―大和國の春日神社の祭。二月、十二月の二回あり。

○草のはつかに―草の如く僅に。

世の中はかくこそありけれ吹く風の目に見ぬ人も戀しかりけり

伊勢物語 右近のうまばのひ、左

より、女の顔のほいかに見えければ、よみて遣しける

在原業平朝臣

たちかへりあはれとぞ思ふよそにても人にこころをおきつ白波

つらゆき

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくばあやなくけふや詠め暮さむ

よみ人しらず

かへし

しるしらぬ何かあやなくわきていはむ思のみこそ知方なりけれ

春日の祭にまかりける時に、物見にいでたりける女のもとに、

壬生忠岑

家を尋ねて遣しける

かすが野の雪間をわけておひ出くる草のはつかに見えし君はも

人の花摘しける處にまかりて、そこなりける人の許に、後によみて遣しける

つらゆき

やま櫻かすみの間よりほのかにも見てし人こそこひしかりけれ

題しらず

たよりにもあらぬおもひのあやしきは心を人につくるなりけり

凡河内躬恒

逢ふことは雲居はるかになる神の音にききつつ戀ひわたるかな

よみ人しらず

片絲をこなたかなたによりかけてあはずばなにを玉の緒にせむ

ゆふぐれは雲のはたてに物ぞおもふあまつ空なる人を戀ふとて

かりごもの思ひみだれてわが戀ふと妹しるらめや人し告げずば

つれもなき人をやねたく白つゆのおくとは歎きぬとはしのばむ

ちはやぶるかもの社のゆふだすきひと日も君をかけぬ日はなし

わが戀はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行くかたもなし

駿河なる田子のうら波立たぬ日はあれども君を戀ひぬ日はなし

夕づく夜さすやをかべの松の葉のいつともわかぬ戀もするかな

あしひきのやました水の木がくれてたぎつ心をせきぞかねつる

よし野川いはきりとほし行く水のおとには立てじ戀はしぬとも

たきつ瀬のなかにも淀はありてふをなどわが戀の淵瀬ともなき

やま高みしたゆく水のしたにのみ流れて戀ひむこひはしぬとも

思ひいづるときはの山の岩躑躅いはねばこそあれ戀しきものを

ひとしれずおもへば苦しくれなゐの末つむ花のいろに出でなむ

秋の野の尾花にまじり咲く花のいろにや戀ひむ逢ふよしをなみ

わがそののうめのほつえに鶯のねに鳴きぬべきこひもするかな

○はるかになる神の―遙になるに鳴神をかく―雷の如く。

○片絲―より合はせぬ絲　○玉の緒―玉を貫く緒。人の命を喩ふ。

○雲のはたて―雲の旗手にて、雲の旗の靡ける如く亂れたるをいふ。

○かりごもの―亂れての枕詞。

○つれもなき―無情なる　○ねたく―悔しく。○ぬ―寢る。○白露の―おくの序詞。

○かもの社―山城國賀茂神社。○ゆふだすき―木綿の襷。神官が常にかくるものなればいふ。○かけぬ―心にかけぬ。

○松の葉の―松の葉のいつも變らぬ如く。

○山した水の―山下水の如く。○たぎつ心―湧き返る心。

○いはきりとほし―岩をも切り通して行く。○行く水の―行水の如く。

○淀―水の淀みて淵となる所。○淵瀬ともなき―淵も瀬もなく、常に心苦しき意。

○下ゆく水の―下行水の如く。○流れて―命の存在(ガレ)をかく。

○ときは―時はに常磐をかく。

○末つむ花の―末摘花の如く。末摘花は紅の花。

○逢ふよしをなみ―逢ふ手段もなさに。

○咲く花の―以上は序。

○ほつえ―秀(ホ)つ枝(エ)の義。上枝。○ねに鳴きぬべき―音に立てゝ啼かれさうな。

足引のやまほととぎすわがごとや君に戀ひつついねがてにする
夏なればやどにふすぶる蚊遣火のいつまでわが身下もえにせむ
こひせじと御手洗川にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも
あはれてふことだになくば何をかは戀のみだれの束ね緒にせむ
思ふには忍ぶることぞまけにける色には出でじと思ひしものを
わが戀はひと知るらめやしきたへの枕のみこそ知らば知るらめ
あさぢふの小野の篠原しのぶとも人知るらめやいふひとなしに
人しれぬおもひもやなぞと薦垣のまぢかけれども逢ふ由のなき
思ふとも戀ふとも逢はむものなれやゆふ手もたゆく解くる下紐
いでわれを人なとがめそ大船のゆたのたゆたに物おもふころぞ
伊勢の海につりするあまのうけなれや心ひとつを定めかねつる

○わがごと—わが君を戀ふるが如く。
○蚊遣火の—蚊遣火の如く。
○御手洗川—いづれの神社にもいへど、これは賀茂のなり。○みそぎ—水を以て身を洗ひ清める事。
○束ね緒—物を把ぬる苧
○しきたへの—下に布きて寢る布。枕の枕詞。
○淺ぢふの—淺茅生の略。茅花のまばらに生ひたる所。野の枕詞。○小野の篠原—小野の小は美稱、小さき野といふ義にも地名にもあらず。以上は序。
○なぞと—何事ぞと。○あし垣の—ま近の枕詞。○ゆふ手もたゆく—結ぶ手もだるく。
○ゆたのたゆたに—浪に搖れてゆた〳〵とする如く。
○うけ—うき。

伊勢の海のあまの釣繩うちはへてくるしとのみや思ひわたらむ
なみだ川なにみなかみを尋ねけむもの思ふ時のわが身なりけり
種しあれば岩にも松は生ひにけり戀をし戀ひば逢はざらめやは
朝な朝な立つ河ぎりの空にのみうきておもひのある世なりけり
忘らるる時しなければあしたづの思ひみだれて音をのみぞなく
唐ごろもひもゆふぐれになる時はかへすがへすぞ人はこひしき
よひよひに枕さだめむかたもなしいかに寢し夜か夢に見えけむ
こひしきに命をかふる物ならばしにはやすくぞあるべかりける
人の身もならはしものをあはずしていざ試みむ戀ひや死ぬると
しのぶれば苦しきものを人知れず思ふてふことたれにかたらむ
こむ世にもはやなりなむ目のまへにつれなき人を昔と思はむ

○釣繩—釣繩の如く。○うちはへて—打延へて繰るに、苦しをかく。
○なみだ川—伊勢國にあり。
○河霧の—河霧の如く。
○うきて—落ち着かずして。
○あしたづの—芦鶴の如く。
○ひもゆふぐれ—紐結ふに、日も夕暮をかく。
○しには—死ぬるのは。
○ならはし物—慣しがらの物。
○こむ世—未來の世。

つれもなき人を戀ふとて山彦のこたへするまでなげきつるかな

行く水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり

人を思ふ心はわれにあらねばや身のまどふだに知られざるらむ

思ひやるさかひはるかになりやするまどふ夢路に逢ふ人のなき

夢のうちに逢ひ見むことを頼みつつ暮せる宵はねむかたもなし

こひ死ねとする業ならしうば玉のよるはすがらに夢に見えつつ

涙がは枕ながるるうきねにはゆめもさだかに見えずぞありける

戀すればわが身は影となりにけりさりとて人に添はぬものゆゑ

篝火にあらぬわが身のなぞもかく涙のかはにうきて燃ゆらむ

かがり火の影となる身の佗しきはながれて下にもゆるなりけり

はやき瀬にみるめ生ひせばわがそでの涙の川に植ゑましものを

○山彦のこたへするまで―こだまの響くまで大きな聲。
○かずかく―數をしるす
○思ひやる云々―思ひやりの場所が、遙か遠くなつたのが。
○暮せる宵は云々―晝のうちより賴みにして暮したる夜は、却て寢られぬ。
○よるはすがら―夜は夜通し。
○うきね―浮寢にて、浮きに憂きをかく。
○影となり―細く痩するをいふ。
○ながれて―流れてに長らへてをかく。
○みるめ―海松布。見る目をかく。

おきへにも寄らぬ玉藻の浪のうへに亂れてのみやこひ渡りなむ

芦鴨のさわぐいり江のしら浪のしらずやひとをかく戀ひむとは

人知れぬ思をつねにする河なる富士のやまこそわが身なりけれ

とぶ鳥のこゑもきこえぬおく山のふかきこころを人は知らなむ

あふさかのゆふつけ鳥もわがごとく人や戀しき音のみ鳴くらむ

あふさかのせきにながるるいはし水いはで心におもひこそすれ

うき草のうへはしげれる淵なれやふかきこころを知る人のなき

うちわびてよばはむ聲に山彦のこたへぬ山はあらじとぞおもふ

心がへするものにもがかた戀はくるしきものとひとにしらせむ

よそにして戀ふればくるしいれ紐のおなじ心にいざむすびてむ

はるたてばきゆる氷ののこりなく君がこころはわれにとけなむ

○おきへにも―海の沖にも岸邊にも。○玉藻の―玉藻の如く。
○しら浪の―しらずの序。
○富士の山こそ―富士山の火の餘所に見えずして下にのみ燃ゆるをわが身に譬へたり。
○おく山の―奥山の如く。
○ゆふつけ鳥―木綿付鳥鶏。
○いはし水―以上は序。
○心がへ云々―互に人の心が取換へらるゝものでありたい。もがは願の辭。
○いれ紐の―いれ紐は古製の服の領は雄紐雌紐ありて、取り合せて輪にさし入れて掛く。
○氷の―氷の如く。

あけたてば蟬のをりはへ鳴きくらしよるは螢の燃えこそわたれ

夏蟲の身をいたづらになすことも一つおもひによりてなりけり

夕されば いとどひがたきわが袖にあきの露さへおきそはりつつ

いつとても戀しからずはあらねども秋の夕べはあやしかりけり

あきの田のほにこそ人を戀ひざらめなどか心にわすれしもせむ

あきの田の穗のへを照らす稻妻のひかりのまにもわれや忘るる

人めもるわれかはあやな花薄などかほに出て戀ひずしもあらむ

あわ雪のたまればがてに碎けつつわが物おもひのしげき頃かな

おくやまの菅の根しのぎふる雪のけぬとかいはむ戀のしげきに

○あけたてば—夜が明くれば、○をりはへ—時延へ。○蟬の、螢の—いづれもの如くの意。○夏蟲—火取蟲。○一つおもひ—同じ戀の思の火

○あやし—常に異ること卽ち秋の夕べが格別に戀しきなり。

○秋の田の—穗の序詞。○ほに—穗に。表面に顯れて。

○人めもる—人目を憚る○あやな—分別ない。○花薄—ほに出ての序。

○たまればがてに—溜りがねて。

○しのぎ—押し付けて。

古今和歌集巻第十二

戀歌 二

題しらず　小野小町

思ひつつぬればや人の見えつらむ夢と知りせば覺めざらましを

うたた寢にこひしき人を見てしより夢てふものは賴みそめてき

いとせめて戀しきときはうば玉のよるの衣をかへしてぞきる

素性法師

あき風の身に寒ければつれもなき人をぞたのむ暮るる夜ごとに

しもついづも寺に、人のわざしける日、しんせい法師の、導師にていへりける詞を歌によみて、小野小町が許に遣しける

安倍清行朝臣

つつめども袖にたまらぬしら玉は人を見ぬめのなみだなりけり

○人—戀人。

○いとせめて—甚しくさし迫つて。○うば玉の—よるの枕詞。

○しもついづも寺—下出雲寺。山城國愛宕郡。○わざ—追善の法事。○いへりける詞—法華經の五百弟子授記品の「以二無價寶珠一繫二其衣裏一與レ之而去」を說法せしなり。

かへし　　小　町

おろかなる涙ぞ袖に玉はなすわれはせきあへずたぎつ瀬なれば

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　藤原敏行朝臣

戀わびてうちぬるなかに行き通ふ夢のただぢはうつつならなむ

すみの江の岸による波よるさへやゆめのかよひ路人めよくらむ

小野良材

わが戀はみやまがくれの草なれやしげさまされど知る人のなき

紀友則

よひのまもはかなく見ゆる夏蟲にまどひまされる戀もするかな

ゆふされば螢よりけにもゆれどもひかり見ねばや人のつれなき

ささの葉におく霜よりもひとりぬるわが衣手ぞさえまさりける

わが宿の菊のかきねにおく霜のきえかへりてぞこひしかりける

川の瀬になびくたま藻のみがくれて人に知られぬ戀もするかな

○よひのまも云々―宵の間の命の知れぬ程、はかなく見ゆる夏蟲よりも。
○けに―格別に。
○おく霜―以上は序。
○いへり―その事のいたりて甚しきをいふ時に、添へて用ふ。
○みがくれて―水に隠れてある如く。以上は序。

かきくらしふる白雪のしるからに消えにきえて物思ふ頃にもあるかな

壬生忠岑

きみ戀ふる涙の床にみちぬればみをつぐしとぞわれはなりける

しぬる命いきもやすると試にたまの緒ばかり逢はむといはなむ

藤原興風

わびぬればしひて忘れむと思へども夢といふものぞ人頼めなる

わりなくも寢てもさめても戀しきか心をいづちやらばわすれむ

戀しきに佗びてたましひ惑ひなば空しきからの名にやのこらむ

君こふるなみだしなくばからごろも胸のあたりは色もえなまし

紀貫之

題しらず

世とともに流れてぞ行くなみだ川冬もこほらぬみなわなりけり

夢路にも露やおくらむよもすがらかよへる袖のひぢてかわかぬ

○夢路―夢に通ふ路。
○色もえなまし―燃えて火の色にならう。
○わりなくも―理なくも無闇に。○戀しきか―戀しきかな。
○空しきから―亡體。
○ひぢてかわかぬ―以上は序。

はかなくて夢にも人を見つる夜はあしたの床ぞ起きうかりける　そせい法師

いつはりのなみだなりせばから衣しのびに袖はしぼらざらまし　藤原忠房

ねに泣きてひぢにしかども春雨にぬれにし袖と問はばこたへむ　大江千里

わがごとくものやかなしき時鳥ときぞともなく夜ただ鳴くらむ　敏行朝臣

さつきやまこずゑをたかみ時鳥なく音そらなるこひもするかな　凡河内躬恒

あき霧のはるる時なきこころにはたち居の空もおもほえなくに　深養父

蟲のごとこゑに立ててはなかねども涙のみこそしたになかるれ　文屋康秀

是貞のみこの家の歌合の歌

よみ人しらず

○しのびに―窃に。

○ねに泣きて―聲に立てて泣いて。

○ときぞともなく―時の定めなく。○夜たゞ―夜通し。

○さつき山―五月頃の山

○なく音空なる―啼く聲を取止めなく立つる如く。以上は序。

○秋霧の―はるゝの序詞。

○はるゝ時なき心―氣に晴間のない心。○たち居の空―起居するあてど。

○したに―内々に。

秋なれば山とよむまで鳴く鹿にわれおとらめやひとりぬる夜は　貫之

題しらず

秋の野にみだれて咲ける花のいろのちぐさに物をおもふ頃かな　みつね

ひとりして物をおもへば秋の田のいな葉のそよといふ人のなき　ふかやぶ

人を思ふこころは雁にあらねども雲居にのみもなきわたるかな　ただみね

あき風にかきなす琴のこゑにさへはかなく人のこひしかるらむ　つらゆき

まこも刈る淀のさはみづ雨ふればつねよりことにまさるわが戀

大和に侍りける人に遣しける

越えぬまは吉野の山のさくらばな人づてにのみ聞きわたるかな

彌生ばかりに、物のたうびける人の許に、又人まかりて、せう

○越えぬまは―山を越えて行かぬうちは。

○物のたうび―物宣ひ。

○淀―山城國の名所。○さは水―澤水の如く。

○かきなす―掻鳴らす。

○いな葉のそよと―序詞なり。稻葉の風にそよそよとなる音を、それよにかく。

○花のいろの―以上は序。

○ちぐさに―千種の如くに、いろいろに。

○雁とよむまで―山に響き渡るまで。

そこすと聞きていよみて遣しける

露ならぬこころを花におきそめて風ふくごとに物おもひぞつく

坂上これのり

題しらず

わが戀にくらぶのやまの櫻ばなまなくちるともかずはまさらじ

宗岳大頼

ふゆ川のうへは氷れるわれなれやしたにながれてこひ渡るらむ

たゞみね

たぎつ瀬に根ざしとどめぬ浮草のうきたる戀もわれはするかな

とものり

よひよひにぬぎてわがぬる狩衣かけておもはぬときのまもなし

あづま路のさやの中山なかなかになにしかひとを思ひそめけむ

敷たへの枕のしたに海はあれど人をみるめは生ひずぞありける

年をへて消えぬおもひはありながらよるの袂はなほこほりけり

○人まかりて―人の參りて。○せうそこ―消息。たより。○物おもひぞつく―心配になる。

○まなく―ひまなく。

○氷れる―氷れる如き。○ながれて―一本こがれてとあり。○根ざしとどめぬ―根もとの底に著かぬ。○浮草の―以上は序。○よひ〳〵―夜々。○狩衣―以上は序。○かけて―狩衣を衣桁にかくる事と、心にかくる事とをかぬ。○あづま路―逢坂の關より東の行路。○さやの中山―遠江國佐野郡。後世小夜の中山といふ。以上は序。○敷たへの―枕の枕詞。○おもひ―思のひに、火をかく。

わが戀は知らぬやま路にあらなくにまどふ心ぞわびしかりける

くれなゐのふり出でて泣くなみだには袂のみこそ色まさりけれ

白玉と見えしなみだも年ふればからくれなゐにうつろひにけり

つらゆき

夏むしをなにかいひけむ心からわれもおもひに燃えぬべらなり

みつね

かぜふけば峰にわかるるしら雲のたえてつれなき君がこころか

ただみね

月かげにわが身をかふる物ならばつれなき人もあはれとや見む

ふかやぶ

戀ひ死なばたが名は立たじ世の中の常なき物といひはなすとも

つらゆき

津の國の難波のあしのめもはるにしげきわが戀ひと知るらめや

○くれなゐのふり出での序詞。

○なにかいひけむ―愚なるものと何故にいつたらう。

○しら雲の―白雲の如く。以上は序。

○あはれ―可怜。

○たが名は立たじ―誰の名も立つまい。卽ちの君名が立たう。○津の國―攝津の國の古名。○あしの―以上は序。○めもはるに―見渡しの遙に。蘆の芽も發るとかいふ。

手もふれで月日へにけるしら眞弓おきふし夜はいこそ寐られぬ

人しれぬ思のみこそわびしけれわがなげきをばわれのみぞ知る

友則

ことに出でていはねばかりぞみなせ川下に通ひて戀しきものを

みつね

きみをのみおもひ寐にねし夢なればわが心から見つるなりけり

ただみね

命にもまさりてをしくあるものは見はてぬ夢のさむるなりけり

春道列樹

あづさ弓ひけばもとするゑわが方によるこそまされ戀のこころほ

みつね

わが戀はゆくへも知らずはてもなし逢ふを限と思ふばかりぞ

われのみぞかなしかりける彦星もあはてすぐせる年しなければ

○白眞弓―檀にて製れる弓。おきふしの序詞。○いこそ―いは寢なり、宿なり。

○ことに出でて―詞に出して。○みなせ川―水無瀬川。うへに水のなき川。

○もとする―弓の本弭、末弭の方。○わが方に―以上は序。○よるこそ―寄るに夜をかく。

今ははや戀ひ死なましをあひ見むとたのめしことぞ命なりける

ふかやぶ

たのめつつあはで年ふるいつはりにこりぬ心をひとは知らなむ

みつね

命やはなにそは露のあだものを逢ふにしかへばをしからなくに

ともの り

○頼めしこと―頼みに思はせし一言。

○なにそは云々―何それは露のやうなはかないあだな物であるものを。○逢ふにしかへば―思ふ人に逢ふのに換ふるならば。

古今和歌集巻第十三

戀歌三

彌生のついたちより、しのびに、人に物をいひてのちに、雨のそぼふりけるに、よみて遣しける　在原業平朝臣

おきもせずねもせでよるをあかしては春の物とてながめ暮しつ

業平朝臣の家に侍りける女の許に、よみて遣しける

つれづれのながめにまさる涙がは袖のみぬれて逢ふよしもなし

敏行朝臣

かの女に代りて、返しによめる　業平朝臣

あさみこそ袖はひづらめ涙がは身さへながると聞かばたのまむ

題しらず　よみ人しらず

よるべなみ身をこそとほくへだてつれ心は君がかげとなりにき

○春の物とて―春は降り勝なればいへり。○ながめ―長雨に詠めをかく。

○涙がは―涙を川に喩ふ

○あさみこそ―淺い所こそ徒渡するに、袖は濡るゝであらう。

○よるべなみ―近寄るすべなさに。○影となりにき―影となつた。そばを離れぬをいふ。

いたづらにゆきては來ぬる物ゆゑに見まくほしさに誘はれつつ

あはぬ夜のふる白雪とつもりなば我さへともにけぬべきものを

この歌は、或人のいはく、柿本人丸が歌なり。

あきの野に笹わけし朝の袖よりも逢はでこし夜ぞひぢ増りける

業平朝臣

みるめなき我身を浦と知らねばやかれなで海士の足たゆくくる

小野小町

あはずしてこよひ明けなば春の日の長くや人をつらしと思はむ

源宗于朝臣

あり明のつれなく見えし別よりあかつきばかりうきものはなし

壬生忠岑

あふ事のなぎさにしよる波なればうらみてのみぞ立かへりける

在原元方

よみ人しらず

○いたづらに云々―逢ふことも出來ず、むだに往きつ返りつするのであるのに。

○白雪と―白雪の如く。

○みるめなき―逢ひ見ることのなきに、海松布なきをかく。○わが身を浦と―浦とわが身をを打返したり。○かれなで―變る事なく。○足たゆく―足のだるいほど。

○春の日―長くの序詞。

○あり明のつれなく―在明の月は夜の明くるをも知らず顏にあるものなれば、つれなきの序とせり。

○さゝき―清に無きをかく。○うらみて―浦見てに怨みてをかく。

かねてより風にさきだつ波なれやあふ事なぎにまだき立つらむ

ただみね

みちのくにありといふなる名取川なき名取りては苦しかりけり

御春有輔

あやなくてまだきなき名のたつ田川渡らでやまむ物ならなくに

もとかた

人はいさ我はなき名のをしければ昔もいまも知らずとをいはむ

よみ人知らず

こりずまに又もなき名は立ちぬべし人憎からぬ世にしすまへば

ひんがしの五條わたりに、人をしりおきてまかり通ひけり。忍びなる所なりければ、門よりしもえ入らで、壖のくづれより通ひけるを、度重なりければ、あるじ聞きつけて、かの道に夜毎に人をふせて守らすれば、いきけれどえあはでのみ歸りて、よみてやりける

業平朝臣

○なぎ―なしに、和名かく。

○名取川―陸前國名取郡。以上は序。○なき名取りては―無きことを有るやうにいひ立てられては。○あやなくて―譯もなくて。○たつ田川―名の立つをかく。○渡らで―戀をとげずして。

○人はいさ―人はどうか知らず。○とを―をは嘆辭。

○こりずまに―懲りもせずに。

○ひんがしの五條―東の京の五條通。○人をしりおきて―相思の中となれること。○忍びなる所―内證の所。

○人しれぬ―人に知られぬ。

○月の―月の如くの意。○いでてこそくれ―こられて、月の出てくるやうに、思ふ人の所にさして出てくる。○あふ坂の―今宵ぞ逢ふに、相坂をかく。○木綿付鳥―鶏のこと。○秋の夜も云々―長いものといふ秋の夜も、名ばかりであつた。○事ぞともなく―これぞといふ事もなく。○思ひぞはてぬ―思ひ倦められぬ。○あふ人がらの云々―逢ふ先の人によつて、長くも短くも覺ゆる秋の夜なれば。○ほがら―朗か。○おのがきぬ〳〵―銘々の衣きる後朝。○今はの心―もう別れればならぬと思ふ心。

人しれぬわがかよひ路の關守はよひよひごとにうちも寢ななむ

題しらず

しのぶれど戀しき時はあしひきのやまより月のいでてこそくれ

よみ人しらず

戀ひ戀ひてまれに今宵ぞあふ阪の木綿付鳥は鳴かずもあらなむ

小野小町

秋夜も名のみなりけり逢ふといへば事ぞともなく明けぬる物を

凡河内躬恒

ながしとも思ひぞはてぬむかしよりあふ人がらの秋の夜なれば

よみ人しらず

東雲のほがらほがらとあけ行けばおのがきぬぎぬなるぞ悲しき

藤原國經朝臣

あけぬとて今はの心つくからになどいひしらぬおもひそふらむ

寛平の時きさいの宮の歌合の歌

敏行朝臣

○こきたれて—すごき落して。
○朝露の—おきての序。起きをかく。
○立ちぬべき—立ちさうなる故。
○けさはしも—しもに霜をかく。
○いやはかなにも—いよいよはかなくも。
○みそかに—ひそかに。
○齋宮—又いつき。伊勢の神宮に奉仕する内親王。

あけぬとてかへるみちにはこきたれて雨も涙もふりそぼちつつ
　題しらず　寵
しののめの別ををしみわれぞまづ鳥よりさきになきはじめける
　よみ人しらず
ほととぎすゆめかうつつか朝露のおきてわかれしあかつきの聲
玉くしげあけば君が名立ちぬべみ夜ぶかくこしを人見けむかも
　大江千里
けさはしも起きけむ方も知らざりつ思ひ出づるぞ消えて悲しき
　人におひてあしたに、よみて遣しける　業平朝臣
ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなり增る哉
　業平朝臣の、いせの國にまかりたりける時、齋宮なりける人に
　いとみそかに逢ひて、又のあしたに人やるすべなくて、思ひを
　りけるおひだに、女の許よりおこせたりける
　よみ人しらず

○うつつ—現。
○世人—世間の人。
○闇のうつゝ—闇の紛れに密に逢うた現のこと。
○いくらも—何程も。
○あまのと—天の門。空のこと。
○月影に—月影の如くに。
○みつ—難波の御津に見づをかく。
○埋木—埋木の世に出づる如く。以上は序。
○水の心—水の如き心。
○はやくとも—心は逸るとも。
○したにを—心の内で。
○花すゝき、下ゆふ紐の下いづれも序詞。

君や來しわれや行きけむ思ほえず夢かうつつか寢てかさめてか
　かへし　業平朝臣
かきくらす心のやみにまどひにきゆめうつつとは世人さだめよ
　題しらず
ぬば玉の闇のうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり
　よみ人しらず
さよふけてあまのと渡るつき影にあかずも君をあひ見つるかな
君が名も我名も立てじ難波なるみつともいふな逢きともいはじ
名とり川瀬々の埋木あらはればいかにせむとか逢ひ見そめけむ
よしのがは水の心ははやくとも瀧のおとには立てじとぞおもふ
戀しくばしたにを思へむらさきの根摺のころも色に出づなゆめ
　橘清樹が、しのびにあひしれりける女の許よりおこせたりける
花すすきほに出てこひば名を惜しみ下ゆふ紐のむすぼほれつつ
　小野春風

○ひとりひとり—どちらか一人。○藤ごろも—喪服をいふ。

○よるこそは著め—人の見ぬ夜ばかり著よう。

○人目をもる—人目を憚る。もるは守の義。

○こむ—行かんの意。

○ごとは—如くは。

○人目つつみ—人目を慎むに堤をかく。○かは—彼はに川をかく。

○はやき—瀬の早きに逃る意をかく。

○くれなゐの—隠れ沼のいづれも序詞。隠れ沼は草などの上に蔽れる沼。

思ふどちひとりひとりがこひ死なば誰によそへて藤ごろもきむ
かへし　橘清樹

なきこふる涙に袖のそぼちなばぬぎかへがてらよるこそは著め
題しらず　こまち

うつつにはさもこそあらめ夢にさへ人目をもると見るが侘しさ
よみ人しらず

かぎりなき思のままによるもこむゆめ路をさへに人はとがめじ

夢路には足もやすめず通へどもうつつに一目見しごとはあらず
よみ人しらず

思へども人目づつみの高ければかはと見ながらえこそわたらね

たぎつ瀬のはやき心をなにしかも人目づつみのせきとどむらむ
寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　紀友則

くれなゐの色にはいでじ隠れ沼のしたに通ひて戀ひはしぬとも
みつね

○にほ鳥—鵜。俗にムグリといふ。○つれもなく—平氣な顔して。

○しみはつく—氷りつくに染みつくをかく。

○山科—山城國宇治郡。初二句は序。○かも—やもと同じ。

○ひろま—干るに晝間をかく。○みるめ—海松布に見る目をかく。○浦による—寄るに夜をかく。

○白川—山城國愛宕郡。○ながれて—流れてに長らへてをかく。○すまむ—澄まむに住まむをかく

○たえて亂れむ—玉の緒の絶ゆれば、玉の亂るいを喰ふ。さてたえては思ひ切つての意。

○しのびかれてば—堪へられなくならば。○山たちばな—藪柑子。

○湊漕ぎ出なむ—舟を湊より沖に漕ぎ出すやうに我名も世間に打出さん。

○うみべた—海邊。世を倦むをかく。

ふゆの池に住むにほ鳥のつれもなくそこに通ふと人に知らすな

ささの葉におく初霜の夜をさむみしみはつくとも色に出てめや
よみ人しらず

山科（やましな）のおと羽のやまのおとにだに人のしるべくわが戀ひめかも
この歌、ある人、近江のうねべのとなん申す。
清原深養父

みつ汐の流れひるまを逢ひがたみみるめの浦によるをこそ待て
平貞文

白川のしらずともいはじ底清みながれて世々にすまむと思へば
とものり

したにのみ戀ふればくるし玉の緒のたえて亂れむ人なとがめそ

わが戀をしのびかねてばあし引の山たちばなのいろに出ぬべし
よみ人しらず

おほ方はわが名も湊漕ぎ出なむ世をうみべたにみるめすくなし

○まくらより―枕より外に。
○れにあらはれて―根に音をかけ、洗はれてに現れてをかく。
○名ををし鳥―名を惜むに鴛鴦をかく。
○玉の緒ばかり―わづかのほど。
○むら鳥の―立つの序詞。
○ことなしぶ―事なし振るにて知らぬ風をする。
○はゝがすみ―春霞の立如く。
○塵ならぬ名云々―塵でもなき浮名が、何故廣く世に立つことであらう。

まくらよりまた知る人もなき戀を涙せきあへずもらしつるかな　平貞文

風ふけばなみうつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり　よみ人しらず

この歌は、ある人のいはく、柿本の人まろがなり。

池にすむ名ををし鳥の水をあさみ隱るとすれどあらはれにけり

逢ふことは玉の緒ばかり名の立つは吉野の川のたぎつ瀬のごと

むら鳥の立ちにしわが名いま更に事なしぶともしるしあらめや

君によりわが名は花にはるがすみ野にも山にも立ちみちにけり　伊勢

しるといへば枕だにせで寢しものを塵ならぬ名の空に立つらむ

○あさかの沼―岩代國安積郡。○花かつみ―菰をいふか。以上は序。○かつみる人―一寸逢ふ人。
○ふるの中道―布留の中にある道。布留は大和の石上にある地。以上は序。○なかなかに―却て。
○見まれ見すまれ―見るにもあれ見ざるにもあれの約。○ふじの根の云々―當時富士山に煙たちたる故にいふ。
○見ゆとは見えじ―思ふ人に逢ふとは見えはすまい。

戀歌四

題しらず　よみ人しらず

みちのくのあさかの沼の花かつみかつみる人に戀ひやわたらむ

逢ひ見ずば戀しきことももなからまし音にぞ人を聞くべかりける　つらゆき

いそのかみふるの中道なかなかに見ずば戀しとおもはましやは　藤原忠行

君といへば見まれ見ずまれふじの根の珍しげなくもゆるわが戀　伊勢

夢にだも見ゆとは見えじ朝な朝なわがおも影にはづる身なれば　よみ人しらず

○石間―イシマ、イハマ二説あり。○水のしら波以上は序。○かくこそは見め―かく立返りて逢ひ見よう。○かづく―水中に入りてとる。○みるめ―海松布に見る目をかく。○さくら花―櫻花の如く

○わりなき―道理なき。○見るものから―逢ひて居ながら。○かれはてむ―枯るゝに人の離るゝを寄す。○夏草の―深くの序詞。

○さむしろ―狹筵。○片敷―獨寢をすれば、衣の一方の敷かるゝをいふ。○宇治―山城國宇治郡。○はし姫―橋を守る神。愛愛をよす。

石間ゆく水のしら波立ちかへりかくこそは見めあかずもある哉

伊勢の蜑の朝な夕なにかづくてふみるめに人を飽くよしもがな

春がすみたなびく山のさくら花見れどもあかぬ君にもあるかな

友則

心をぞわりなきものとおもひぬる見るものからや戀しかるべき

ふかやぶ

かれはてむのちをば知らで夏草のふかくも人のおもほゆるかな

凡河内躬恒

あすか川ふちは瀨になる世なりとも思ひそめてむひとは忘れじ

よみ人しらず

寛平の御時后宮の歌合の歌

おもふてふ言の葉のみや秋をへて色もかはらぬ物にはあるらむ

題しらず

さむしろにころも片敷きこよひもや我をまつらむ宇治のはし姫

○いさよひ―ためらふこと。○まきの板戸―杉や檜などの板戸。まきは眞木の義。常磐木をいふ。○今こむと―すぐに行かうと。○あり明の月―廿日以後の月に專らいふ。

○月夜よし夜よし―月夜よし月夜よしの略。○こてふ―來よといふ。○元結―髮の本取をゆふ物。その色の濃紫なり。○宮城野―陸前國宮城郡○本あらのこはぎ―本立のあらき木萩。

○見てしが―見たい。○なには―難波に、何はなかく。○とは―山城國乙訓郡の鳥羽。常をかく。○敷島―大和國磯城郡。こゝに枕明帝都し給ひしより起りて、大和に續けて枕詞となる。○ころもへずして―頃も經ず。間なしに。唐衣までは序。

又は宇治の玉姫

君やこむ我やゆかむのいさよひにまきの板戸もささず寢にけり

そせいほうし

今こむといひしばかりに長月のあり明の月をまちいでつるかな

よみ人しらず

月夜よし夜よしと人に告やらばこてふに似たり待たずしもあらず

きみ來ずばねやへも入らじ濃むらさきわが元結に霜はおくとも

宮城野の本あらのこはぎ露をおもみ風を待つごと君をこそ待て

あな戀しいまも見てしが山がつの垣ほに咲けるやまとなでしこ

津の國のなにはおもはず山城のとはに逢ひ見むことをのみこそ

つらゆき

敷島の大和にはあらぬ唐ごろもへずして逢ふよしもがな

ふかやぶ

戀しとはたが名づけけむ言ならむ死ぬとぞ啻にいふべかりける

よみ人しらず

みよし野のおほ川のへの藤なみのなみに思はばわが戀ひめやは

かく戀ひむものとはわれも思ひにき心のうらぞまさしかりける

あまの原ふみとどろかしなる神も思ふなかをばさくるものかは

梓弓ひき野のつづらすゑつひにわがおもふ人にことのしげけむ

この歌は、ある人、あめのみかどの、近江のうねべに給ひけるとなむ申す。

夏引の手びきの絲をくりかへしことしげくとも絶えむと思ふな

この歌は、返しによみて奉りけるとなむ。

さと人のことは夏野のしげくともかれ行く君にあはざらめやは

藤原敏行の朝臣の、業平朝臣の家なりける女をあひしりて、文遣はせりける詞に、「今まうでく。雨のふりけるをなむ見わづらひ侍る」といへりけるを聞きて、女に代りてよめる。

在原業平朝臣

○藤波の―以上は序。○なみに思はゞ―並々の者と思はゞ。
○心のうら―心の内の占。○まさし―正し。
○さくる―遠放くる。○梓弓―枕詞。○ひき野―河内國日置とかきて、今へキといふ所。○つゞら―葛。○ことのしげけむ―言の繁くあらんの意。言は噂。
○夏引の手びきの絲―春蠶を飼ひ、夏絲を引けば夏引といひ、手して引けば手引の絲といふ。
○夏野の―夏野の如く。
○まうでく―いま參らう。○見わづらひ侍る―見合せて居ります。

○とひがたみ―問ひ難さに。○身をしる雨―身の果報を知る雨。
○大幣―忌串にさしたる御幣。祓へ果つれば、各引寄せつゝ撫づる物なれば、ひくてあまたといへり。
○流れても―大幣は川に流すものなり。長らへてを寄す。
○風をいたみ―風が強さに。
○ほふ木あまたに―かづらの〻木に這ひかゝるやうに、あちこちと通ふ所が多き故。
○夜がれをしてか―一夜を闕かしてか。
○つき草―螢草。この花物に移り易き故、うつし心の序詞とす。○うつしごころ―變り易き心。○色ことに―色殊に、格別に色の深きこと。
○思ふものから―思ひながら。

かずかずに思ひ思はずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

ある女の、業平の朝臣を、所定めずありきすと聞きて、よみて遣しける

大幣のひくてあまたになりぬれば思へどえこそたのまざりけれ

業平朝臣

大幣と名にこそ立てれながれても逐による瀬はありてふものを

よみ人しらず

すまの蜑の鹽やくけぶり風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

玉かづらはふ木あまたになりぬればたえぬ心のうれしげもなし

たがさとに夜がれをしてか時鳥ただここにしも寢たるこゑする

いで人はことのみぞよきつき草のうつしごころは色ことにして

いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉嬉しからまし

いつはりと思ふものから今さらにたがまことをかわれは賴まむ

あきかぜに山の木の葉もうつろへば人の心もいかがとぞおもふ　素性法師

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

蟬のこゑ聞けばかなしな夏ごろもうすくや人のならむと思へば　友則

題しらず

うつ蟬の世の人ごとのしげければ忘れぬもののかれぬべらなり　よみ人しらず

あかでこそ思はむなかは離れなめそをだにのちの忘れがたみに　〃

忘れなむとおもふ心のつくからにありしよりけにまづぞ悲しき　〃

忘れなむわれを怨むなほとゞぎす人のあきにはあはむともせず　〃

たえずゆくあすかの川のよどみなば心ありとやひとのおもはむ　〃

この歌、ある人のいはく、中臣のあつま人が歌なり。

淀川のよどむとひとは見るらめどながれてふかき心あるものを　素性法師

○夏衣―うすくの序。○うすくや人の―思ふ人の契の薄く。

○うつ蟬の―世の枕詞。○かれぬべらなり―二人の中も離れさうな様子だ。

○忘れがたみ―忘れ難きに形見をかく。

○ありしよりけに―今迄よりは殊に。

○人のあきには云々―時鳥の秋にならぬうちに去る如く、我も人の心の飽きのくる時節には逢はうとはしない。

○心ありとや―絶ゆる心のあるとか。

○淀川のよどむと―淀川の淀むやうに、心に滞りがあると。○ながれて―流れてに長らへてをかく。

そこひなき淵やはさわぐ山がはのあさき瀬にこそあだ波は立て　よみ人しらず

くれなゐのはつ花染のいろ深くおもひしこころわれわすれめや　河原左大臣

陸奥（みちのく）のしのぶもぢずりたれゆゑに亂れむと思ふわれならなくに　よみ人しらず

思ふよりいかにせよとかあき風になびくあさぢの色ことになる　〃

ちぢの色にうつろふらめどしらなくに心し秋のもみぢならねば　小野小町

蜑のすむ里のしるべにあらねどもうらみむとのみ人のいふらむ　下野雄宗

くもり日の影としなれる我なればめにこそ見えね身をば離れず　つらゆき

いろもなき心をひとにそめしより移ろはむとはおもほえなくに

○そこひなき―底の限も無き。深きをいふ。

○はつ花染―紅花（ベニバナ）の初花にて染むる。

○しのぶもぢずり―布帛に忍草の葉を種々の色に摺りたるものにて、その文亂髪の如く亂れる狀なれば亂摺といひ、産地の名をかけては信夫亂摺ともいふ。

○思ふより―思ふ事より外に。○あさぢ―淺茅。

○心し秋の云々―人の心は秋の紅葉の如く色に現れぬ故、移ろふ樣子が知れぬ。

○しるべ―案内者。○うらみむ―浦見むに、恨みむをかく。

○影としなれる―影の如くなれる。扨することを、影となるといふ也。○身をば離れず―心は貴方の身を離れぬ。

○しかもせぬ―然も爲ぬ　即ち解きもせぬのに。○下紐―下著の紐。○かげろふ―陽炎の如く　○ふる人―故人。ふるに降るをかく。○堀江―攝津國難波の堀江。○たな無し小舟―舟棚のなき小舟。○漕ぎかへり―漕ぎ返りする如く、くり返して。○わたつみと云々―海の荒るゝ如くに、荒れはてたる床なるを。

○初雁の―初雁の如くなきの序。○わたる―とほる。○右のおほいまうち君―右大臣源能有。○住まず―遍ひこず。

めづらしき人を見むとやしかもせぬわが下紐（したひも）の解けわたるらむ

かげろふのそれかあらぬかはる雨のふる人みれば袖ぞ濡れぬる

堀江（ほりえ）こぐたな無し小舟（をぶね）漕ぎかへりおなじ人にやこひわたりなむ

伊勢

わたつみとあれにし床（とこ）をいま更にはらはば袖やあわと浮きなむ

つらゆき

いにしへになほ立ちかへる心かな戀しきことにものわすれせで

人をしのびにあひ知りて、あひ難くありければ、その家のあたりをまかりありきける折に、雁のなくを聞きて、よみて遣しける

大友黒主

おもひ出でて戀しきときは初雁のなきてわたると人知るらめや

右のおほいまうち君住まずなりにければ、かの昔、おこせりける文どもを、取集めて返すとて、よみておくりける

○たのめこし―頼ませてきた。○言の葉―書簡をいふ。○ふるれば―古臭う飽かるれば。

○物から―物ながら。

○玉ぼこの―道の枕詞。○道はつれにも云々―今は道を惡びて來れるなれども、いつも惡びて來て下されの意。○まへ―家の前。○棚橋―流より高くかけたる橋　○駒の足折れ―馬の足をつまづかせて止めて臭れ家の前の棚橋よ。

○あらばこそ云々―我は水鴨付鳥（鶏）なられば、君が往來を見て居られぬ。

○故里―都址。○こころのあれて―心の變ること

みよ人しらず

たのめこしことの葉いまは返してむわが身ふるればおき所なし

かへし

今はとてかへす言の葉拾ひおきておのが物からかた見とや見む

題しらず　　よるかの朝臣

玉ぼこの道はつねにもまどはなむ人をとふともわれかと思はむ

よみ人しらず

まてといはば寢ても行かなむしひて行く駒の足折れまへの棚橋

中納言源のぼるの朝臣の、近江の介に侍りける時に、よみてやれりける　　閑院

あふ坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆききをなくなくも見め

題しらず　　伊勢

ふる里にあらぬ物からわがために人のこころのあれて見ゆらむ

寵

典侍藤原因香朝臣　近院の右のおほいまうち君

山がつの垣ほにはへるあをつづら人はくれどもことづても無し

酒井人眞（ひとざね）

おほ空はこひしき人のかたみかは物思ふごとにながめらるらむ

よみ人しらず

あふまでのかた見もわれは何せむに見ても心のなぐさまなくに

親のまもりける人のむすめに、いとしのびにあひて、物らいひけるあひだに、親の呼ぶといひければ、いそぎ歸るとて、裳をなむぬぎ置きて入りにける。その後裳を返へすとてよめる

おきかぜ

あふまでの形見とてこそとどめけめ涙にうかぶもくづなりけり

題しらず

よみ人しらず

かたみこそ今はあたなれこれなくば忘るる時もあらましものを

○青つづら―馬鞭草といふ葛の一種。以上は序。○くれども―つづらは手繰りよせて取るもの故、人の來るに寄す。○かたみかは―形見か形見ではない。然るに何故。○何せむに―何しに望まうぞ。○親のまもりける―親の大事にかしづいた。○物ら―物など。○もくづ―藻屑。裳を寄す。○あた―仇かたき。

○五條のきさいの宮―仁明天皇の皇后藤原順子。○西の對―中昔の家造は寢殿を正中に、東西に對屋（タイノヤ）を建つ。○ほい―本意。○あばらなる板敷―板敷の間の、戸障子など建てめぐらさぬをいふ。○月や春や―二つのやは共に反語、やはの意。○もとの身にして―下に身の上は去年とは變りはてたるよの意を含めり。○したに―心の底に。○ほに出でたるを結ぶやうに、公然他の人に緣を結ばれてしまうた。

古今和歌集巻第十五

戀歌五

五條のきさいの宮の西の對に住みける人に、ほいにはあらで、物いひ渡りけるを、む月の十日餘りになむ、外へ隱れにける、あり所は聞きけれど、え物もいはで、又の年の春、梅の花ざかりに、月の面白かりける夜、こぞを戀ひて、かの西の對にいきて、月のかたぶくまで、あばらなる板敷にふせりてよめる

在原業平朝臣

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身一つはもとの身にして

題しらず

藤原仲平朝臣

花すすきわれこそしたに思ひしかほに出て人にむすばれにけり

藤原兼輔朝臣

○音羽がは―山城國山科なる音羽瀧の末流。○みなれ―水馴に見馴をかく。○さてもや云々―それでも憂いものであるか、この世の中を試して見よう。

○又も見まくの云々―又も逢見たくなる故に。

○いとはれて―いと晴れてに厭はれてをかく。

○花がたみ―花を摘み入るゝ籠。○めならぶ―目並ぶ。同じ程に見ゆるをいふ。○うきめ―憂き目に浮き布をかく。○ながるゝ―泣かるゝに、流るゝをかく。○かり―假に刈をかく。

よそにのみ聞かましものを音羽川渡るとなしにみなれ初めけむ　凡河内躬恒

わが如くわれを思はむ人もがなさてもやうきと世をこころみむ　もとかた

ひさ方のあまつ空にもすまなくに人はよそにもおもふべらなり　よみ人しらず

見てもまた又も見まくのほしければ馴るるを人は厭ふべらなり　紀友則

雲もなくなぎたる朝の我なれやいとはれてのみ世をばへぬらむ　よみ人しらず

花がたみめならぶ人のあまたあれば忘られぬらむ數ならぬ身は

うきめのみおひてながるる浦なればかりにのみこそ蜑は寄らめ　伊勢

あひにあひて物おもふ頃のわが袖に宿る月さへぬるるがほなる

○箙をあらみ―箙の組さに。○間遠にあれや―間遠なる如くなればや。○わかごも―若狐。○かりに―刈りに、假をかく。○なにに深めて―淺いかの人の心を、何故に深く取なして思ひそめたらう。

○はれがき―羽を掻鳴すこと。○もゝしばがき―百羽掻する如く。○數かく―幾度となくもじ〳〵すること。○玉かづら―絶ゆの枕詞

○あきや―飽きさに、秋をかく。

○山の井の―山の井の如く。此歌萬葉十六の「淺香山影さへみゆる山の井の淺き心をあが思はなくにによれり。○影ばかり―影の如く一寸。

○わすれ草―萱草のこと

○種とらましを―忘草の種を取るは忘るゝこと。

○いをれぬ―え眠られぬ

秋ならでおくしらつゆはねざめするわが手枕のしづくなりけり　よみ人しらず

須磨のあまの鹽燒ごろも筬をあらみ間遠にあれや君がきまさぬ

やま城のよどのわかごもかりにだにこぬ人頼むわれぞはかなき

あひ見ねば戀こそまされみなせ川なにによかめて思ひそめけむ

あかつきの鶺鴒のはねがきももはがき君が來ぬ夜はわれぞ數かく

玉かづらいまは絶ゆとやふく風のおとにも人のきこえざるらむ

わが袖にまだき時雨のふりぬるは君がこころにあきや來ぬらむ

やまの井のあさきこころも思はぬに影ばかりのみ人の見ゆらむ

わすれ草種とらましをあふ事のいとかくかたきものと知りせば

こふれども逢ふ夜のなきは忘草ゆめ路にさへや生ひしげるらむ

夢にだにあふ事かたくなり行くはわれやいを寢ぬ人やわするる

もろこしも夢に見しかば近かりき思はぬなかぞはるけかりける　兼藝法師

獨のみながめふる屋のつまなれば人をしのぶのくさぞ生ひける　貞登

わが宿は路もなきまであれにけりつれなき人をまつとせしまに　僧正遍昭

今こむといひて別れしあしたより思ひくらしのねをのみぞなく　よみ人しらず

こめやとは思ふものからひぐらしの鳴く夕暮はたち待たれつつ

今しはとわびにしものをささがにの衣にかかりわれをたのむる

今はこじと思ふものから忘れつつまたるる事のまだもやまぬか

月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらなむわびつつも寢む

植ゑていにし秋田刈るまで見えこねばけさ初雁の音にぞ啼ぬる

○思はぬなかぞ云々―思うてくれぬ中は、夢にも見ぬから遠くあつた。
○ながめふる屋―詠め經るに長雨降るをかけ、さて古屋と續けたり。○つま―軒の端。○しのぶ―萠ふ。
○思ひぐらし―思ひ暮しに鯛をかく。
○こめや―來むやはの意　○今しはと―今はと。しは强辭。○さゝがにの云云―蜘蛛の出づれば待人來るといふ傳說による。
○月夜には云々―かくさやけき月夜には、常には來ぬ人も、もしや來るかと待たれる。
○植ゑていにし―田植の頃去にし人が。

來ぬ人をまつ夕ぐれのあき風はいかに吹けばかわびしかるらむ

久しくもなりにけるかな住の江のまつは苦しき物にぞありける　兼覽王

住のえのまつほど久になりぬれば芦たづの音になかぬ日はなし

仲平朝臣あひしりて侍りけるを、かれ方になりにければ、父が大和の守に侍りける許へまかるとて、よみて遣しける　伊勢

三輪の山いかに待ちみむ年ふとも尋ぬる人もあらじとおもへば

題しらず　雲林院のみこ

ふきまよふ野風をさむみあき萩のうつりも行くか人のこころの

今はとてわが身時雨にふりぬれば言の葉さへにうつろひにけり

かへし　小野小町

ひとを思ふ心木の葉にあらばこそ風のまにまに散りもみだれめ　小野貞樹

○住の江の―序詞。○まつ―待つに、松をかく。
○住の江の、芦たづの―待つ、音になくの序詞。
○かれ方―遠ざかり方。
○三輪の山―大和國式上郡、集中の古歌に「わが庵は三輪の山本戀しくばとぶらひきませ杉たてる門」によりてよめり。
○時雨に―時雨の如くに。
○ふり―降りに掛りをかく。

業平朝臣、紀有常がむすめに住みけるを、怨むることありて、しばしのあひだ、晝はきて夕さりは歸りのみしければ、よみて遣しける

天雲（あまぐも）のよそにも人のなり行くかさすがに目には見ゆるものから

かへし　業平朝臣

ゆきかへり空にのみしてふることはわがゐる山の風はやみなり

題しらず　景式（かげのり）王

唐衣（からころも）なれば身にこそまつはれめかけてのみやは戀ひむと思ひし

ともの り

あき風は身をわけてしも吹かなくに人のこころの空になるらむ

源宗于朝臣

つれもなくなり行く人のことの葉ぞ秋よりさきの紅葉なりける

心地そこなへる頃、あひしりて侍りける人のとはで、心地おこたりてのちとぶらへりければ、よみて遣しける

○天雲の―天雲の如く。

○ふる―時を經る。○わがゐる山の云々―山の風の烈しさに落付かぬやうに、わが住所として居る貴方の心が變り易き故ぞ。

○なれば―着馴れなば。○かけて―心にかけて。衣を物に掛くるを寄す。

○人の心の空―風は人の身を吹分けはせぬのに、何故人の心の取締なくよそに浮かれそであらう。

○秋より先の紅葉―早く變るといふ謎。

○心地おこたりて―病氣全快して。

○死出の山―黄泉路にありといふ、佛説に出づ。

○つらき人より云々―假令つれなき貴方とはいへかれての約束なれば、貴方より先には越すまいと思うて。

○時過ぎて―盛の時節が過ぎて。○おもひ―思に火をかく。

○きえでうき身―消えずして浮くに、憂き身をかく。○なかれて―長らへてに流れてをかく。

○わがみを―わが身をに水脈をよす。

○よし野川―序詞。○はやく―以前に。河流の早きを寄す。

兵衛

死出（しで）の山ふもとを見てぞ歸りにしつらき人よりまづ越えじとて

あひしれりける人の、やうやくかれ方になりけるあひだに、燒けたる茅の葉に、文をさして遣はせりける　小野が姉

時過ぎてかれ行く小野の淺茅（あさぢ）には今はおもひぞ絶えずもえける

物思ひける頃、物へまかりける道に、野火のもえけるを見てよめる　伊勢

冬がれの野べとわが身を思ひせばもえても春を待たましものを

水の沫のきえでうき身といひながらながれてなほも賴まるる哉

よみ人しらず

みなせ川ありて行く水なくばこそ遂にわがみを絶えぬと思はめ

よし野川よしや人こそつらからめはやくいひてしことは忘れじ

世のなかの人のこころは花染のうつろひやすき色にぞありける　よみ人しらず

心こそうたてにくけれ染めざらば移ろふことも惜しからましや

色見えでうつろふものは世のなかの人の心のはなにぞありける　よみ人しらず

我のみや世をうぐひすと鳴きわびむ人のこころの花とちりなば　そせいほうし

思ふともかれなむ人をいかがせむあかず散りぬる花とこそ見め　よみ人しらず

今はとて君がかれなばわかやどの花をばひとり見てやしのばむ　宗于朝臣

わすれ草かれもやするとつれもなき人のこころに霜はおかなむ

寛平の御時、御屏風に歌かかせ給ひける時、よみて書きける

○花染―月草の花にて染めたる物。色變り易し。
○染めざらば―人を思ひ入らなかつたならば。
○色見えで―色ありとも見えずして。
○世をうぐひす―世を憂といふに、鶯をかく。○花と―花の如くに。

わすれ草なにをか種とおもひしはつれなき人のこころなりけり　素性法師

題しらず

秋の田のいねてふことをかけなくに何をうしとか人のかるらむ　紀貫之

初雁のなきこそわたれ世のなかの人のこころのあきしうければ　よみ人しらず

あはれともうしともものをおもふ時などか涙のいとなかるらむ

身をうしと思ふに消えぬ物なればかくても經ぬる世に社有けれ　典侍藤原直子朝臣

蜑の刈る藻に住む蟲のわれからとねをこそなかめ世をば恨みじ　いなば

あひ見ねもうきもわが身のから衣おもひしらずも解くる紐かな　すがののただおん

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

○おもひしは―思ひしは不覺の至にて。
○いれ―稻に去れをかく。○こともかけなくに―詞もかけぬに。○かるる―刈るに、離るるをかく。
○初雁の―初雁の如く。○世のなかの人―わが思ふ人を暗にさす。○あき―飽きに秋をかく。
○いとなかるらむ―暇なくあるならん。
○消えぬ―死なぬ。
○われから―藻などにつく小蟲の名。わが身からの意を寄す。
○わが身のから衣―わが身からの意に唐衣をかく。

○思ふ事とて―私を思ふ事として。○きかく―聞くの延言。○もはら―専ら。一途にの意。○わびはつる―かの人に見棄てられて、わびはつる時さへ。○しのぶ―慕ふ。○影ならずして―鏡へ映つるわが身の影より外にはの意。○夕されば―夕方になれば。○わが身こす波―わが身にあまる歎きな波に喩へたり。○うらみ―浦見に、恨みをかく。○あらすき返し返して―疎鋤き返す如く返しても。もは歎辞。

つれなさをいまはこひじと思へども心よわくもおつるなみだか

題しらず　伊勢

人知れず絶えなましかば佗つつもなき名ぞとだにいはまし物を

よみ人しらず

それをだに思ふ事とてわがやどをみきとないひそ人のきかくに

あふことのもはら絶えぬる時にこそ人の戀しきことも知りけれ

わびはつる時さへもののかなしきはいづこをしのぶ涙なるらむ

藤原興風

うらみても泣きてもいはむ方ぞなき鏡に見ゆるかげならずして

よみ人しらず

夕さればひとなき床をうちはらひ歎かむためとなれるわが身か

わたつみのわが身こす波たち返りあまの住むてふうらみつる哉

あらを田をあらすき返し返しても人のこころを見てこそやまめ

○ありそ海―荒磯海の義。○濱のまさご―濱の眞砂の如く。數多きをいふ。○ゆく雁の―行く雁の如く。以上は序。○心のあき―飽きに秋をかく。○ふきとふく―強く吹く。○たのみ―田の實に賴をかく。○うらみても―裏見ても。に怨みてもをかく。○葛の葉の―以上は序。○我をふるせろ―我を見すて、舊人となす。○身をうち橋―身を憂といふに、宇治橋をかく。

ありそ海の濱のまさごと賴めしは忘るることの數にぞありける

芦べより雲ゐをさしてゆく雁のいやとほざかるわが身かなしも

しぐれつつもみづるよりも言の葉の心のあきにあふぞわびしき

あき風のふきとふきぬるむさし野はなべて草葉の色かはりけり

小町

あき風にあふたのみこそ悲しけれわがみ空しくなりぬと思へば

平貞文

あき風のふきうらがへす葛の葉のうらみてもなほうらめしき哉

よみ人しらず

秋といへばよそにぞ聞きしあだ人の我をふるせる名にそ有けれ

わすらるる身をうち橋のなか絶えて人もかよはぬ年ぞへにける

又は、こなたかなたに人も通はず

坂上是則

あふことをながらの橋のながらへてこひ渡るまに年ぞへにける

うきながらけぬる沫ともなりななむ流れてとだに頼まれぬ身は

ながれてはいもせの山のなかに落つる吉野の川のよしや世の中

○ながらの橋―摂津國西生郡。ながらへての序詞。○うきながら―浮きに憂きをかく。○けぬる―消えぬる。○ながれて―流れてに長らへてをかく。○いもせの山―紀伊國那賀郡。夫婦の意を寄す。○よしや世の中―仕方がない。これが世の中の有様だ。

古今和歌集巻第十六

哀傷歌

いもうとのみまかりける時よめる　小野篁朝臣

泣く涙あめとふらなむわたり川みづまさりなばかへりくるかに

前のおほきおほいまうち君を、白川のあたりにおくりける夜よめる　素性法師

血の涙落ちてぞたぎつしら川は君が世までの名にこそありけれ

堀川のおほきおほいまうち君みまかりにける時に、深草山にをさめて後によみける　僧都勝延

うつせみはからを見つつも慰めつふか草のやまけぶりだに立て

かむつけの峯雄

ふかくさの野べの櫻しこころあらばことしばかりは墨染に咲け

○わたり川―三途川。○くるかに―來る爲に。○前のおほきおほいまうち君―太政大臣藤原良房。○白川―山城國愛宕郡。○おくりける夜―葬送の夜。○君が世まで―良房公在世の時かぎり。○堀川のおほきおほいまうち君―太政大臣藤原基經。○深草山―山城紀伊郡。○うつせみ―空蟬。蟬のぬけ殻をいふ。○からーぬけがら。○けぶりだに立てーせめて火葬の烟なりとも何時までも立てよ。○墨染―黒色。

藤原敏行朝臣のみまかりにける時に詠みて、かの家に遣しける

寝ても見ゆ寝ても見えけり大方はうつせみの世ぞ夢には有ける　紀友則

あひしれりける人のみまかりにければよめる

夢とこそいふべかりけれ世のなかに現あるものと思ひけるかな　紀貫之

あひしれりける人の身まかりにける時によめる

ぬるが内に見るをのみやは夢と言むはかなき世をも現とは見ず　壬生忠岑

姉の身まかりける時によめる

瀬をせけば淵となりてもよどみけり別をとむるしがらみぞなき　閑院

藤原忠房が、昔あひ知りて侍りける人のみまかりける時に、と

ぶらひに遣すとてよめる

さきだたぬ悔の八千たびかなしきは流るる水のかへりこぬなり

紀友則が身まかりにける時よめる　つらゆき

あす知らぬ我身と思へど暮れぬまのけふは人こそ悲しかりけれ　ただみね

時しもあれ秋やは人のわかるべきあるを見るだに戀しきものを　凡河内躬恒

母が思にてよめる

かみな月時雨にぬるるもみぢ葉はただわび人のたもとなりけり　ただみね

父が思にてよめる

藤ごろもはつるる絲はわびびとのなみだの玉の緒とぞなりける　つらゆき

思に侍りける年の秋、山寺へまかりける道にてよめる

あさ露のおくての山田かりそめにうき世の中をおもひけるかな　ただみね

思に侍りける人をとぶらひにまかりてよめる

すみぞめの君がたもとは雲なれやたえずなみだの雨とのみ降る

○うつせみの世云々―この現世は、すべて夢であつた。

○ぬるが内に―睡り居るうちに。

○別を―死別を。

○さきだたぬ悔―先に死なずして、あとに取殘されたる悔しさ。○水の―水の如くに。

○時しもあれ―物には時節があるに。○あるを見るだに―生きて居る人を見るにさへ。

○思―喪のこと。○わび人―難儀に逢へる人。

○藤衣―喪服をいふ。○はつるゝ―ほつるゝ。

○おくて―朝露の置くに晩稻(オクテ)をかく。晩稻は遲く熟する稻。○かりそめ―刈に假初をかく。山田までは序。

○とぶらひ―見舞。○すみぞめの―喪服の鈍色をさす。

女の親の思にて、山寺に侍りけるを、ある人のとぶらひ遣はせりければ、かへり事によめる　よみ人しらず

あしひきの山べに今はすみ染のころものそでのひるときもなし

涼闇の年、池のほとりの花を見てよめる　篁朝臣

水の面にしづく花のいろさやかにも君がみ影のおもほゆるかな

深草のみかどの御國忌の日よめる　文屋康秀

草ふかきかすみの谷に影隠してる日のくれし今日にやはあらぬ

深草のみかどの御時に、藏人の頭にて、よるひるなれ仕うまつりけるを、涼闇になりにければ、更に世にもまじらずして、比叡の山にのぼりて、かしらおろしてけり。その又の年、みな人御ぶくぬぎて、あるはかうぶり給はりなど、よろこびけるを聞きてよめる　僧正遍昭

みな人ははなのころもになりぬなりこけの袂よかわきだにせよ

河原のおほいまうち君のみまかりての秋、かの家のあたりをまかりけるに、紅葉の色まだ深くもならざりけるを見て、かの家によみて入れたりける　近院右大臣

うちつけに寂しくもあるかもみぢ葉も主なき宿は色なかりけり

藤原高經の朝臣のみまかりての又の年の夏、時鳥の鳴きけるを聞きてよめる　つらゆき

ほととぎすけさ鳴くこゑに驚けば君がわかれし時にぞありける

櫻を植ゑてありけるに、やうやく花咲きぬべき時に、かの植ゑける人身まかりにければ、その花を見てよめる　紀望行

花よりも人こそあだになりにけれいづれを先に戀ひむとか見し

あるじ身まかりにける人の家の梅の花を見てよめる　貫之

いろも香も昔のこさに匂へども植ゑけむひとのかげぞこひしき

河原の左のおほいまうち君のみまかりて後、かの家にまかりて

○すみ染―住むに、墨染の衣をかく。
○涼闇―天皇の御忌中。
○しづく―沈み漬く義。物の水中にあること。
○深草のみかど―仁明帝
○御國忌―天皇崩御の御忌日。○てる日のくれし―崩御ましくしをいふ。
○比叡の山―延暦寺。○御ぶくぬぎ―涼闇の間の喪服を脱ぐ。○かうぶり給はり―位階を賜はる。
○はなのころも―喪服に對して、平常の花やかなる衣をさす。○苔の袂―隱者の服。
○河原のおほいまうち君―河原左大臣源融。

○うちつけに―卒爾に。
○君が―一本君にとあり。
○あだ―はかなく。○いづれを―花と人とどちらを。
○こさ―濃さ。

○鹽竈—陸前國千賀の鹽竈の浦、今の松島灣。○うらさびし—浦さびしに、心さびしなかく。うらは心なり。
○曹司—部屋。
○ことならば—とても死なるゝならば。○たぎ—滿ろこと。
○なき人のやど云々—時鳥冥途の鳥といへば、この世になき人の宿に通ひ行かばの意。○かけて—かにかけて。

かりけるに、鹽竈といふ處のさまを作れりけるを見てよめる

君まさでけぶり絶えにし鹽竈のうらさびしくも見えわたるかな

藤原利基の朝臣の、右近中將にて住み侍りける曹司(ざうし)の、身まかりて後、人も住まずなりにけるに、秋の夜ふけて、物よりまうできけるついでに見入れければ、もとありし前栽、いとしげく荒れたりけるを見て、はやくそこに侍りければ、昔を思ひやりて、よみける

御春有輔

君がうゑし一むらすすき蟲のねのしげき野邊ともなりにける哉

惟喬のみこの、父の侍りけむ時によめりけむ歌どもと乞ひければ、書きておくりける奥に、よみてかけりける

とものり

ことならば言の葉さへも消えななむ見れば涙のたぎまさりけり

題しらず

よみ人しらず

なきひとのやどにかよはば時鳥かけてねにのみなくと告げなむ

○白雲のたつ野—白雲の立つほどの野原。
○式部卿のみこ—宇多帝の皇子敦慶親王。○帳のかたびら—御帳臺に懸けたる帳の布帛。○昔の手—故人の筆。
○かずかずに—親切に。
○山の霞—山の霞をわが火葬の烟と見て。
○たまよりも—わが魂よりも。○なき床—妻のなき床。
○心地たのもしげなく—病氣快癒の覺束なく。

たれ見よと花咲けるらむ白雲のたつ野とはやくなりにしものを

式部卿のみこ、閑院の五のみこに住み渡りけるを、幾ばくもあらず、女みこのみまかりにける時に、かのみこの住みける帳のかたびらの紐に、文をゆひつけたりけるを取りて見れば、昔の手にて、この歌をなむ書きつけたりける

かずかずにわれをわすれぬものならば山の霞をあはれとは見よ

をとこの、ひとの國にまかりけるまに、女にはかに病をして、いと弱くなりにける時、よみおきてみまかりにける

よみ人しらず

聲をだにきかでわかるるたまよりもなき床に寢む君ぞかなしき

病に煩ひ侍りける秋、心地たのもしげなく覺えければ、よみて人のもとに遣しける

大江千里

もみぢ葉を風にまかせて見るよりもはかなきものは命なりけり

身まかりなむとてよめる

藤原惟幹

露をなどあだなるものと思ひけむわが身も草におかぬばかりを

病して弱くなりける時よめる　　業平朝臣

つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日けふとは思はざりしを

甲斐の國にあひしりて侍りける人とぶらはむとて、まかりける道なかにて、俄に病をして、いまいまとなりにければ、よみて、京にもてまかりて、母に見せよといひて、人につけ侍りける歌

在原滋春

かりそめのゆきかひぢとぞ思ひこし今はかぎりの門出なりけり

○ばかりを—をは歎辭。
○遂に行く道—誰もいつかは死にゆく道。
○いまいまとなり—臨終になり。
○ゆきかひぢ—往反の道に、甲斐路を寄す。○思ひこし—思つて出て來たが。

古今和歌集巻第十七

雜歌上

題しらず　　よみ人しらず

わがうへにつゆぞおくなる天の川とわたるふねの櫂のしづくか

思ふどちまとゐせる夜は唐錦たたまくをしきものにぞありける

うれしきを何につつまむ唐ごろも袂ゆたかに裁てといはましを

限なき君がためにとをる花はときしもわかぬものにぞありける

ある人のいはく、この歌は前のおほいまうち君のなり。

紫のひともとゆゑにむさし野のくさはみながらあはれとぞ見る

めのおとうとをもて侍りける人に、うへきぬを贈るとて、よみてやりける　　業平朝臣

○とわたる—門渡る。
○たゝまく—裁つに座を起つなかく。
○ゆたかに—廣く大く。
○限なき—壽命の限なき
○ときしもわかぬ—時節の分ちもなしに咲く。○前のおほいまうち君—太政大臣藤原良房。
○紫の—紫草の。○みながら—皆ながら。殘らず。
○めのおとうと—妻の妹。
○もて侍りける—妻にもつてをる。○うへきぬ—袍。

紫のいろこきときは目もはるに野なるくさ木ぞわかれざりける

大納言藤原國經の朝臣、宰相より中納言になりける時に、染めぬうへのきぬのあやを贈るとてよめる　近院右大臣（こんゐんのみぎのおほいまうちぎみ）

色なしとひとや見るらむむかしより心にそめてしものを

石上並松が、宮仕もせで、石の上といふ所にこもり侍りけるを俄にかうぶり賜はりければ、喜びいひ遣すとて、よみて遣しける　布留今道

日の光やぶしわかねばいそのかみふりにしさとの花も咲きけり

二條の后の、まだ、東宮のみやすん所と申しける時に、大原野にまうで給ひける日よめる　業平朝臣

大原やをしほのやまもけふこそは神代のこともおもひいづらめ

五節の舞姫を見てよめる　良岑宗貞

あまつかぜ雲のかよひぢ吹きとぢよをとめの姿しばしとどめむ

五節のあしたに、かむざしの玉の落ちたりけるを見て、誰がならむとぶらひてよめる　河原左大臣

主やたれ問へど白玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はむ

寛平の御時に、うへのさぶらひに侍りけるをのこども、瓶を持たせて、きさいの宮の御方に、おほみきのおろしときこえに、奉りたりけるを、藏人どもくらうど笑ひて、瓶をお前にもていでて、ともかくもいはずなりにければ、使のかへり來て、「さなむありつる」といひければ、藏人の中におくりける　敏行朝臣

玉垂の小がめをやいづらこよろぎの磯の浪わけおきに出でにけり

女の見て笑ひければよめる　兼藝法師

かたちこそみ山がくれのくち木なれ心ははなになさばなりなむ

方たがへに人の家にまかりける時に、あるじのきぬを著せたりけるを、あしたに返すとてよめる　紀友則

蟬のはのよるの衣はうすけれどうつり香こくもにほひぬるかな

題しらず　よみ人しらず

○目もはるに―見渡し遙に。○わかれざりける―差別なくなつかしい。○宰相―參議の唐名。○染めぬうへのきぬのあや―麹にすべき白の綾絹。

○やぶしわかねば―藪原まで分け隔てなしに照すから。○大原野―山城國乙訓郡春日の神をこゝに勸請す。○をしほの山―大原野の神の鎭座まします山。○神代のこと―藤原氏の祖神兒屋根命が天孫の尊を補佐せし昔の契をさす。○五節の舞姫―陰暦十一月の豐明節會に行はるる女樂なり。○雲のかよひぢ―五節の舞姫を天女と看做し、その天上に歸るべき通路を喩ふ。

○主―簪の玉の落し主。○うへのさぶらひ―殿上の侍所、禁中にあろ侍臣の控所。○きさいの宮―藤原溫子。太政大臣基經の女。○おほみきのおろし―大御酒の下し賜はらんの略。○藏人―后の御方の女藏人。○玉だれの―小瓶の枕詞。○小がめ―小瓶に小龜をかく。○こよろぎの磯―小潤の磯にて、相模國中郡。○おき―置きに沖をかく。○方たがへ―出入に方角を變ふること。中古陰陽家の唱へし迷信。○蟬の羽の―蟬の羽の如く。

遅くいづる月にもあるか山のはのあなたおもても惜むべらなり
わがこころなぐさめかねつ更科（さらしな）やをばすてやまにてる月を見て
　業平朝臣
おほ方は月をもめでじこれぞこのつもればひとの老となるもの
　月おもしろしとて、凡河内躬恒がまうできたりけるによめる
かつ見れど疎くもあるかな月影のいたらぬ里もあらじと思へば
　紀貫之
ふたつなき物と思ひしをみなそこに山のはならでいづる月かげ
　題しらず
　よみ人しらず
天のがは雲のみをにてはやければひかりとどめず月ぞながるる
あかずして月のかくるる山もとはあなたおもてぞ戀しかりける
　惟喬のみこの、狩しける供にまかりて、やどりに歸りて、夜一
　夜酒のみ物語をしけるに、十一日の月も隱れなむとしけるをり

○あなたおもて云々―山のあなたでも人の惜むによつて、此方に月の出づるのが遅いのだらう。かは歎辭。
○更科やをばすて山―信濃國更科郡姨捨山。
○おほ方は―大概の事ならば。
○かつ見れど云々―一方には親切には見ゆるが、又一方には疎くも思はるるよ。
○みなそこ―水底。
○みを―水脈。
○あかずして―見飽かずして。○山もと―山麓。

に、みこ醉ひてうちへ入りなむとしければ、よみ侍りける
　業平朝臣
飽（あか）なくにまだきも月の隱るるか山の端遁げて入れずもあらなむ
　田村のみかどの御時に、齋院に侍りけるあきらけい子のみこを
　母あやまちありといひて、齋院を易へられむとしけるを、その
　事やみにければよめる
　尼敬信
大ぞらをてりゆく月しきよければ雲かくせどもひかりけなくに
　題しらず
　よみ人しらず
いそのかみふるからをののの本がしはもとの心はわすられなくに
いにしへの野中の清水ぬるけれどもとのこころをしる人ぞくむ
いにしへのしづの苧環（をだまき）いやしきもよきも盛りはありしものなり
今こそあれわれも昔はをとこ山さかゆくときもありこしものを
世のなかにふりぬるものは津の國の長柄の橋とわれとなりけり

○ふるからをの―古幹弊布留枯小野。なほ異説多し。○本がしは―元木の柏。
○いにしへの―昔名高かりし。
○いにしへのしづ―上代の倭文布（シヅノヌノ）。青と白とを織りまぜたる縞織なり。○苧環（ヲダマキ）―絲を巻く巻子。
○今こそあれ―今でこそ老い朽ちたれ。○をとこ山―山城國久世郡男山なり。石清水八幡宮あり。
○隱るるか―かは歎辭。
○田村のみかど―文徳帝
○あきらけいこのみこ―惠子内親王。文徳帝の皇女。

ささの葉にふりつむ雪のうれを重みもとくだちゆくわが盛はも

大あらきの森のした草おいぬれば駒もすさめず刈るひともなし

又は、櫻あさのをふの下草おいぬれば駒もすさめず刈るひともなし

數ふれば止らぬ物をとしといひて今年はいたく老いぞしにける

おしてるや難波のみつにやく鹽のからくも我は老いにけるかな

又は、大伴のみつの濱べに

老らくのこむと知りせば門さしてなしと答へてあはざらましを

この三つの歌は、昔ありける三人のおきなのよめるとなり。

さかさまに年もゆかなむ取りもあへず過ぐる齢や共にかへると

とりとむる物にしあらねば年月をあはれあなうとすぐしつる哉

止めあへずうべもとしとはいはれけり然もつれなく過ぐる齢か

鏡やまいざ立ちよりて見てゆかむ年へぬる身は老いやしぬると

この歌は、ある人のいはく、大ともの黒主がなり。

○うれを重み―末の重さに。○もとくだちゆく―本の方の崩れ行くにて、わが齢の傾くを喩ふ。○大あらきの森―大和國宇智郡。○すさめず―賞翫せず。○櫻あさのをふ―櫻色の花さく麻畑。○とし―疾しに年をよす。○おしてるや―難波の枕詞。○みつ―御津。

○老らく―老にゐなじ。○なし―不在。

○とし―疾しに、年を寄す。

○鏡山―近江國蒲生郡。

業平の朝臣の母のみこ、長岡にすみ侍りける時に、業平、宮仕すとて、時々もえまかりとはず侍りければ、師走ばかりに、母のみこの許より、とみのことにて、文をもてまうできたり。あけて見れば詞はなくて、ありける歌

老いぬればさらぬ別もありといへばいよいよ見まくほしき君哉

業平朝臣

世のなかにさらぬ別のなくもがな千代もとなげく人の子のため

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　在原棟梁

白雪の八重ふりしけるかへる山かへるも老いにけるかな

おなじ御時、うへのさぶらひにて、をのこどもに、大御酒給ひて、大御遊ありけるついでに、仕うまつれる

老ぬとてなどかわが身をせめきけむ老ずばけふにあはまし物か

敏行朝臣

題しらず

よみ人しらず

○長岡―山城國乙訓郡。○母のみこ―桓武帝の皇女伊登内親王。○とみのこと―急ぎの事。

○さらぬ別―遁れがたき別。死別をいふ。

○千代もとなげく―千年もましませと歎き願ふ。伊勢物語には、千代もと祈るとあり。

○かへる山―越前國敦賀郡。○かへるがへる―かへすがへす。

○大御遊―管絃の御遊。

○せめきけむ―悶いだらう。○ものか―かは反語。

千早ぶる宇治の橋もりなれをしぞあはれとは思ふ年のへぬれば

われ見てもひさしくなりぬ住の江の岸のひめ松いくよへぬらむ

住よしの岸のひめまつ人ならばいくよか經しと問はましものを

あづさゆみいそべの小松たが世にか萬代かねてたねを蒔きけむ

この歌は、ある人のいはく、柿本の人まろがなり。

かくしつつ世をやつくさむ高さごの尾上に立てる松ならなくに

藤原興風

たれをかも知る人にせむたかさごの松もむかしの友ならなくに

わたつみの沖つ潮合にうかぶ泡の消えぬものからよる方もなし

わたつみのかざしにさせる白たへの波もてゆへるあはぢ島やま

わたの原よせくる波のしばしばも見まくのほしきたまづ島かも

なには潟汐みちくらしあまごろもたみのの島にたづ鳴きわたる

○なれ—汝。

○あづさ弓—いそべの枕詞。○かれて—かけて。

○高砂の—尾上の枕詞。

○潮合—さしひく潮の滿ち合ふところ。○消えぬ物から云々—命は消えずにありながら、たよる所もない。

○わたつみ—海のことにもいへど、こゝはかざしと續けたる故、海神の名。○ゆへる—結ひめぐらして居る。

○波の—波の如く。○見まくのほしき—見たいと思ふ。○たまづ島—紀伊國海部郡(若の浦(今の和歌の浦))。

○あまごろも—雨衣。蓑の枕詞。○たみのの島—場所不明。

貫之が、和泉の國に侍りける時に、大和より越えまうできて、よみて遣しける

藤原忠房

君を思ひおきつの濱になくたづの尋ねくればぞありとだに聞く

かへし

つらゆき

おきつ浪たかしのはまのはま松の名にこそ君を待ちわたりつれ

難波にまかれりける時よめる

難波潟おふる玉藻をかりそめの海士とぞわれはなりぬべらなる

あひしれりける人の、住吉にまうでけるに、よみて遣しける

壬生忠岑

住よしとあまはつぐともながす居すな人わすれ草おふといふなり

難波へまかりける時、たみのの島にて、雨にあひてよめる

つらゆき

雨によりたみのの島をけふゆけばなには隱れぬ物にぞありける

法皇、西川におはしましたりける日、鶴洲に立てりといふこと

○尋ねくればぞ云々—尋れ來たればこそ、御無事であるといふことだけも聞いた。

○たかしの濱—和泉國泉北郡。○松の名—待つを寄す。

○かりそめ—刈りに、假初をかく。

○住吉—地名に、住み好しをかく。

○雨により—雨の降るによりて。○なには云々—蓑とはいへど、名だけでは身が隱れぬものであつた。

○法皇—宇多の上皇。○西川—山城大堰川。

を題にて、よませ給ひける

あしたづの立てる河べを吹く風に寄せてかへらぬ波かとぞ見る

中務のみこの家の池に、舟をつくりておろしはじめて遊びける日、法皇御覽じにおはしましたりけり。夕さりつ方、還りおはしまさむとしける折に、よみて奉りける　伊勢

水のうへに浮べる舟の君ならばここぞとまりといはましものを

唐琴といふ處にてよめる　眞靜法師

都までひびきかよへるからことは波の緒すげてかぜぞひきける

布引の瀧にてよめる　在原業平朝臣

こきちらす瀧のしら玉ひろひおきて世のうきときの涙にぞかる

布引の瀧のもとにて、人々あつまりて、歌詠みける時によめる　業平朝臣

ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに

吉野の瀧を見てよめる　承均法師

○中務のみこ—宇多法皇の御子敦慶親王。

○唐琴—備前國泊とぞ。○ひゞきかよへる—名高く聞えたる所といふを、唐琴の緣にていへり。○布引の瀧—攝津國。今の神戸市外。

○ぬき亂る—緒に通してあろ玉を拔き散らす。○散るか—かは歎辭。○袖のせばきに—狹き袖に包まれもせぬほど。

たがためにひきて晒せる布なれや世をへて見れどとる人もなき

題しらず　神退法師

きよたきの瀨々のしらいとくりためて山わけ衣おりてきましを

龍門にまうでて、瀧のもとにてよめる　伊勢

たち縫はぬきぬきし人もなきものをなにやま姫の布さらすらむ

朱雀院のみかど、布引の瀧御覽ぜむとて、ふむ月のなぬかの日おはしましてありける時に、さぶらふ人々に、歌よませ給ひけるにかよめる　橘長盛

ぬしなくてさらせるぬのをたな機にわが心とやけふはかさまし

ひえの山なる音羽の瀧を見てよめる　たゞみね

おちたぎつ瀧のみなかみ年つもり老いにけらしなくろき筋なし

おなじ瀧をよめる　みつね

かぜふけど處もさらぬしら雲は世をへておつる水にぞありける

田村の御時に、女房のさぶらひにて、御屏風の繪御覽じけるに

○きよ瀧—山城國高雄山の麓の清瀧川。○山わけ衣—山をゆく時の衣。

○龍門—大和國吉野郡の龍門寺。○たち縫はぬきぬきし人—仙人をいふ。

○朱雀院のみかど—宇多上皇。○ふむ月—陰暦七月。

○わが心とや—わが志にて。

○くろき筋なし—瀧の水を白髮に喩へたり。

瀧おちたりけるところ面白し。これを題にて歌よめと、さぶら
ふ人に仰せられければよめる　三條の町

思せくこころのうちの瀧なれやおつとは見れどおとのきこえぬ

屏風の繪なる花をよめる　つらゆき

咲きそめし時よりのちはうちはへて世は春なれや色のつねなる

屏風の繪によみむはせて書きける　坂上是則

かりてほす山田の稻のこきたれてなきこそわたれ秋のうければ

○思せく―思の迫る。
○うちはへて―ひき續きて。
○かりてほす―刈るに、雁をかく。○こきたれ―扱垂。

雜歌下

題しらず　よみ人しらず

世のなかはなにかつねなる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀨になる

幾よしもあらじわが身をなぞもかく蜑のかる藻に思ひみだるる

雁のくるみねのあさ霧はれずのみ思ひつきせぬ世のなかのうさ

小野篁朝臣

然りとてそむかれなくに事しあればまづ歎かれぬあなう世の中

甲斐の守に侍りける時、京へまかりのぼりける人に遣しける

小野貞樹

みやこ人いかにと問はば山たかみはれぬくもゐにわぶと答へよ

ふんやの康秀が、三河のぞうになりて、あがた見には、えいで

○飛鳥川―大和國高市郡。山川にて淵瀨變り易し。
○幾よしもあらじわが身―もばや何年も生きて居ろまじきわが身。○かる藻に―刈藻の如くに。刈あげたる藻草は、そのさま亂れたればいふ。
○はれず―霧の晴れぬに心の晴れぬをかく。朝霧までは序。
○そむかれなくに―世を遁れられぬのに。
○くもゐに―遠方に。
○三河のぞう―三河國の椽。國衙の三等官。○あ

がたみ—田舎見物。

○身をうき草—身の憂きに、浮草をかく。○いなむ—去なん。

○こと—言。○うたて—いやなもの。○ほだし—馬などの足を繋ぐ綱。轡

○いづらわが身の云々—どれどこにわが身といふ者があるぞ、いつ死なんも知れれば、あつてもないやうだ。

立たじやといひやれりける返りごとによめる　小野小町

侘ぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

題しらず

あはれてふことこそうたて世の中を思ひ離れぬほだしなりけれ　よみ人しらず

あはれてふことの葉ごとにおく露はむかしをこふる涙なりけり

世の中のうきもつらきもつげなくにまづしるものは涙なりけり

世の中は夢かうつつかうつつとも夢ともしらずありてなければ

世の中にいづら我身のありてなし哀とやいはむおなうとやいはむ

山里は物の寂しきことこそあれ世のうきよりは住みよかりけり　惟喬親王

白雲のたえずたなびく峯にだにすめば住みぬる世にこそ有けれ

○しくめる—頻に吹くやうである。しくは頻の意。

○やは—やは疑辞、はは添辞。

○あなうの花—あゝ憂に卯の花をかく。

○かけ道—棧道。○踏ならして—踏み平して、奥深く引籠らう。

○岩ほの中—岩のたちめぐれる山中。○かは—かは疑辞、はは添辞。

○山のまにまに—山のあるまゝに、どこまでも往つて。

○うけく—うきの延言。

○ゆきやけなまし—行き隠れよう。雪の消ゆるをかく。

知りにけむ聞きてもあるかいづくにか世をばいとはむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ　よみ人しらず

世の中は昔よりやはうかりけむわが身ひとつのためになれるか

世のなかを厭へ世のなかは涙のさわぎに風ぞしくめる　そせい

三よし野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ

世にふればうさこそまされみ吉野の岩のかけみち踏ならしてむ

いかならむ岩ほの中にすまばかは世のうきごとは聞えこざらむ

足ひきの山のまにまに隠れなむうき世のなかはあるかひもなし

世の中のうけくにあきぬ奥山の木の葉にふれるゆきやけなまし

おなじもじなき歌　物部良名

○うきふし―憂き場合、竹の節をかく。
○吳竹の―ふしにかゝる序詞にて、驚によせたり。○竹のよ―節と節との間○はし―何方へもつかぬ半端。○高津のみこ―桓武帝の皇女にして嵯峨帝の妃。
○たぎ―手繰り。○いさり―漁り。
○事にあたりて―敕勘を蒙る。

世のうきめ見えぬやま路へ入らむにはおもふ人こそ絆なりけれ
　山のほうしの許へ遣しける　凡河内躬恒
世をすてて山に入る人やまにてもなほうき時はいづちゆくらむ
　物思ひける時、いときなき子を見てよめる
いまさらに何おひづらむ竹の子のうきふし繁き世とは知らずや
　題しらず　よみ人しらず
世にふれば言の葉しげき吳竹のうきふしごとにうぐひすぞなく
木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我身はなりぬべら也
　或人のいはく、高津のみこの歌なり。
わが身からうき世のなかと歎きつつ人のためさへ悲しかるらむ
　おきの國に流されて侍りける時よめる　篁　朝臣
おもひきやひなのわかれに衰へてあまの繩たぎいさりせむとは
　田村の御時に、事にあたりて、津の國の須磨といふ所に籠り侍りけるに、宮のうちに侍りける人に遣しける

○篠壺たれつつ―海士のやく藻鹽の垂るゝに、しほたるをかく。しほたるは物思にしほ〳〵とすること。
○左近將監―左近衛府の判官。○とけて―免官になる。○あま彦―山彦。○身をたどる世に―自分の身を人のか自身のかと分りかねる時節に。
○出でがて―出世のなり難く。
○ありはてぬ命―生きどほしにはならぬ僅の命。
○みこの宮のたちはき―東宮の帶刀。この東宮は醍醐帝の皇子保明親王。○筑波―常陸國新治郡。○春のみやま―春の宮に深山をかく。
○時なりける―時を得て權勢のある。○ひかりなき谷―日の光の當らぬ谷。不遇のわが身を喩ふ。

わくらばにとふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつつわぶと答へよ
　左近將監とけて侍りける時に、女のとぶらひにおこせたりける返事に、よみて遣しける　在原行平朝臣
あま彦の音づれじとぞ今はおもふわれか人かと身をたどる世に
　つかさのとけて侍りける時よめる　平　貞文
憂世には門させりとも見えなくになどか我身の出でがてにする
ありはてぬ命まつまのほどばかりうきごとしげく思はずもがな
　みこの宮のたちはきに侍りけるを、宮仕つかうまつらずとて、とけて侍りける時に　宮地　清樹
筑波ねのこのもとごとにたちぞよる春のみやまの陰をこひつつ
　時なりける人の、俄に時なくなりて歎くを見て、みづからの、歎きもなく、喜びもなきことを思ひてよめる　清原深養父
ひかりなき谷には春もよそなれば咲きてとく散るもの思もなし

桂に侍りける時に、七條の中宮とはせ給へりける御返りごとに
奉れりける　伊勢

久方のなかにおひたる里なればひかりをのみぞたのむべらなる

紀利貞が、阿波の介にまかりける時に、馬のはなむけせむとて
けふといひおくれりける時に、ここかしこにまかりありきて、
夜ふくるまで見えざりければ、遣しける　業平朝臣

今ぞしるくるしきものと人またむ里をばかれずとふべかりけり

惟喬のみこの許にまかり通ひけるを、かしらおろして、小野と
いふ所に侍りけるに、正月にとぶらはむとてまかりけるに、比
叡の山の麓なりければ、雪いと深かりけり。しひてかの室にま
かりいたりてをがみけるに、つれづれとして、いと物悲しくて、
歸りまうできて、よみておくりける

わすれては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見むとは

深草の里にすみ侍りて、京へまうでくとて、そこなりける人に
よみておくりける

年をへてすみこし里を出でていなばいとど深草野とやなりなむ
かへし　よみ人しらず

野とならば鶉となりてとしはへむかりにだにやは君はござらむ
題しらず

我を君なにはの浦にありしかばうきめをみつのあまとなりにき

この歌は、ある人の、昔をとこありけるをうなの、をとこ訪はずなりにければ、難波の三津の寺にまかりて、尼になりて、よみてをとこに遣せりけるとなむいへる。

かへし

難波潟うらむべきまも思ほえずいづくをみつのあまとかはなる

今さらにとふべき人もおもほえず八重むぐらして門させりてへ
友だちの久しくまうでこざりける許に、よみて遣しける
みつね

○桂―山城國葛野郡。○七條の中宮―宇多帝の中宮。藤原基經の女溫子。
○久方の中におひたる里―月中に生ひたる桂といふ名の里。○ひかり―月の光、中宮を喩ふ。
○かれず―離れず。不沙汰をせずに。
○小野―山城國葛野郡。
○むろ―庵室。
○かりに―狩に、假初の意をかく。
○なには―何に難波をかく。○うきめ―憂き目に浮海草（ウキメ）を寄す。○みつ―見つに三津をかく。三津寺は大阪にあり。○あま―海人に尼をかく。
○いづくをみつの―私の心の何處を見つけて。みつは見つに三津をかく。○八重葎して―八重葎を以て。○門させりてへ―門をさしてありといへ。

○浮草の―うきの序詞。○れをたえてこぬ―浮草の根を絶えたやうに、うち絶えてお出がない。○身を捨てゝ云々―わが心はこの身を捨てゝ、わきへ往つたのであらうか。

○思ひこし路―思ひ來しに、越路をかく。

○おもひやる―想像して居る。○わが世はへなむ―自身の一生はこゝに住んでくらさう。○菅はらや伏見の里―大和國添下郡。○三輪の山―大和國城上郡。

みづの面におふるさ月の浮草のうきことあれやねをたえてこぬ
　人をとはで久しうありける折に、あひて怨みければよめる

身をすてて行きやしにけむ思ふよりほかなるものは心なりけり
　宗岳大頼が、越の國よりまうできたりける時に、雪のふりけるを見て、「おのが思は、この雪の如くなむつもれる」といひける折によめる

君がおもひ雪とつもらば頼まれず春よりのちはあらじと思へば
　宗岳大頼

きみをのみ思ひこし路のしら山はいつかは雪のきゆるときある
　越なりける人に遣しける　紀貫之

おもひやる越のしら山しらねどもひと夜も夢にこえぬ夜ぞなき
　題しらず　よみ人しらず

いざここにわが世はへなむ菅はらや伏見の里のあれまくもをし

わがいほは三輪の山本こひしくばとぶらひきませ杉たてるかど

○都のたつみ―京から東南の地。○しかぞすむ―かく憂いとも思はず住んで居る。○うぢ山―山城國宇治郡。世の憂きをかく。

○いく世の宿なれや―かやうにして、何年を經過した家であるかして。

○なべに―それにつれて。

○人ふるす云々―自分は古物扱にされる所を厭うて。○奈良の都も云々―奈良の都も古里といへば、わが爲には憂き名であつた。

○わがならむ―わが物ならん。

○風のうへに―風にまかせて。

わがいほは都のたつみしかぞすむ世をうぢ山とひとはいふなり
　喜撰法師

あれにけりあはれいく世の宿なれやすみけむ人の音づれもせぬ
　奈良へまかりける時に、あれたる家に、女の琴ひきけるを聞きて、よみて入れたりける　よみ人しらず

わび人の住むべき宿と見るなべになげきくはへる琴の音ぞする
　初瀬にまうづる道に、奈良の京にやどれりける時よめる　良岑宗貞

人ふるす里をいとひてこしかども奈良の都もうき名なりけり
　二條　題しらず　よみ人しらず

世の中はいづれかさしてわがならむゆきとまるをぞ宿と定むる

あふ坂のあらしの風は寒けれどゆくへ知らねばわびつつぞぬる

風のうへにありか定めぬ塵の身は行へも知らずなりぬべらなり

家を賣りてよめる　伊勢

あすか川淵にもあらぬわが宿もせに變りゆくものにぞありける

筑紫に侍りける時にまかり通ひつつ、碁うちける人の許に、京に歸りまうできて遣しける　紀友則

ふる里は見しごともあらず斧の柄のくちし處ぞこひしかりける

女友だちと物語して、別れてのちに、遣しける　みちのく

あかざりし袖の中にや入りにけむわがたましひのなき心地する

寛平の御時に、もろこしのはうぐわんに召されて侍りける時に、東宮のさぶらひにて、をのこども酒たうべけるついでに、よみ侍りける　藤原忠房

なよ竹のよながきうへに初霜のおきゐてものをおもふころかな

題しらず　よみ人しらず

かぜふけばおきつしら浪たつ田山よはにや君がひとり越ゆらむ

○ごと—如く。碁をよす。○斧の柄のくちし—晋の王質が石室山に到り、童子の碁を圍むを見居しに局未だ終らざるに、斧の柄の朽ちたりといふ故事による。

○もろこしのはうぐわん—遣唐使の判官。三等官なり。

○なよ竹の—夜長きの序詞。○初霜のおきの序詞。

○しら浪たつ田山—白浪のたつに立田山をかく。白浪までは序詞。

○たがみそぎ云々—誰が禊して放ちしゆふつけ鳥か。

○ゆくへも知らぬ云々—濱千鳥が飛んで行方も知らぬに、砂に足跡を殘すやうに、我も書きとめておくよ。

○貞觀の御時—清和帝の御時。

○檜の葉の云々—檜といふ名を貰ひ持てる奈良の宮の時代。○ふるごと—古言。

○聞えつがなむ—段々に聞え次いでもらひたい。

或人、この歌は、むかし大和の國なりける人のむすめに、ある人住み渡りけり、この女、親もなくなりて、家もわろくなりゆくあひだ、この男がふちの國に、人をあひしりて、通ひつゝ、かれ樣にのみなりゆきけり。さりけれども、つらげなるけしきも見えで、かふちへいくごとに、をとこの心の如くにしつゝ、いだしやりければ、あやしと思ひて、もし、なきまに、こと心もやあると疑ひて月の面白かりける夜、かふちへいくまねにて、せんざいのなかにかくれて見ければ、夜ふくるまで、琴をかきならしつゝ、うち歌きて、この歌をよみてれに、それよりまた、外へもまからずなりにけり、となむいひ傳へたる。

たがみそぎゆふつけ鳥かから衣たつ田のやまにをりはへて鳴く

わすられむ時しのべとぞ濱千鳥ゆくへも知らぬあとをとどむる

貞觀の御時、萬葉集はいつばかり作れるぞと問はせ給ひければ、

文屋有季

神無月しぐれふりおける楢の葉の名におふ宮のふるごとぞこれ

よみて奉りけるついでに奉りける　大江千里

蘆たづのひとりおくれてなく聲は雲のうへまできこえつがなむ